
空色のリセリア

嘉月 幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空色のリセリア

【Nコード】

N0272BA

【作者名】

嘉月 幸

【あらすじ】

《鳥籠の地》と呼ばれる、外界と隔絶されたレーレヘイト大陸。その地で帝国軍の操縦士を務める《空帝》ことヒューイは、嵐の日、リセリアと名乗る身元不明の少女を助ける。その少女を一時的に保護・監視することになったが、まるで浮世離れたような雰囲気において、彼女に不審なところは見られない。

しかしある日、ヒューイの目の前に現れた敵国操縦士アルクスが『リセリアを渡せ』という要求を突きつける。リセリアは一体何者なのか？

小さな籠の中、空を求め続けた飛行機乗りたちの物語。

序章 暴風

空を愛し、空に愛されし者よ

カライロ 空色の呼び声に応えし時

蒼穹の頂きにて相見え

おいて 追風に舞う強き翼を以て

鳥籠は開かれん

その言葉は、いつの頃からか空を翔ける者たちの間で語り継がれてきた。

閉ざされた海、閉ざされた空。

閉鎖されたこの大陸の飛行機乗りたちは、その言葉を胸に果て無き空を目指し、小さき空を飛び続ける。

この大陸に飛行技術が誕生してから、数百年。
この大地 未だ《鳥籠の地》を飛び出した鳥は、飛行機乗り 一人としていない。

* * *

酷い嵐だった。

十数分前まで頭上一面に至高の空色が広がり、今日の空は澄んでいるな、などと考える暇すらあったというのに、今となってはそんな余裕は欠片もなかった。

空には真つ黒な積乱雲が覆いかぶさり、周囲は真昼だというのに夜中のように暗い。その上、ゴーストに容赦なく叩きつける巨大な雨粒が視界を遮る。

まるで子供が、突然大泣きし始めたような そんな嵐の中を、ヒューイは単機飛び続けていた。

『トライ4！ 応答しろ！ …… ヒューー！』

「……聞こえてる」

縦横無尽に吹き荒れる風に機体を奪われてしまいそうになりながらも、左耳につけたヘッドセットから聞こえる部隊長の怒鳴り声に小さく呟き返す。

『聞こえているなら隊列に戻れ！ 勝手に部隊を離れるとは何事だ！ 現状が分かっているのか！』

部隊長の半ばやけくそ気味の言葉が、どこか遠くに聞こえる。分かっている、とヒューイは胸中で呟き返す。

国境線となる山脈付近で、常駐部隊とは異なる敵国の戦闘機部隊を発見したとの報告を軍本部が受けたのが、およそ一時間前。ヒューイの属する空戦部隊には即刻出撃命令が下され、一部隊は報告のあった地域を目指して飛び立った。

そして現在飛んでいるのが、その問題の戦争最前線空域。まだこの周辺には敵機が潜んでいる可能性が高い。いつ戦闘状態に突入してもおかしくない状況だった。

今すぐ隊列に戻り、任務を続行しなくてはいけない。そう頭では理解していても、ヒューイは独り飛ぶことを止められないでいた。

「悪い……ちよつと戻れない」

ポツリと零すヒューイの眼前には、天を突くような山が聳え立っていた。国境線となるツスタン山脈。その山並の中でも最も標高の高い、天空へ続くともいわれている箇所だ。

「呼んでる……声が。呼び声が聞こえるんだ」

『はあっ！？ 訳分からんこと言ってるじゃないでとっ……と戻れ！』

後半、部隊長の声に僅かな雑音が混じる。さすがの豪雨に電波が影響を受けているのか。それとも、自分が部隊から離れすぎているのか。そんな考えが脳裏をよぎった直後、

『ヒューイ！ ヒューイ……！』

ザ、ザザツという強い雑音を最後に交信が途絶えた。それ以降は雑音しか聞こえず、ヒューイは乱雑な動作で無線機のスイッチをオフにした。

風に逆らわず、大気の流れに翼を乗せてゆるりと右に旋回する。

天候は悪化の一途を辿っていた。いつの間にか強い雨風に加えて、獣が唸るような低い雷鳴まで聞こえている。何度か暗雲が光を放し、とうとう稲光が空に走った、その一瞬。

雷光に照らされて山肌に何か白い、小さな物体が浮かび上がった。視界にその白い影が入ったのは、空が一際強く光ったコンマ数秒。しかし、ヒューイはそれを見逃さなかった。

とつさに機体を傾け、暗闇の中地上に視線を凝らす。

シルエットは非常に小さい。ヒューイの飛行高度から距離はざっと見積もって百数十メートルしかないというのに、米粒のように小さく見える。大きさと先ほど見た色からして、少なくとも血の赤色の敵国軍機ではないことは明らかだった。

スツと機体の推進力を落として、徐々に高度を落として接近していく。

そして、ようやく何があるのかと確認できるまで近づき 目を見張った。

「なっ……」

シルエットが小さくて当たり前だった。眼下に見える荒れた山肌の斜面。最悪な視界に移ったのは、力なく倒れる一人の人間の姿だった。

なんでこんな所に人が。そんな疑問が当然のように湧いてきた。

この地域は国境線 つまりは、戦闘の最前防衛線にあたる。それ以前にここは山の中腹にも達していないとはいえ、ゆうに標高一千メートルを超えている。更に、この山は降りても最寄りの街までは相当の距離がある。そう易々と足を踏み入れられる場所ではない。ぐるぐると脳内を回り始めた思考を、頭を振って振り払う。

ここがどこであろうと、倒れている人間を放置しておくわけにはいかなかった。

周囲を見渡し、比較的平坦な場所に機体を無理矢理止め、エンジンは切らずに低出力を維持して車輪ブレーキをかけておく。いつでも離陸可能な状態にして、ヒューイは操縦席を飛び出した。

山肌にはあちらこちらに大小様々な岩が転がっていた。足場の悪さと時折吹き付ける突風に足を掬われそうになりながら、全速力で駆ける。そうしてようやく、人影がはつきりと見え、

「おい、大丈夫……！」

そう言い掛けて、思わず息を呑んだ。

少女、だった。

まだ若い。十代半ばと思われる少女が身に着けているものは、純白の薄手のワンピース一枚だけだった。そのスカートの裾から覗く靴すらも履いていない素足も、地面に投げ出された両腕も日の光を浴びていないように白く、細い。

目を引いたのはそれだけではなかった。

濡れた地面に広がるのは、腰までありそうなほどに長い、淡いブルンドヘア。この大陸には存在しない髪の色だった。大陸の外外界にはそういう容姿をもった人間が存在するといわれているが、ヒューイ自身見るのは初めてだった。

この雨で全身が泥に汚れてしまっているが、その煌髪と白い肌は、暗雲の下であってもなお光を放っているようだった。

あまりにも細く、華奢で 触れれば手折ってしまいそうな、そんな儚く清廉な少女の姿に、ヒューイは呼吸すらも忘れてその場に立ち尽くしていた。だが、

「あ……」

降りしきる雨音に混じって聞こえた少女の微かな呻き声に、はつと我に返る。

慌てて駆け寄り、少女を抱き起こす。その身体は、見た目から想像した以上に軽かった。

雨で張り付いた髪ごと力任せにゴーグルを額の上に押し上げ、少女の顔を覗き込む。顔にかかっていた少女の前髪を払うと、人形のように端正な顔立ちが顕わになる。

「大丈夫か、しっかりしろ！」

「助け……」

「大丈夫だ！ 俺が助ける。だからしつかり……！」
残る力を振り絞って伸ばされた少女の手を掴み声を荒げるものの、
返答はそれ以降ない。

よく見れば、身体に付着しているのは泥だけではなかった。まるで崖から滑落したかのように、剥き出しの肌のいたるところに無数の擦過傷がある。傷の程度は深くないが、そこから流れ出た血が泥に混じって白い肌を汚していた。

操縦用のグローブを外して、軽く頬を叩く。それでも返答はなく、触れた陶磁器のような肌は長い間雨に打たれていたのか、それこそ人形のように冷え切っていた。

雨に濡れてしまっただけではないよりもマシ、とフライトジャケットを脱いで少女の肩にかけ、両腕にぐっと力を込める。ヒューイはその華奢な身体を持ち上げると、一目散に機体へと走った。

この子がどういう経緯でこのような状態に陥っているのは分からないが、ひとまず基地に連れ帰って手当てしなくてはならない。このままの状態が長く続けば最悪、少女の命に関わることになるかもしれない。

蒼穹色の機体まであと数歩となった、その時。

ごうつと風を切る音とレシプロ機特有のエンジン音を響かせて、頭上を一機の戦闘機が通過していった。反射的に見上げた機体の色は、暗闇に紛れるような暗色のレッド赤。

雨音で接近する音に気付かなかったのか、少女のことに気を取られすぎていたのか。内心自分を叱咤しつつ、少女を腕の中に硬く閉じ込めて、ヒューイは岩陰に身を隠した。

悪天候が幸いしたのか、こちらの姿にも機体にも気付かなかったよう、敵機はそのまま上空を通り過ぎていった。

少女を再び抱え上げ、操縦席に収まる。少女が小柄なおかげで、彼女を膝の上に乗せた状態でも何とか操縦できそうだった。

敵機が戻ってこないうちに、この空域を離脱しなければいけない。そのため猶予は、あまりなかった。

（嵐の終わり、か）

突発的に発生する積乱雲は、嵐をもたらずが大抵は短時間で収まる。

ふと南の空　自国の拠点がある地域　を見れば、積乱雲の切れ目は直ぐそこまで迫っていた。それにあわせて徐々に雨足は弱くなり、空には明るさが戻ってきている。

これなら本来一人用であるこの機体でも、それなりの安全性を持つて飛べるだろう。だが、同じく敵機の機動性も、こちらの捕捉されやすさも格段に上がる。おそらく、次は確実に見つかる。

先程の無理な着陸でエンジンに異常をきたしていないか確認しつつ、ヒューイは離陸のタイミングを図る。

離陸のことを考えずに着陸したせいで、機体の進行方向には離陸速度に達するために必要な滑走距離の半分もない。その先は　断崖絶壁といっても過言ではない急斜面になっている。最善の離陸法は、崖から飛び出し、山肌を撫でるように吹き上げる風に乗る方法だろう。

無骨なゴーグルを、下ろす。額の上から、目元へ。

スロットルレバーを最大まで押し込もうとし　視界の左端に、高速で接近する機影を捉えた。つい数分前に頭上を通り過ぎた敵機が、左後方からヒューイの乗る戦闘機に向かって一直線に飛来する。機体前頭部に取り付けられている機銃は、間違いなくピタリとこの機体に照準されているだろう。

背筋を這い上がる、悪寒。

ヒューイは全力でレバーを押し込んだ。エンジンが全開になると同時に、ブレーキを解除。

機体が滑るように動き出した直後、暴風のような弾丸の嵐が右主翼の後ろに降り注いだ。

「くっ……」

間一髪避け　というわけにはいかなかった。直撃は回避したものの、いくつか補助翼とフラップを掠めていく。いずれも機体に

致命的なダメージを与えるものではない。だが、

「つつっ」

右前頭から雨に混じって垂れた真つ赤な液体を右腕で無造作に拭く。その右腕からも鋭い痛みが走った。

二発。避け切れなかった弾の一発が頭を浅く、もう一発が右肩を抉るように掠めていた。

敵機は速度を落とさずヒューイの上空を通り過ぎる。恐らくは旋回して、今度はヒューイの正面に回りこむつもりだろう。

しかし、それよりもヒューイが崖から飛び立つほうが早かった。

途端吹き上げてくる強い上昇気流が翼を持ち上げた。一気に敵機よりも上空へ舞い上がる。こうなれば、再度上を取らない限り敵機はそうそう手を出せない。

無論、ヒューイがそれを許すはずがない。

敵機が機首を転換するよりも早く、速度を上げ、追い風に乗るようにして離脱進路をとる。気流を利用してしまえば、こちらの機体の方が軽い分速度が出る。油断しなければ、振り切れる。

「だ、れ……？」

離陸の際に意識を取り戻したのか、少女がうつすらと開いた瞳でヒューイを見上げる。しかし、その消え入りそうな声に直ぐ応えることは出来なかった。

頭部の傷が思ったよりも酷いのか、ゴーグルの隙間から流れ込んでくる血が右目の視界を赤く染めていた。操縦桿を握る右腕の付け根からは断続的に痛みが走り、力を込められない。後方から追ってくる敵機もあり、とても応えていられる状態ではなかった。

だが ヒューイの口はまるで他者に操られているように、滑らかに動き出した。

「ヒューイ」

凜とした、張りのある声で。

「メテオール帝国軍第三遊撃隊所属、ヒューイ・ノルグス」

その名乗りに応える声はない。再び意識を失ったのか、それを確

認する余裕すら今のヒューイにはなかった。けれど

ヒューイ、と。腕の中で少女が呼んだような気がした。

第一章 籠の中の鳥

通り過ぎる雷雲の下にいるようだった。

響く音は大きくなったり小さくなったりと、どこか乱暴な音楽を奏でているかのようにも聞こえる。

確か、先日の飛行中に遭遇した嵐の雷鳴もこんな感じだったかなと。今この場所に呼び出されている原因を思い起こし、ふと目だけを動かして窓の外を見やる。

空は、鮮やかな青色だった。遠くには雲の波も見える。

嵐の気配など欠片もない、いい天気だった。

（あー飛びてえ……）

強い風に乗って飛ぶのも面白いのだが、やはり今日のような穏やかな空の下でのんびり、というのが一番いい。

なによりもう四日も飛行機に乗るところか触れてもいない。空が恋しくて仕方なかった。

真正面から飛んでくる部隊長の怒声はどこ吹く風。そんな様子のヒューイに気付いたのか、椅子に腰掛ける部隊長カルダ・ダグラス少佐の片眉がピクリと跳ね上がった。

とうとう雷直撃か。そんな予想が一瞬よぎる、が。

「……そもそもお前には戦闘機乗り……いや軍人としての自覚が欠けてるんだ。もう少しは」

彼の性分では今ここで能書きも建前も全て捨てて、ヒューイに掴み掛かりたいところなのだろうが、さすがはメテオール帝国軍最年少少佐昇進記録保持者。こらえた。

広々とした光沢のあるデスクの上に広げられている、ヒューイが過去提出した始末書の数々を捲り、カルダは言葉を続ける。だが、

「ふああゝあ」

「……ノルグス少尉。聞いているのか」

「聞いております。ダグラス少佐殿」

思わず欠伸の出してしまった口を押さえながら返した、テンプレ―ト典型的な生返事に。

ブチィ、と。カルダの脳内で何かが断ち切られる音を聞いた気がした。

腰掛けていた椅子を豪快に後ろに倒し、カルダは両手で力の限りにデスクを叩く。

「どこが……聞いてるっていうんだ、この軍紀破り常習犯！　いつもいつも任務に出る度隊列崩して、戦況乱して　お前が軍紀違反するたびに上官の俺まで咎められるんだからな！」

（怒ってる原因、ぜってーそれだろ）

思わず本音が零れてしまったカルダに、内心突っ込みを入れてヒューイは睨み返す。

「あーうつさいな！　分かってるよ独断行動をしたのがいけないんだろ。以後、十二分に気を付けます。はいこれでいいだろ！」

やけくそ気味にそう言い放ち、ヒューイは目の前の上官兼友人を睨み付けた。

メテオール帝国軍カルダ・ダグラス少佐。ヒューイの軍学校時代からの友人で、つい先日、ヒューイの一つ上　二十二歳で軍少佐に昇格した飛行機乗りだ。現在彼は、ヒューイの所属する遊撃隊の隊長を務めている。

一応カルダは上官、態度には気を付けなければいけない。常々そう思っているのだが、どうしても昔からの癖は抜けない。それはカルダも同じのようで、お互い、時に上官と部下という立場を忘れて言葉をぶつけてしまう。

なにより呼び出されてからかれこれ三十分近く、ヒューイは直立不動の体勢でカルダの話を聞かされているのだ。そろそろ我慢の限界だった。

反省の色が見えないヒューイに、カルダの黒曜石の瞳に灯っていた炎が苛烈さを増す。

「それが分かってないっていうんだ！」

伸ばされたカルダの手が、迷わずヒューイの軍服の襟元を掴む。
まだ直りきっていない右肩の傷が、鋭い痛みを発する。

「いつてえ！ 病み上がりなんだから加減しろよ！」

「嘘言え！ 病み上がりつていつたつてただの風邪で寝込んでただけだろうが！ 命令違反の報いだ報い！」

そうカルダが、ヒューイをぐつと力任せに引き寄せる。ヒューイも反射的にカルダの首に絞められたネクタイに手をかける。その時、
「あんた達うるさい」

氷の刃のように鋭い一言が、二人の間に漂う空気を切り裂いた。

ヒューイは反射的にカルダの執務室の入口に目を向ける。そこには、木製の豪華な扉に手をかけ、眼鏡の奥から冷めた視線を投げてくる一人の女性の姿があった。

身を包む、タイトな軍服。ロングスカートの裾からは光沢のある黒のブーツが覗き、首元には同色のネクタイが締められている。結い上げられた髪と、細めの眼鏡が凛々しい印象を強めていた。

「カルダもヒューイも、声、廊下まで聞こえてるわよ」

彼女 ルベリエ・クリソベルの呆れた声に、二人ははっとして手を離す。

そんなヒューイとカルダを交互に見比べて、ルベリエは深々と溜息を吐いた。

「ほんつともう……二人とも子供じゃないんだから」

「すみません……」

異口同音に謝罪の言葉を唱え、視線を落とす。まるで母親に怒られている少年のような二人の姿に、ルベリエの視線の温度が一段階下がるのを感じた。

ルベリエは、今は別の部署に異動してしまったが、一年前、任務中の事故が起こるまでは同じ部隊で翼を並べていた仲間である。

軍内の階級ではカルダの方が上なのだが、多少の年齢差のせいもあるのか、どうしてもルベリエだけにはカルダも頭が上がらないのだ。

「そんな大声出していると、この子が怖がるでしょう」

そう言ってルベリエはすっと、身体を横に一步滑らせる。長身のルベリエの後ろ　そこに、見覚えのある少女が佇んでいた。

室内でも日の光のように輝くブロンドヘアと、白磁のような手足。純白の薄手のワンピースを纏う、線の細い身体。

忘れるはずがない。あの嵐の中で見た、記憶に強く焼きついて離れることのない少女がそこにいた。

「君は……」

呆然とヒューイは呟く。しかし、それに続く言葉が何故だか出てこなかった。

少女は何かを伺うようにルベリエを仰ぎ見る。それに対し、ルベリエは柔らかな笑みを投げかけると、少女は笑顔で小さく頷き返した。

まるで、野に咲くシロツメクサが花開くような笑みだった。

少女は少し躊躇いがちに、けれど軽い足取りでヒューイに歩み寄ってくる。ふわりふわりと腰まであるブロンドが宙に舞い

「!？」

抱きつかれた。

眼前で止まるかと思いきや、少女は最後の一步を強く蹴ってヒューイに飛びついた。

予想もしなかった出来事に、ヒューイは身体を硬直させた。何をされているのか一瞬理解できず、抱きつかれた勢いそのままにふらつくが、危ういところで少女の身体をしっかりと抱きとめる。

それから腕の中の少女を見ると　彼女は幸せそうな笑みを浮かべてでヒューイの胸に顔を埋めていた。

再び硬直。意識が遠退きそうになる。自慢できる話ではないが、この年になるにも関わらず、ヒューイにとってその手の話は、別次元の存在と言つていいほど縁遠いものなのだ。

「え、ええっと、ちょっ?　君　」

何故、女の子に突然抱きつかれているのか。何でこの子は俺の胸

に顔を埋めているのか。

自体が飲み込めず、両手を挙げ白旗を振るヒューイはとっさにルベリエとカルダを見た。

「お前、その子のこと気にしてただろ。だからちよつとルベリエに頼んで、連れて来てもらっただんだ」

「助けてくれたあんたが怪我して寝込んでる、なんて言ったらすごい心配してたんだから」

身体に細い腕を回している少女は、よほどヒューイの事を気にかけていたのか、腕の力を緩める気配がなかった。

そんな少女に、ルベリエは苦笑を漏らす。

「リセリア。ヒューイが困ってるから」

「あ、はい」

控えめな返事をし、リセリアと呼ばれた少女は名残惜しそうにヒューイから身を離す。

「ごめんなさい。本当に、会えて嬉しくて……」

少し照れたように頬を染めるリセリア。その小さな仕草さえも、目を奪う。あの嵐の中で、光を放っていると感じたが、その印象は日の下でも変わらなかった。

背筋を伸ばし、リセリアは後ろで手を組みヒューイを見上げる。

「改めまして、リセリアです。助けてくれてありがとうございます」

嬉しそうに細められた瞳は、空のように澄んでいた。

* * *

整えられたカルダの執務室に、紅茶の香気が漂う。まだカルダとヒューイの間で仕事の話が残っている、と知ったルベリエが淹れてくれた紅茶だった。

「もう、カルダがさっさと話を済ませないからよ。手早く終わらせてよ」

「すみません、ごめんなさい」

淹れてくれたルベリエは、平謝りするカルダにぶつくさと文句を漏らしながら、リセリアと共にバルコニーへ出て行く。

当初の予定では、ヒューイへの説教が終わる頃に丁度リセリアを連れて来てもらうつもりでルベリエに時間を指定していたらしい。

意気消沈のカルダはヒューイの向かいのソファに腰を下ろし、深々と溜息を吐いた。そんな彼を見て、ヒューイは「ざまあみろ」と心中で罵る。

バルコニーのガラス戸が完全に閉じられるのを確認し、ヒューイは口を開いた。そう、ここからが、本題だった。リセリアを部屋の外に出して話さなければいけない事。

「身元確認、取れなかったか」

「ああ」

驚き一つ見せず状況の確認をするヒューイに対し、カルダはカチヤリ、とカップの中の紅茶に口をつけながら平静に応じた。

ヒューイが負傷しながらも、リセリアと共に基地まで帰還したのは、四日も前の事である。

ヒューイの怪我は、そう酷いものではなかった。しかし、あの雨の中での飛行でずぶ濡れになったヒューイはその後高熱を出し、三日間も寝込むという羽目にあつたのだ。体調が戻つたのは今朝方の事で、それまでは基地の一角にある自室に缶詰状態だったのである。カルダもカルダでその時の報告や、ヒューイが勝手に連れて来たリセリアの処遇の対応に追われていたらしく、二人揃って落ち着いて話す機会が得られず今に至る。

「近隣の村はおるか、メテオールの戸籍データに照合しても該当しなかったからな。それでお前に詳しいことを聞こうと思ったんだ」

通常、軍が何らかの事情で一般人を保護した場合は、一時的に軍でその身柄を預かるが身元の確認が取れ次第しかるべき処置を取る。メテオール帝国民であれば、その身元照合は一日二日程度で終わる。しかし、リセリアは三日経った現在でも軍に身柄を保護されている。つまり、身元確認が取れなかったということだ。

故に、カルダはこうしてヒューイを呼び出したのだろつ。

「今のところ、上にはあの子を拾った状況とか、簡単なことしか報告できてないからな」

「……何？ 上が報告しろつて言つてきてるわけ？」

一見すればただの少女にしか見えないリセリアに対して、軍上層部が必要に情報を求めてくるのも不思議だった。

「見つかった場所が場所だしな。それに、あの髪の色。貴重な『外』の人間じゃないのかつていうことだ」

「そつ……！ ……外つて、おい。前に見つかったのいつの話だよ」突拍子もないその推測に、ヒューイは思わず今まさに口に付けようとしていた紅茶を噴出しそうになる。しかしすぐさま落ち着きを取り戻し、改めて紅茶を啜った。ミルクも砂糖もないストレートティーの程よい渋みが舌の上に広がる。

このレーレヘイト大陸は、閉鎖された地だ。

大陸周囲の海は、岩礁輪と呼ばれる円環状の岩礁地帯にぐるりと囲まれており、いかなる船もその海域を通り抜けることは出来ない。随分と昔には岩礁輪を抜けての大陸脱出を試みた者もいたらしいが、過去に成功例はない。今でもその海域には、座礁した数々の船の残骸が散らばっている有様だ。

そこでこの大陸の人々は、空に大陸外への脱出手段がないものかと模索し始めた。そうして航空機が生まれ、ようやく大陸の外を見ることが出来る。そう思われた。

だが無情にも、天は人々を見放した。

環気流 強い上昇気流と下降気流が複雑入り乱れながら岩礁輪上空を取り囲む、不可思議な乱気流が存在していたのだ。それに阻まれ、今日までに大陸外への飛行を成功させたものは一人としていない。

近年、飛行技術の向上が著しく、飛行機が環気流を打ち破るのは時間の問題だともされている。それでも、それがいつになるのかは見当も付いていない。

陸海空路共に、大陸外へ出る手立てがないこの地を、人は《鳥籠の地》と呼んでいた。この大陸はまるで人を閉じ込める大きな鳥籠。飛行機乗り鳥は大陸外籠の外を目指し、今この時もあがき続けている。

しかし、閉鎖された地とはいっても、鳥籠の外からの交流がゼロなわけではない。岩礁輪より外の海で漂流し、この大陸に流れ着いた者が極稀にいる。

『外』との交流が断絶されているこの大陸では、『外』から来た人間は、大陸外の様子を知るための貴重な情報源だった。《鳥籠の地》を脱出する方法や、飛行技術の飛躍的向上を望めるものもあるかもしれないと、帝国は『外』の情報は喉から手が出るほどに欲しがっている。

「俺に聞いてくるってことは、もうリセリアからは色々聞いたんだろ？」

「聞いたつていえるほど、聞けたわけではないけどな」

ヒューイは、カルダが上に報告したものと同様の報告書のページを捲る。そこにはあどけない顔を映したりセリアの写真と、彼女の簡易プロフィールが記されていた。だが出身地は書かれておらず、名前も『リセリア』とだけでファミリーネームも何もない。読み進めると、その他にも、いくつかの備考が報告されているが、その量は圧倒的に少ない。たった数枚の報告書はあつという間に読み終わった。

「これだけ？」

「これだけ。だから拾ってきた当人に、当時の状況を詳しく聞かせて欲しいんだよ」

「と、いつでも……なあ……」

うーん、とヒューイは唸り、手元の報告書をローテーブルの上に放り投げる。

リセリアについてヒューイが報告できることは、ゼロに等しかった。何せリセリアとともに会話したのは先ほどのが初めてである

し、当時の状況について言えることは、既にカルダも全て知っているのだ。

前線での発見。負傷していたこと。敵機との遭遇。それらはリセリアとヒューイ機の状態を見れば、一目で分かることだ。

思索。だが、いくら当時の様子を思い返してみても、取り立てて何も出てこなかった。

「もしかしたら、なんだが」

報告書を纏めて端に寄せ、ちらりと、カルダはバルコニーにいるリセリアを伺う。

「……ナディア王国軍関係者って可能性はないのか？」

潜められた声に、ヒューイは知らず意識を研ぎ澄ました。

おそらく、これがカルダ個人として最も聞いておきたかったことなのだろう。そのために、都合の悪くなったりセリアを外に出した。レーレヘイト大陸は、下弦の三日月のような形をしている。丁度、月の影となっている部分が大陸東部から中央にかけて侵食している内海に相当している。三日月型の陸の真ん中にはツスタンド山脈が聳え立ち、北と南に地域を分断している。その南側がヒューイ達の国・メテオール帝国、そして北側を支配するのがナディア王国だ。十八年前に開戦があつて以来、両国は敵対関係にあつた。十六年前には休戦協定が結ばれたものの、その協定も二年前に破られている。

途中、戦争の起こっていなかった十四年間も含め、両国は互いの内情を探るために相手国に密偵や暗殺者を忍びこませていた。それは、現在でも変わっていない。帝国側も当たり前のようにやっているし、逆に皇国の者に侵入されたことも多々ある。

リセリアがそういう手の者じゃないのか。そう言わんとしているカルダの意見に、ヒューイはとっさに首を横に振っていた。

「まさか。スパイだっていうのに、あんな目立つ子送り込んできてどうするんだよ。それに、そうだとしたらなんであんな危ない場所に放っておくんだよ。たまたま俺が通りかかったから彼女はこっ

ちの国に来てるけど、あんな場所だったらメテオール軍に見つかる可能性極低だぞ？」

「逆に言えば、スパイはありえないだろ、と思い込ませるのを奴らが狙ってるって事も考えられるけどな」

鋭い切り返しに、ヒューイは渋面になる。

慎重に物事を考えるのは良いことであるし、分からない話でもない。リセリアが何者か分からない今、カルダも不安要素はなるべく取り除いておきたいのだろうが、少々カルダの考えすぎじゃないか、と思う節もあった。

「俺的には、全然そんな感じしないんだけどなあ」

「俺も同意見」

至極当然に頷くカルダに、ヒューイは眉根を寄せた。

「自分であれこれ言っておいて、それ？」

「あれは客観的に見た意見。まあなんだ……見てりや分かる」

疲れたように空笑いを漏らすカルダに、ヒューイはますます首を傾げる。

そんなヒューイを無視して、カルダは立ち上がった。仕事の話はこれにて終了。退室してもらっていたルベリエ達を呼びに行くのだろう。ヒューイもカルダに続いて立ち上がる。

「とりあえず上への報告は後にしておくとして。ま、ひとまずはしばらく監視を続けるか」

「ん？ 監視？」

「当たり前だろ。一応、敵か味方が分からないんだから。今のところ、ルベリエがリセリアの傍に付いているだろ？」

だからルベリエがリセリアを連れてきたのか、と一人納得して、ヒューイも席を立つ。

ふとバルコニーを見れば、その向こうで訓練用の戦闘機が離陸している様子が見えた。戦闘機、というより飛行機が珍しいのか、リセリアは手摺りにぐっと身を寄せて、飛び立つ機械の鳥を食い入るように見ている。かと思いきや、隣のルベリエに向けて満面の笑み

を浮かべる。その笑顔を見ているだけで、楽しそうな笑い声が聞こえてきそうだった。

しかし、カルダの足はそんな彼女たちの元に向かってはいなかった。何故かカルダは、自分の執務机へ。その一番上の引き出しを開けている。

「あーそうそう、ヒューイ。お前に新しい命令があつたんだっけ」顔を伏せているため、彼の表情を伺う事は出来ない。だが、その切り出し方と口調からして、カルダが絶対に笑みをこらえていることが分かった。長年の付き合いささま。

嫌な汗が背筋を伝う。

引き出しから取り出した、一枚の薄い紙。それをヒューイに差し出し、カルダは軍人らしい引き締められた声で言った。

「メテオール帝国軍カルダ・ダグラス少佐の名において、ヒューイ・ノルグス少尉を、少女リセリアの監視役兼世話係りに任命する」

「はいはい監視役……」

なんだ、女の子一人監視するなんて、どうってことな　くない。監視役兼、なんて言った？

「世話係」

心の声をつい声に出してしまっていたのか、カルダがずっと薄っぺらな紙　指令書突きつけてくる。

「監視役だけならまだしも、なんで世話係も入るんだ！」

思わず声を荒げたヒューイに、カルダはあくまでも淡々としていた。

「しばらくは基地の中で様子を見るが、あの子が基地の生活設備を勝手に使えるわけないだろ？」

「いや、それは……」

分かるが、男の自分に年頃の女の子の面倒が見れるわけないだろ、とヒューイは頭を抑える。

「第一監視役なら今ルベリエが任に付いてるんだろ？」

「ルベリエがリセリアに付いているのは、基地の女手が足りないか

らであつて、彼女だつて通信士としての通常業務がある」

「それは俺も同じだ」

遊撃隊は、いつ出撃が下されるか分からない。飛行訓練や機体のチェックを行った上で、いつでも出て行ける態勢でいなければいけないのだ。

きつい視線で見据えてくるヒューイに、カルダは難しい顔になる。

「しばらくは、第三遊撃隊に出撃命令は下りない」

その確信を持った言い方に、ヒューイは怪訝にカルダを見た。

「ナディア軍が、中央から西にかけての前線戦力を撤退させているらしい」

「撤退？」

「完全撤退というわけではないらしいが、ナディアの王都に戦力を集中させているらしい。何故そんな行動に出ているかは探り中。けど、今のところ仕掛けてくる気配はない」

前線の中央から西というのは、おおよそスタンダード山脈が国境線となっている地域。ヒューイたちが前線に駆り出される地域だ。

そこでの戦闘が起らないとなると、確かに余裕は出てくるかもしれない。

だがしかし、リセリアに四六時中付いていなければいけないというのも、さすがに困る。

未だ納得できない様子のヒューイの心情を見破って、カルダは軽く笑む。

「安心しろよ。ルベリエにも監視役は続けてもらう。日中はヒューイが担当、夜はルベリエつてことで交代制にする」

「あ、ああ。よ、よかった……」

「監視つていつでもお前はリセリアを連れていつも通りにしてればいい。通信官のルベリエと違って一緒にいても機密情報が漏れる事はないだろうからな」

「そうだな。そうしてくれるとありがたい。それなら俺も飛行訓練に出れるし」

訓練の時は、リセリアを近くの誰かにでも預けておけば問題ないだろう。

胸をなでおろすヒューイに、ホント飛ぶことしか頭がないんだな、と苦笑混じりに呆れて、今度こそカルダはバルコニーに向かった。

「ま、大変だとは思うが、独断行動の報いだと思って、頑張れ」

「……何が？」

力のこめられた「頑張れ」の一言に、ヒューイは眉根を寄せて背を向けたカルダを見た。

違和感と同時に覚える、嫌な予感。

「仮にリセリアがあつちの人間だったとして」

そう呟くカルダ。しかし、その後に続く言葉はなかなか出てこなかった。ヒューイが続きを待っている内に、バルコニーから不満顔のルベリエときょとんとしているリセリアが戻ってくる。

そんなリセリアにも聞こえるように、カルダは一言。

「《空帝》ほど目立つ存在はいないだろ？」

せいぜい目立って囂役になってくれ。振り向いたカルダの爽やかな笑みがそう告げているような気がした。

……この野郎。端から人を利用する気かよ。

* * *

通信室や会議室など、基地の中枢機能が集まる中央棟。その一角の廊下では、軍事基地では珍しいかわいらしい声が響いていた。

「本当？　じゃあこれからはヒューイと一緒にいてくれるの？」

リセリアの鈴を転がしたような声が、前を歩くヒューイの背に投げかけられる。しかし、ヒューイが応えるよりも早く、リセリアの隣に並んで歩くルベリエが「そうよ」と短く応えて、しつとりと微笑む。それを聞いたリセリアの顔に、笑顔の花が綻んだ。

リセリアとルベリエを連れてカルダの執務室を後にしたヒューイは、ひとまずリセリアに、これからは自分が行動を共にするという

ことを伝えた。今はルベリエも一緒にいるが、もうしばらくしたら通常業務に戻らないといけないためだ。

「俺は昼間だけ。夜は今まで通りルベリエと一緒にいてもらってよ」「夜はさすがに一緒にいさせられないからねー」

と、ルベリエが背後から釘を刺してくる。背中に感じる視線が、まさしく釘が打ち込まれているように感じる。

「私が一緒じゃなくても大丈夫？」

「うん、平気」

そう優しく問い掛けるルベリエとリセリアは、仲の良い親子か姉妹に見えた。二人とも瞳の色系統が同じ事と、ルベリエの髪がこの大陸の者にしては色素が薄く光加減によって淡い黄金色に見えるせいもあるだろう。

「それと俺、いつも通り仕事場回ったりするけど、リセリアは気にしない？」

「仕事場？」

首を傾げるリセリアの肩から、さらり、と金系の髪が流れる。

カルダには業務は通常通り行つて良いといわれているが、これだけはリセリア本人にちゃんと聞いておかねばならない。監視対象とはいえ、リセリアは年頃の女の子だ。むやみやたらに油臭い機体整備工場や騒音の発生する飛行場に連れて行つて、不快な思いをさせるわけにはいかないだろう。

しかしヒューイの予想とは裏腹に、それを伝えたリセリアは柔らかな笑顔を返してきた。

「大丈夫、ヒューイ。ヒューイと一緒にいれるだけで嬉しい」

リセリアは少し照れたように口元に合わせた手を当てて、ヒューイを見上げてくる。その仕草は可憐だったが、どこか幼く見える。ふと、先程の報告書に書かれていたリセリアの年齢を思い出し、ルベリエを手招き。耳打ちする。

「……リセリアって本当に十六歳？」

「って、私は本人から聞いたわよ。てか、あんたあの子にいったい

何したのよ。なんで会ったばかりのあんたにあんなに懐いてるのよ」
「な、何もしてないっての！」

半眼で顔を近づけながら追及してくるルベリエに、思わず声が大きくなる。

確かに、この四日間一緒にいるルベリエと違い、ヒューイはまだリセリアと数えるほどしか言葉を交わしていない。執務室で顔を合わせた時も違和感を覚えたが、いくらヒューイが助けたとはいえ、見ず知らずの男に対する態度としてはいささか親密過ぎる気がする。慌てて後ろを振り向くと、二人の会話は聞こえてなかったのか、リセリアはきよとし、それからまたニコニコしてヒューイを見る。

カルダの言っていた、「見てりや分かる」の言葉を理解。こんな無垢な笑顔を見せられて、誰がりセリアは敵だと考えられるだろうか。それだけではない。軍人云々という以前に、リセリアの一挙一動はあまりにも幼く、拙いのだ。

油断しないに越したことはないが　リセリアを見てみると、彼女は一体なんだと考えるのが馬鹿らしくなりそうだった。

やがて中央棟の正面出口に辿り着く。表はやはり人が多く、リセリアに好奇の視線が浴びせられる。本人は気付いてないのか、軽い足取りでヒューイの後を付いて来る。

中央棟を出てしばらく歩くと、基地の端に黒く錆びた倉庫が幾つも立ち並んでいるのが見える。戦闘機の整備工場と格納庫だ。リセリアを助けた時に少し被弾していたため、機体の様子が気になって仕方がなかった。

歩調の早まるヒューイの足。その後ろで、ルベリエが足を止める。
「それじゃ、私はここまでで。仕事に戻るわね」

「つと、そろそろ時間か。たまには格納庫に寄ってけば？」

「……遠慮しとく。気分じゃないから」

顔に影を落としたルベリエを見て、ヒューイは小さく「そっか」とだけ応えた。

ルベリエは身を翻すと、颯爽と中央棟に戻っていく。

「リセリアのこと、頼んだわよー。夕飯終わったらその子の部屋に連れて行ってねー」

振り返ることなく、ひらひらと手を振ってくるルベリエに了解と言い、ヒューイは扉が開けっ放しになっている格納庫に入った。途端鼻を突く、機械油独特の臭い。

気になってリセリアを見ると、彼女は嫌な顔一つしていなかった。それどころか、こういった場所が初めてなのか、忙しなく辺りを見回している。

「フェリオット、いるかー？」

何かと懇意にしている整備士を呼ぶ。声はさほど大きくなかったのだが、倉庫内に反響してやけに大きく聞こえた。しかし、いつもここにいるはずの彼からは返事がない。

「リセリア、こっち」

仕方なく、ヒューイは愛機を探す。リセリアは、親を追う小動物のようにヒューイの後を付いて来た。

愛機は直ぐに見つかった。同じくして、首を回した方向にフェリオットの姿を見つける。黒く煤汚れたつなぎに、ぼろぼろの軍手。細身だが、たくましさを感じさせる後ろ姿だった。

機体情報が書かれている紙面をにらめっこしては、その周りの二、三人のパイロットとなにやら話し合いをしているようだった。どうやら先客らしい。

しばらく待つしかないか、と小さく嘆息する。この機体はヒューイ用になっているため、フェリオットに専門で整備を頼んでいるのだ。

と、機体を見ていたリセリアがヒューイを向く。

「これがヒューイの飛行機？」

「え……ああ、そう。最近はずっとこれしか乗ってないなあ」

相棒を労わるように、ヒューイはそつと胴体を撫でた。

帝国最新鋭のノーティスN2B 通称『ホーク』。その機体は、

軍服にも使われている、国色のゼニス・ブルーに染められ、単翼タイプの主翼と尾翼には、白と赤のラインが一本ずつ入っている。

メテオール軍では、通常、操縦士一人ずつに常に乗る機体を決める。愛機というものは存在しない。その時に応じて、状態の良い機体を優先的に戦場に出している。しかし、機体一つ一つにも継続的な調子や癖は存在する。そのため、可能な限りは同じ機体に乗りに続けるのだ。

この機体に乗り続けてもう随分になる。もはや愛機と呼んでも差し支えはなかった。

「ナディア軍より、ちょっとだけ速度は落ちるけど、その分風に乗れる。リセリア助けた時も、これじゃなかったら敵機に追いつかれたかもな」

「そっかぁ……」

眩しそうに青色の機体を見つめるリセリア。こっぴどと機体に額をくっつけ、静かに瞼を下ろす。長い睫が、繊細な影を落とした。

「この翼で私のところまで来てくれたんだね。ありがとう」

水々しい桜色の唇が、慈母のように囁く。その横顔に、ヒューイの心臓が不整脈を打つ。

「リセリア……」

「ごめんごめんヒューイ。説明に手間取っちゃってさ」

その瞬間、空気の読めないのんきな声がヒューイの意識を一気に現実に戻した。この、我が道を行くマイペースな口調は間違いなくフェリオットだった。

「どうしたの、ヒューイ。そんな恨みがましい視線向けて」

「別に……」

歩いてくるフェリオットに、ぶっきらぼうに返す。別にリセリアに何かしようとしていたわけではないが、あの神々しささえ感じた少女の顔をもう少し見ていたかった気がする。

「そう？ あ、その子が、ヒューイが保護したって子？」

基地内の者には身元不明の少女を保護、としか伝えていないため、

ヒューイやカルダが最初に抱いたリセリアに対する警戒心というもの、フェリオットにはなかった。

話の矛先を向けられ、リセリアが不思議そうな顔をする。

「はじめまして。僕はフェリオット・イーグルクロウ。ここで飛行機の整備をしています。よろしく」

「リセリアです。よろしくお願いします」

名乗り返したリセリアに、フェリオットは右手を差し出そうとして手が汚れていることに気付き苦笑した。一瞬目を丸くしたりセリアも、彼の苦笑の意に気付き笑みを零す。

「早速なんだけど、機体はどう？ 被弾はそんなに酷くないと思うんだけど」

その一言にフェリオットは、そうだ、と思い出したように呟いた。クリップボードに留められた紙を数枚捲り、フォーゲルの整備資料を取り出す。

「被弾自体は、大した事なかったよ。右のフラップとエルロンが傷ついていたので、そこは取り替えたけどね。胴体に当たった弾も数発だし、飛行に支障が出るような損傷もなかったね」

「そっか。問題なさそうでよかった」

機体に大きな損傷はなかったこと。加えてフェリオットの至って平静な表情に、ヒューイは内心胸を撫で下ろした。飛行機に関して知識も技術も人一倍抜きん出ているフェリオットなのだが、その分、手に掛けた機体への愛着も操縦士のヒューイ以上に持ち合わせている。機体を傷つけて帰ってくる度に、雷雨が吹き荒れるのだ。それはもう、カルダ以上に。

フォーゲルはヒューイ専用の機体に変わりはないのだが、フェリオットからしてみれば手塩に掛けた子供を預けているような感覚なのだろう。だが、

（被弾、自体は？）

妙に強調されていたフェリオットの言葉に、ヒューイは気付く。その思考を呼んだかのように、汚れきった見た目には似合わない爽

やかな笑顔を見せるフェリオット。ヒューイは反射的に回れ右をしようとしたが、それよりもフェリオットが詰問するほうが早かった。「ヒューイ。機体は大事に扱って、前にも何回か言ったよね」

「大事に、扱ってます、よ？」

いつの間にか口調が敬語に変わる。

「その割には降着装置が随分痛んでただけだなー。石でも回転に巻き込んだのか、プロペラのブレードも欠けてたし」

「こ、心当たりがないなあ」

明後日の方向を見るヒューイに、フェリオットは手元の資料をずっと突きつけてくる。見ろ、ということらしい。仕方無しに受け取ると、今フェリオットが言い連ねた事一つ一つが、こと細かに記載してあった。技師としてのフェリオットの腕は確かなので、これらは紛れもない事実なのだろう。

言葉を失くすヒューイ。言い逃れは出来そうになかった。

「無理な着陸とか、したでしょ」

「黙秘権を行使します」

「したでしょ」

「……すみませんごめんなさいちょっと無理しました！」

なおも三白眼気味の視線を強めてくるフェリオットに、ヒューイはとうとう折れ、諸手を上げてリセリアを救出した時に無理な場所に停めた状況を説明した。

すると意外なことに、その話を聞いたフェリオットの反応は穏やかなものだった。

「まあ、その子を助けるためだったっていうなら、許してあげないこともないけど……リセリア？」

リセリアに視線を向けたフェリオットの眉間に、怪訝そうに皺が寄る。ヒューイも振り向き、目を見張った。

口元に手を当てて、俯くリセリア。覗きこんだ顔は、傍目にも分かるほど血の気が引いて青白くなっていた。

「リセリア、どうした？ 気分でも悪いのか？」

「うつん、大丈夫。ちょっとここの空気が苦しいだけ……」

「だけ、じゃないだろ」

「ここ、空気悪いからねえ」

倉庫内の空気は埃っぽい上に、その埃の粒子一つ一つに油や機械の臭いが染み付いている。苦手な人なら吐き気を催しかねない臭いだ。ヒューイは既にこの空気には慣れているが、それでも時折、いつもこんな場所にいるフェリオットがよく体調を崩さないと思うほどだ。こういった場所が初めてのリセリアにとって長居は辛かったのかもしれない。

とりあえず、倉庫外で新鮮な空気を吸わせるべきだ。ヒューイはリセリアの背をそつと押して歩き出す。

「悪い。あとの整備、適当にやっとしてくれ」

「ん？ ヒューイ、いつもあれこれ文句つけてくるのに、いいわけ？」

「今はリセリアの方が優先」

それにヒューイがあれこれ言わずとも、フェリオットはヒューイの飛び方や操縦の癖をよく知っている。それでもいつも意見が衝突するのは、ヒューイの要求に対してフェリオットがあれこれ試したいと好奇心を出すためだった。だがフェリオットの調整した機体が、飛び辛いわけではないのだ。

「了解、少尉殿。と、ヒューイ。これ直ってるよ」

去り際のヒューイに向かって、フェリオットが何かを投げる。それを、半身を振り返った状態でキャッチ。それは軍のパイロットに一般的に支給されているゴーグルだった。入隊してから三年間、一度も大破せずに使っている愛着ある品だ。四日前に怪我を負った際に、ゴーグルを額の上に上げていたため右目のレンズに罫が入っており、修理に回しておいて欲しいとフェリオットに頼んでいたのだ。ゴーグルを額の上に乗せる。定位置。やはりこれがあったほうが落ち着く。「サンキュ」と小さく感謝の言葉を投げ返し、ヒューイはリセリアを連れて倉庫入口へ向かった。

「ごめんなさい……」

目の端にうつすらと涙を浮かべて謝るリセリアの頭を、ぽんぽんと軽く叩く。その時、

「聞いた？ 理由もなく独断行動取った上に、『外』の女の子連れで来たんだって？」

どこからか、そんな軽薄な言葉が聞こえてきた。

ヒューイは首は動かすことなく、目だけで声の方向を見る。少し遠い、若干機体の陰に隠れるような位置に、先ほどフェリオットに何かの説明を受けていた、数人の操縦士達がいた。よく見ると、別の隊の者だが何度か任務を共にしたことがある顔ぶれだった。皆揃って、ヒューイとリセリアに好奇の あるいは蔑むような視線を向けていた。

（まだいたのか。暇な奴らだな）

「ほら、あの子だろ」

ヒューイに聞こえてないと思っていいのか、それともわざと聞こえるように言っているのか、操縦士たちの声は内輪話にしては大きい。おそらく、後者だろうが。

よくある種類の話だった。ヒューイは関係ない、と割り切ってそのまま外に出ようとする。だが、

「もう仕事復帰だろ？ あれで謹慎も刑罰も一切なしっていうんだろ」

「さすが《空帝》。俺らとは扱いが違うよなあ」

その呼び名に、思わず足が止まりそうになった。だが、歩調を乱すことなく歩き続け、外に出る。その間にも、ヒューイの背に投げかけられる言葉と、視線と、嘲笑。

「一般人こんなところに連れてきていいのかよ」

「でも身元不明だって聞いたぜ？ 一般人じゃなくて、案外敵国の人間だったりするんじゃないの？」

「さあ？ 《空帝》がいって言えば、なんでも許されるのかもよ？」

格納庫中に響く、笑い声。

今すぐ踵を返し、駆け出し、全員纏めて殴りたくなる衝動に駆られそうになる。ヒューイは拳を強く握り締め、それを押さえ込んだ。そう。あんな奴ら、軍内にいくらかでも蔓延っている。一々相手にしていたら、きりがないのだ。

「せいぜいお偉いさん方の期待を一身に背負って飛んで貰えばいいさ」

「ヒューイ……？」

異変を察したりセリアが、不安そうな眼差しでヒューイを見上げる。

ぎりつと。噛み締めた奥歯が、小さく歯軋りを立てた。

第二章 風の赴くままに

メテオール帝国には、国を東西に横断する一つの大きな川が流れている。その名を、アズール大河。澄んだ広い水面は、空色をよく映す。そのために、空の青の名が冠されたとされている。

その大河の北側に広がるヴェルナー平原は『春風の吹く地』とも呼ばれ、その別名からも分かるとおり、一年を通して穏やかな風が吹く。平原を越えるとナディア皇国との戦闘空域である渦島内海が見えるせいもあるだろうが、その気候の特色から平原には飛行訓練場を始めとした軍事施設が数多く存在しているのだ。

ヴェルナー平原西部に位置するヒューイ達の拠点基地から東に飛ぶこと、およそ三〇〇キロ。その日、小さな軍管理施設に、ヒューイたち第三遊撃隊の姿があった。

フォーゲルの操縦席に乗り込み、ヒューイは額の上にあったゴーグルを目に下ろす。エンジンをふかし、離陸準備に入る。それから後部座席に収まる小さな人影を振り返った。

「注意したこと覚えているな？ 絶対席は立たないこと、体調が悪くなったら直ぐに言うこと。機内無線の使い方は覚えたか？」

「大丈夫です、《空帝》！」

（その呼び方止めるって……）

よほど飛ぶのが楽しみらしく、十歳を過ぎた位であろう少年は興奮した様子で応える。そんな少年から注意をそらさず、ヒューイは人知れず溜息を零す。どうせ止める言ったところで、定着しつつあるその呼び名が消えるわけでもないのだ。

「こちらヒューイ。いつでも行ける。どうぞ」

『了承した。ノルグス少尉、しばらく待機せよ』

滑走路から少し離れた位置に設置されたテントの下で、無線機器を操作するカルダから、無線越しに応答が返る。カルダの隣には、椅子にちょこんと座るリセリアの姿も見える。

軍が管理する、戦災孤児施設。そこで定期的に行われるイベントに、今回はヒューイたちが参加することになったのである。内容は至って簡単だ。この施設で暮らしている、身寄りのない子供たちを一人ずつ乗せて飛ぶことである。

戦争で辛い思いをした子供たちに、空を飛ぶ楽しみを教えること。それがこのイベントの主旨だ。しかしその裏には、子供たちに空への興味を持たせることと、戦闘機への恐怖を取り払う、という目的がある。それは全て次世代のパイロット育成、という軍のいやらしい魂胆だ。

そのためこのイベントには、最前線で使われている戦闘機が必ず用いられる。

一般的に制空戦闘機は一人しか乗ることの出来ない単座式のものが多いが、ヒューイ達の機体には、検知器や無線機などの取り扱いをするための狭い席が、操縦席の直ぐ後ろに設置されている。リセリアを助けた時は、気絶した彼女を乗せる間もなかったため使わなかったが、今回はそこに子供たちを乗せている。

しばらくすると、ヒューイの前後に並んでいた仲間の機体からも次々と離陸準備完了の声が上がった。いずれの機体もヒューイと同じように、後部座席に子供を乗せている。やがて列の先頭の機体から順に離陸を始める。

「よし、心の準備はいいか？」

「は、はいっ」

先ほどまでの威勢のよさはどこへ行ったのか。いざとなつて、がちがちに緊張しだした少年にヒューイはぐつと親指を立てて見せる。これから目の当たりにする光景を見たら、少年の緊張なんか一瞬で吹っ飛ぶだろう。

見上げれば、視界を覆いつくす青と白の模様。目を閉じ、一度だけの深呼吸をする。いい風が吹きそうだった。

溜めていた機体の力を全解放する。滑走路を滑り始めた機体は揚力を受け、徐々に、徐々に空へ向かって上昇していく。

背後で少年が感嘆の声を漏らす。風に流されるその声を微かに捕らえ、ヒューイの口元に自然と笑みが零れた。

軍の回りくどい策略は気に食わない。けれど、子供たちに空を見せてあげるための翼なら、惜しくなかった。

* * *

三度の子供たちとの飛行を終え、ヒューイは地上に降り立った。まだ飛んでいる機体は数機あるが、ヒューイはこれ以降飛ぶ予定はなかった。

基地から連れてきた通信士一名と共に、無線で各機と安全確認を行うカルダに手を振る。

カルダは耳に掛けていたヘッドセットを少しずらしてヒューイを振り返る。

「おつかれさん、ヒュー。あとは適当に休んでくれ」

「それもいいんだけど……リセリアは？」

ヒューイは今回のこのイベントに、リセリアも連れてきていた。

理由は単純で、もう一人の監視役であるルベリエが、仕事が忙しく日中リセリアと一緒にいられないためだった。かといって部屋に閉じ込めておくのも不憫であつたし、何より最有力策であつた他者

リセリアにとって見ず知らずの人　にリセリアを預けることは、本人が強く拒んだため、ヒューイはこの仕事に同行させていた。ここのらば、カルダを始めとした他の隊員もいることだし、人の目には事欠かない　はずなのだが。

最後のフライトの前までは、カルダの傍で大人しく椅子に座っていたはずのリセリアの姿がなかった。まさかカルダがリセリアに勝手な行動を許すとは思えないが。

「ああリセリアなら……ん」

と、カルダが無造作に指差した先。豊かな芝が張られた、施設の庭の真ん中で、

「お姉ちゃん髪きれー」

「うらやましいなあ……」

「わわ……」

リセリアは、幼い女の子を中心とした集団に囲まれていた。珍しい金のストレートヘアをあっちこっちから触られてどうしていいかわからない様子だった。

いつまでも白いワンピース姿でいさせるわけにもいかず、しばらく前からリセリアは、パイロットに支給される半袖タイプの軍服を着ていた。下は細い足の映えるブリーツスカートとミドルブーツの組み合わせになっている。今回の仕事に同行させるに当たり、ヒューイは軍服に似合うように見立てた帽子を彼女に渡していた。一目立つ、長い金の髪を隠すためであったのだが　風に飛ばされたのか、どこかに行ってしまったようだ。

「リセリア」

そうリセリアを呼ぶと、彼女だけではなく周囲の子供たちまでが振り向いた。思わず、その視線の量と圧力にたじろぐ。

「悪いな、みんな。お姉ちゃんが困ってるから離してくれるか？」

途端、子供たちから「えーっ」と不満の声上がる。どうやらリセリアは随分と子供たちに気に入られているらしい。もしかしたら保母さんとかの才能があるかもしれない。

中々折れてくれない子供たちに手間取っていると、施設で子供たちの面倒を見ているらしい女性が現れ、リセリアを解放してくれた。残念そうにしている子供たちに手を振りつつ、機体の方へと戻る。

「あ、ヒューイ。もう飛ぶのは終わりなの？」

「俺は、な。あとは適当に待機してろってさ」

本当はもうちょっと飛び回って来たいところだけど、とぼそつとヒューイは付け加える。

別に子供を乗せて飛ぶのは嫌いではない。だが、乗せるのが大人ではなく子供である分、いつも以上に気をつけて飛ばなくてはいけないため、好き勝手飛べないのだ。急激な加速や高度変化、旋回な

ど、飛行中にかかる子供の身体的負荷は、大人のそれに比べて圧倒的に大きい。

不服そうなヒューイに、リセリアがクスリ、と笑みを零す。

「ヒューイは飛んでる時、すごく楽しそうなものね？」

「……俺、後ろに乗せたことあったっけ？」

その言葉に、ヒューイは首を傾げた。リセリアがヒューイと飛行を共にしたのは、リセリアを助けた時だけだ。あの時はもちろん、リセリアに意識はなかったはずだ。

そんなヒューイに、リセリアは首を小さく横に振る。

「ううん。だってヒューイ、本当に楽しそうに飛ぶから」

リセリアは後ろ手を組んで、天空を仰ぎ見る。瞳には、真っ青な空色が映っていた。

「ここにいる誰よりも　きつとこの大陸の誰よりも風をよく知ってる。風に逆らわず、空に導かれるままに天空へ翔けていく」

惚けるような、その表情。監視の任を託されてから一週間。その間にもリセリアは空を見上げては度々こんな表情をすることがあった。まるでこの世の者にあらざるような

「見ているとね、こっちもすごく楽しくなるの」

かと思えば、くるとヒューイを振り返ってあどけない笑顔を見せてくる。コロコロ変わるリセリアのそんな表情を見て　ヒューイはいつの間にかその手を取って歩き出していた。足は無論、愛機フォーゲルの方へ。

「ヒューイ？」

ジャケットの裏から時計を取り出し、時間を確認する。子供を乗せての一回のフライトが、長く取って約二十分。つい二、三分前に最後の機体が飛び立ったばかりだから　時間は余裕だった。

「見て楽しんでもらうのは嬉しいけどさ……だったら、見て楽しくなるだけじゃなくて、リセリアも知るべきだ。飛ぶ、楽しさ」

「えっ？」

突然の事に言葉の意味が飲み込めなかったのか、目を丸くするリ

セリアに向かって一笑。

「勿論、リセリアと一緒に飛んでもいい、って言うんだっただけだな」

その瞬間、リセリアの顔が明るい輝きに満ちる。返事は、その笑顔で十分だった。

ヒューイは手早くリセリアを後部座席に乘せ、ベルトを締めさせる。続いて、軽い身のこなしで操縦席に滑り込んだ。

「ヒューイ、何をする気だ！」

そこでもうやくヒューイの行動に気付いたらしいカルダが、ヘッドセットのマイクをつけたまま声を張り上げる。通信中の奴らはさぞ耳が痛い思いをしただろうなあ、とそんな事を考えつつエンジン始動。無線のスイッチを入れる。

「ちよつとりセリアに飛ぶ楽しさってやつを教えてくる。心配するなよ。十分十五分でもどるからさ」

『そういう問題じゃ……』

無線の向こうで、カルダが言葉を呑み込む気配。頭に手を当てて項垂れている様子が脳裏に浮かぶ。その隙に、ヒューイは逃げることにした。

『ヒューイ！？ ヒューー！！』

既視感を覚えるその呼び止め方。リセリアを見つけたときも、こんな風にカルダは無線の向こうで怒っている。

「行くぞ、リセリア！」

鋼鉄の鳥は風を掴み、纏い、一直線に空へ翔け上がっていった。

* * *

揚力を受けた機体は重力のしがらみを逃れ、見る見るうちに地上が遠退いていく。速度はおよそ二〇〇ノットと少し。高度計に示される数字は、あっという間に八〇〇〇フィートを超えた。

機体の頭上 ヒューイの眼前には、高層雲にしては高度の低い

雲が立ち込めている。ヒューイは速度を落とすことなく、その中へ機体を突入させた。

視界が雲によって白くなっていたのは、ものの数秒。

「雲を抜ける！」

翼が雲を引きちぎって、雲の上に飛び出す。その瞬間、

「わぁ……」

目に飛び込んできたその光景に、後部座席のリセリアが感嘆の声を漏らした。空を飛び慣れているヒューイですらも、目の前の景色に息を吞まざるを得なかった。

上には、海の深さを思わせるほどの濃い空色。下には、その青を反射するほどに澄んだ、一面の白。

まるで雲の海　いや。細波の少なさは、海というよりもむしろ平原だった。雲の平原。真っ白で平らな雲がヒューイ達の目の前に、どこまでも、遙か彼方まで広がっていた。

機体を水平に保ち、飛行可能な最低速度までスピードを落とす。雲に機体を押し付けるような形で安定飛行に入り、ヒューイはゴーグルを額の上に押しつけた。

「リセリア、気持ち悪くなったりはしてないか？」

「平気。酸素の薄いところは慣れてるから」

リセリアにしては珍しい明朗な声が耳に届く。慣れないとこの高度でも低酸素症に陥ることもあるのだが、どうやらそれは杞憂だったらしい。

「すごいなあ……あつという間にこんな高くまで来ちゃうなんて」

「おいリセリア危ないって……」

「うん。でも少しだけ、お願い」

周囲をよく見ようとしているのか、リセリアはシートから少し腰を浮かす。風防の外に顔を出した途端、流れる大気に乗って、束ねられていない金の髪が宙に舞う。

そんなリセリアのお願いに、ヒューイはとつさに口を噤んでしまった。機外を見渡すリセリアの瞳が、あまりにも優しかったから。

ヒューイは機体のバランスを崩さないよう、操縦桿を握りなおしてそれに集中する。本来、飛行中の機体に立つのは言語道断なのだが、珍しいほどに今日の空は穏やかなことだし、今ばかりは許そう。

「少しだけだからな」

「ありがとう、ヒューイ」

その囁きは、耳元を擦り抜けていく風に流されて空に霧散する。フォーゲルは、青い翼で一直線に飛び続けた。ヒューイもリセリアも何も語らず、耳元をすり抜けていく風の音だけが互いの耳に響く。そうして無心に飛んでいたのは、それでも一分ほどだろうか。唐突にリセリアが口を開いた。

「ねえヒューイ。その……《空帝》って何？ どうしてヒューイは《空帝》って呼ばれているの？」

ポツリ、と。肉声でもはつきりと聞こえる距離から零された言葉。まさか彼女の口から出ると思っていなかった単語に、思わず操縦桿を握るヒューイの手がぶれそうになった。

「ヒューイ……？」

反応が返って来ず、リセリアの声に不安なものが混じる。

「ごめんなさい。聞いちゃいけないことだった？」

ヒューイは躊躇い ややあつてから首を横に振った。その呼び名を聞くと、ヒューイはいつも嫌悪感に見舞われていた。軍の操縦士たちのように悪意があるうと、先ほど後ろに乗せた少年のように悪意がなかるうと。けれど、不思議だった。リセリアがその言葉を口にした時、驚きはしたが、嫌悪感や欠片もなかった。

（リセリアにだったら、話してもいいかな）

だから、そう思った。

「《空帝》っていうのはな、軍の飛行機乗り達が俺に与えた嫌味な呼び名だよ」

そう呼ばれるようになったのは、確かヒューイが軍に入ってから一年半が過ぎた頃。丁度、開戦から数ヶ月が経ち、両国の対立が最も激化していた頃だったと思う。ヒューイは、そう切り出した。

その頃、最前線の空でヒューイの飛び方が話題になったことがあった。

今でもヒューイには一つ得意な飛び方がある。空をゆるりと流れる風、山から吹き降ろす風、雲に向かって立ち昇る風。それらを身体で感じ、鋼鉄の翼を乗せる。ヒューイは何よりも得意だった。

他の者の様に風を切るのではなく、風に身を任せ誰よりも高く速く飛ぶ。最前線で縦横無尽に飛び回り敵を翻弄するその飛び方は、まるで鳥の様だと言われるほどになっていた。

風が翼を後押しするようなその飛び方は、ヒューイにいつしか空の帝王 《空帝》 という呼び名を与えていた。空に愛された者、空の全てを手に入れた《空帝》、と。

今やその名はメテオール帝国内に留まらず、ナディア皇国内にまで広まっているほどだ。

「でも、ヒューイは、《空帝》って呼ばれるの好きじゃないの？」

「……うん」

確かに、空の帝王《空帝》。そう呼ばれることは、飛行機乗りにとって光栄なことだろう。このレーレヘイト大陸で最も卓越した飛行技術の持ち主であることの証となるのだから。だが、その称号は単にそれだけで与えられたわけではないのだ。

「《空帝》の呼び方は、戦争があるからあるようなもんだ。俺の戦績 どれだけ相手を撃ち落としたかっていうことに、裏付けされてる」

敵を翻弄し、機動を奪い、その隙に味方が あるいは自分が敵機を撃ち落とす。そうしてヒューイを含めた第三遊撃隊が撃墜させた敵機の数、ほかの部隊よりも頭一つ抜きん出ている。その戦績がなければ、《空帝》の称号は生まれていないだろう。

強く噛み締めた奥歯が擦れた音を立てる。操縦桿を握り締める手に力が入る。

「俺は、戦争なんかをやるために 人殺しなんかをするために、飛行機乗りになったわけじゃない」

「……じゃあ。どうして今、ヒューイは軍にいて、戦闘機に乗ってるの？」

その一言は穏やかな声音だったが、まるで鋭い刃のようにヒューイに突き刺さった。応えは直ぐには出てこなかった。

ヒューイは空を飛ぶ翼が欲しかっただけで、戦闘機に乗りたかったわけではない。戦闘機に乗るのが嫌なら、今までにも軍をやめるなりしてこの席から降りる事も出来た。

けれど、ヒューイは今もこの戦闘機『フォーゲル』で飛び続けている。

「どうしても、翼が欲しかったから」

突破過ぎる言葉に、リセリアが首を傾げる。

ヒューイは一瞬だけ瞼を閉じた。そうするだけで今でも色鮮やかに蘇る、初飛行の時の記憶。深く息を吸い、吐き出される肺の中の空気と共に、

「俺は、さっきの子供達と同じなんだ」

そう口火を切る。

「俺の家族は、十六年前に戦争で亡くなった。親も兄妹も亡くして身寄りがなくなった俺はさっきみたいな孤児施設に預けられてたんだ」

リセリアからは相槌の一つも聞こえない。彼女は一体どんな気持ちでこの話を聞いているのだろう。

「終戦直前にそんな目に遭ったせいもあるかな。あの頃の俺は、我ながら捻くれた子供だったなあ。今、当時の自分にあったら、絶対クソ生意気なガキだなんて思うよ」

当時の自分を少し思い出すだけでも、苦笑が零れる。あの頃のヒューイは、俯いて地面ばかり見ていたのを覚えている。うじうじと陰険に塞ぎこんでいた。

「でも、ある日軍のパイロットたちが施設に来て、飛行機……じゃなくて、戦闘機に乗せてくれたんだ」

今日行われているパイロットによる孤児施設訪問は、十年以上前

から行われていた。

正直、子供のヒューイは乗り気じゃなかった。

空を飛んできたナディアの戦闘空爆機が、ヒューイの家も家族も奪っていった。ヒューイにとって戦闘機は、帰る場所を破壊した憎き死の鳥だった。

けれど、ヒューイは飛んだ。飛んで 変わった。

「あの時の感覚は、今でも忘れられない……広い空で、どこまでも広がる世界。ちっばけな自分なんか、吸い込まれて消えそうだった」何も無い空を人造の翼で飛んだとき、その空虚さに押しつぶされない。飛んでいるヒューイたち以外には誰もいない。何も。その広大な空間にいと、酷く自分の存在が矮小に感じて、それまで塞ぎ込んで考えていたあれこれが、どうしてもよくなってしまっただ。

「子供心にすごいなって思った。自分が悩んでたことなんか全部忘れて すごい楽しかった。大嫌いだった空が、大好きに変わった瞬間だった」

ふと、眼下に目を下ろす。真っ白な雲の隙間からは地表が見える。ヴェルナー平原に、少し首を回せば右手には内海。子供の時に見た空からの景色に、よく似ていた。

「俺には家族もないし、そんなにいい頭もない。でも、家族がいなくなつて、何の取り得もなくなつて、俺はここにいて空を感じていられる。それだけで、十分だと思った」

それからヒューイは、飛行機乗りになろうと決めた。だから、軍に入った。

休戦中とはいえナディア王国と睨み合った状況下のメテオールで、まともな飛行技術を学べた上で、満足に飛べる翼があつたのは、今も当ても軍だけだ。

軍のパイロットになれば、戦闘機にさせられるのはほぼ確実。そのことを、理解してはいた。それでも

「軍に入っても、どうしても空の中に行きたかった」

空を飛んだときの感覚が忘れられなかった。空へ駆け上がる翼が欲しかった。

「ヒューイは……空が、好き？」

「当たり前だ」

どこか臆病色を垣間見せるリセリアに、大仰に頷いてみせる。

「空がなかったら、俺は今ここにはいない。空が子供の俺に、まだ生きててちゃんとそこにいるっていうのを教えてくれた」

空を仰ぎ見て、ヒューイは空に片手を伸ばす。今は真つ青なこの空も、あと数時間もすれば夕焼けの赤に染まり、やがて数多の星々が瞬く一面の黒色へ表情を変えるだろう。

「『^{カライロ}空色の空』なんて皆は言っけどさ……俺は、空に何もなくてよかったと思う」

「カラ、イロ……？」

「そう。空色と書いて、カライロと読む」

もちろん、そんな色はパレット上には存在しない。それは、飛行機乗りたちの間で生まれた言葉だった。

空色は、定義上では薄い水色のことを示す。しかし天上の空は、昼は水色のような色に見えるかもしれないが、時の移り変わりによって様々な色を見せる。そこに本当の色はないことを、空を見続ける飛行機乗りたちはよく知っている。

そしてもう一つ。その言葉には、飛行機乗りたち自身の皮肉が込められていた。

より高く、より遠くの空へと飛行機乗りたちが空に恋焦がれるのは、別にそこに何があるから空を目指したわけではない。空を飛びたい。だから、空を目指す。空には何もない。空は空っぽだといふのに。

空っぽな色と書いて『空色』。故に、飛行機乗りたちの間で空は時折、『空色の空』と呼ばれることがあった。

「空っぽな、空色の空。でも、空が空っぽだったから俺は自分がここにいてことを自覚できた。だから、空には、何もなかったって

いい」

昔、ヒューイがそこにいらただけで十分だと思っただけに今のヒューイには、空がそこにあるだけで十分だった。

そう言い切ったところで、ヒューイはハッと我に返った。

「いや、えっと……その、あの。ごめんちよつと色々語り過ぎ……」

一体自分は夢見る少年みたいは何を言っているのだろ、と一通り言い終えてから恥ずかしさが込み上げて来て、ヒューイは照れ笑いと共に後ろを振り向く。

だがそれよりも早く、細い腕がするりとヒューイの首筋に絡みついた。

「りりり、リセリア!？」

抱き締められている。そう認識するまでに時間はかからなかった。回されている腕はきつくはない。そこまで腕が届かないのだろうが、ゆるくふわりとヒューイの肩から首に回されている。

とつさに振り向こうとして固まる。視界の端に、リセリアの顔がほんの少し映りこんでいた。近い。あまりにも、近い。

いくらなんでも、飛行中にこの体勢は危ない。そんな考えは一瞬で消え失せていった。

「ど、どうかしたのか？」

「うっん。なんでもない」

ふふつといたずらっ子のようにリセリアが笑う。耳元で囁く息遣いに、ヒューイの全身を巡る血流が早くなる。

「なんでもなくは、ないだろ」

しかし、リセリアはそれ以上何も応えなかった。ヒューイもリセリアのその幸せそうな笑い声に、何も言えなくなる。うるさいはずのエンジンの駆動音は、何故だかよく聞こえなかった。

随分長い間そうしていた気がする。

ヒューイの心臓も漸く正常な脈を取り戻した頃。フツと、リセリアが突然顔を上げた。

「? どうしたんだ？」

「何か……うん、誰かが近くにいる気が」

リセリアがそう呟いた瞬間。

ヒューイの耳が、風に乗って運ばれた微かなその音を捉えた。戦場でよく耳にする、粗野で暴力的な音。

「リセリア、席に戻って」

「う、うん……」

「しっかり座ってベルト締めとけよ。絶対に顔は上げるな」

剣呑な面持ちでフライト用ゴーグルを着用するヒューイの指示に、リセリアが戸惑いつつも従う。

直後、彼方前方の高空に、血色の機影が見えた。

* * *

ナディア皇国軍の機体を視認するのとはほぼ同時、ヒューイは無線の向こうのカルダに向かって声を叩きつけた。

「十時の方向に接近するナディア皇国軍機確認！ 数、一！」

ざわり、と。それを聞いていた第三遊撃隊の全員が驚き色めき立つ気配が無線越しに伝わった。

『馬鹿な！ どうしてこんなところに……しかも単機だと？』

カルダの疑問はもつともだった。

今、ヒューイはヴェルナー平原の中央部　ヴェルナー西基地より東南部を飛んでいる。ナディア皇国側から順当にこの地域まで飛んでくるなら、必ずヴェルナー西基地のレーダーに捕捉されるはずなのだ。

敵機を発見していれば、臨時の中継地点になっている孤児施設にいるカルダを通して、ヒューイを始めとした各員に通信が入る。この距離に近づかれるまで敵機の接近を知らなかったということは、ヴェルナー西基地で敵機を捕提出来なかったということだ。

そして、何故単機なのか。その目的が読めなかった。敵地に特攻もしくは爆撃するならまだしも、ヒューイの目に映る機体にそのよ

うな様子は見られない。ただの制空戦闘機のようなだった。その上、既にメテオール軍の拠点であるヴェルナー西基地は通過している。基地を狙ったわけではないのなら、一体何故こんなところに

そうしている間にも、前方のナディア軍戦闘機の機影が大きくなる。互いに向かい合って進行しているこの状況では、あと数秒たらずで接触する。リセリアを乗せたまままで空中戦に持ち込むわけには行かない。早々に離脱すべきだった。

「こちらトライ4！ 離脱する！」

『了解。離陸地点まで帰還せよ。こちらより応援を飛ばす。通信は入れたままにしておけ』

「了解」

言い終わるよりも早く、ヒューイはエンジンの出力を上げた。急激に増していく速度とともに、エンジン音と風切音が大きくなる。

「悪いリセリア！ 舌噛まないようにしてくれ！」

「え……？」

伝声管から状況に付いていけないリセリアの戸惑い声が漏れる。それが耳に届くのとほぼ同時。

くるり、とヒューイは一瞬にして機体を一八〇度右にロールさせ、背面飛行に移行した。間髪いれず操縦桿を引き、下方向へ半宙返り。雲の下へ。スプリットSと呼ばれる戦闘機動だ。機体が水平に戻った時には、高度を失った代償にかなりの加速を得ていた。

純粋な機体の速度性能において、メテオールはナディアに劣っている。追いかけるだけでは、捕まるのは時間の問題だ。長時間隠れられる雲もない現状では、できるだけ今の距離を維持することが、ヒューイに出来る最善だった。だが、

（速い……っ！）

いくら急激に速度が上昇したとはいえ、遭遇時の速度に大きく差があったため、相手の接近は予想以上に早かった。二機間の距離は見る見るうちに縮まる。既に敵機の射撃範囲に入っていた。

ヒューイは機体を揺らし、照準を定められないようにする。避け

るならぎりぎりまで引き寄せて、相手が撃とうとしたその瞬間を狙う。

しかし、ヒューイが狙っていた瞬間はいつまでも訪れなかった。

（撃つ気はないのか……？）

左にロール。敵機の軸線上から外れたところで、機首を上げて左に旋回。敵機と同程度の高度を得る。

それに合わせるかのように、敵機も機体を回転させる。だが、何故か高度を上げはしなかった。

二機は互いに同高度を保ち、水平に同軸の円を描いて旋回していた。

敵機の操縦席の中が顕わになる。そこに見えた敵操縦士の相貌に、ヒューイは若干の驚愕を覚えた。

若い。大きめのゴーグルを着用しているために全貌は見えないが、少年とも青年とも取れない顔立ちだ。おそらく、まだ十代ではないかと思われた。はたらく黒髪は、風を受けていても分かるほどさんばらだ。

少年　おそらく　がヒューイと同じように首を上向きにし、ヒューイ達の方を見る。ゴーグルの奥からの視線がリセリアを辿り、同じようにゴーグルに隠されたヒューイのそれと交錯した、その瞬間。

「ヒューイ・ノルグス！」

二機が巻き起こす風を貫いて、少年が叫んだ。

突然名を呼ばれ、ヒューイは息を呑んだ。だが不思議なことに、その行動を取ったのはヒューイだけではなかった。後部座席のリセリアが、機体から身を乗り出しそうな勢いで敵機を見た。

「アルクス……！」

「あいつ、《ナディアの暴風》アルクスか……！」

少年　アルクス。その聞き覚えのある名前に、ヒューイは咄嗟に呟いていた。

「……ヒューイ。知ってるの？」

「知ってるも何も、有名人だ」

どうやらリセリアは少年の名は知っていても、彼について詳しい事は知らないらしい。

ナディア皇国軍に所属するパイロット。戦場で遭った事はないが、アルクスの噂はメテオール帝国軍内でも広がるほどだった。

二十歳未満にして、ナディア皇国女王の厚い信頼を得る特務大尉。戦闘機に乗らせれば右に出るものはいないとされるほどの腕前の持ち主で、墮としたメテオール帝国軍の機体は数知れず。アルクスの愛機は大陸トップを誇るほどの飛行速度を持っており、卓越した技能で飛び回るその周囲には、機体が局所的に強い気流を生み出す。故に、そんな彼に与えられた二つ名が、《暴風》。

帝国軍内では《空帝》と《暴風》どちらが大陸一の飛行機乗りか、と言われることもある人物だった。

名実共にナディア軍のエースパイロットである、アルクス。皇国にとっても重要な人材であるのなら、何故なおさら単機でこんなところまで来たのか。

とその時、ヘッドセットからカルダの声が聞こえた。

『ヒューイ。オープン回線でお前に呼びかけてる奴がいる』

「俺に？」

まさか、と思いつつも通信回線を非暗号化のオープン回線に接続する。この状況でその回線を使用してくる奴といったら

『よう《空帝》。逢えて光栄だぜ』

第一声はそれだった。聞いた声。それは、先ほどヒューイを呼んだ声と一致していた。

嫌味の入った 当人はそんなつもりはないのかもしれないが、フランクな挨拶は気にも留めず、ヒューイは淡々と返す。

「ナディア軍のエースがこんなところまで何のようだ」

喉から出た声は、やや強張っていた。

そんなヒューイに、アルクスは可笑しそうに喉の奥で笑う。軽薄そうな声だった。

『殺気立つなよ。撃つ気はない。オレはただリセリアを返して貰いに来ただけなんだから』

彼の口からでた意外な名前に、ヒューイは思わず後ろを振り返りそうになった。

『その後部座席、無線は付いてるな。ちょっと話がしたい』

リセリアが話せるようにしろ、ということなのだろう。だが、リセリアとアルクスがどういう関係なのか明確ではない以上、不用意に要求はのめない。

「アルクスは、なんて……？」

ヒューイの言葉から、彼がアルクスと話していることを察したりセリアが、おずおずと声を掛けてきた。

翳りだした空を見ながら、少しの逡巡。ヒューイはヘッドセットのマイクを手で握り、アルクスに声が届かないようにしてからリセリアに応えた。

「リセリアと、話がしたいって。どうする？」

その問いに、リセリアの表情が曇る。迷っている、そんな様子だった。だが、

「話、させて」

五秒ほど悩んだ末に、それだけを小さく零した。

ヒューイはリセリアに後部座席に格納されていたヘッドセットを付けるように言う。全く使い方の分からないらしい無線機の手操作を指示すると、リセリアは覚束ない手付きで回線をオープンに合わせた。

だが言葉が届くようになって、しばらくリセリアとアルクスは何も発しようとはしなかった。

「アルクス……？」

『久しぶり、リセリア。声が聞きたくてこんなところまで来ちゃったよ』

その声色はヒューイへ向けられた時とは全く違うものだった。まるで昔別れた友人と思い出話を語りあうかのような、もしくは恋人

に語りかけるような、そんな優しい声だった。

『びつくりしたよ、リセリア。まさか飛行中の機体から飛び降りるなんて思わなかったから』

「飛び降りた……!？」

『知らないわけ？』

思わず怪訝な声を上げたヒューイに、アルクスの馬鹿にしたような声が返ってくる。

『リセリアはオレと国に行こうとしているときに飛び降りたんだぜ？』

そう言われてヒューイは、リセリアを見つけたときのことを思い出した。

恐らく、あの時軍に入った、ツスタンド山脈付近でナディア軍を発見という報告はアルクスを含めた空戦部隊のことだったのだろう。山脈付近の上空を飛んでいたアルクス。リセリアはその機体から飛び降りたから、あんな辺鄙な場所にいたのだろう。そしておそらく地面に着地したときにリセリアは身体中に裂傷を負い、着地の衝撃で意識を失っていた。

(いや……)

そこまで考え、ヒューイは違和感に辿り着く。

ヒューイがリセリアを見つけたとき、周囲にアルクスはいなかった。更に、リセリアの近くには彼女が使用したはずの脱出用パラシユートの類は落ちていなかった。つまり生身で飛び降りて裂傷程度で済むような高さから、リセリアは飛び降りたとは考えにくかった。訝しげな視線を送るヒューイは目に入っていないらしく、リセリアは一心にヘッドセットから流れるアルクスの声に耳を傾けている。『メテオールの奴らに連れて行かれたとも聞いてさ。心配したよ？』

「あの……その……ごめん、なさい」

『いいよ。無事だったんだから』

何故リセリアがこんなにも戸惑い、怯えたように話すのか。そんな疑問を抱かせるほど、リセリアに掛けられるアルクスの言葉はど

こまでも優しい。だが直後、

「ヒューイが、私を見つけてくれて……」

アルクスから放たれる気配が一変した。一瞬前までの柔らかな空気はどこに行ったのか、飛行するその気配がガラリと変わるのが無線越しにも分かった。

無線から流れる沈黙は、怒気ではない。怒気よりももっと濃く、

鋭い感情　殺気。

『ねえリセリア。何でヒューイ^{そんなやつ}なんかと一緒にいるの？』

「え……」

口調は相変わらず優しい。だが、一皮剥いた中には、身を抉り取るような鋭さが秘められていた。

リセリアが俯いて言葉を失くしても、アルクスは止まらない。

『オレ、言ったよね。リセリアを助けられるのはオレしかないって。リセリアの声を聞いてあげられたのは、オレだけだって。なのにリセリアはヒューイを選ぶの？』

「止める」

リセリアを見ていて居た堪れなくなり、ヒューイは我知らず声を上げていた。

「止める。リセリアが怯えている」

『……へえ、何？　保護者面するわけ？　リセリアを見つけたからってさ　ざけんなよ』

一度は電磁波に変換されたはずだというのに、肉声のようにクリアに聞こえた一言は、まるで感情が具現化したかのようだった。実物の刃物が喉元に突きつけられたような。そんな錯覚に見舞われた。『リセリアは最初っからオレの所有物なんだよ』

（なんなんだこいつは……！）

言っていることがまるで無茶苦茶だった。リセリアを労わるかと思えば、一転して責め立てる。撃つ気はないと宣言しておきながら、今にも撃つてきそうな気配でリセリアを物扱いする。

操縦桿を握る手が、無意識に動きそうになる。こんな殺気を持つ

た奴は、戦場でもあったことがなかった。逃げ出したかった。

『リセリア、オレのところに戻っておいでよ。もし戻ってくるって言
うんだったら　今は無理だけど、後でちゃんと迎えに行つてあげ
るから』

その身勝手な言い分に、ヒューイの中で何かが弾け跳んだ。

「何を勝手に……っ、リセリアは自分から飛び降りたんだ。その理
由が何なのかよく考えるクソガキが！」

感情のままに言葉を叩きつけるヒューイに、アルクスの声のトーンが一段低くなる。

『分からないのか？　これは交渉なんだ。大人しくリセリアをこちらに渡すんだったら、こつちも大人しくしてやるって言つてんだよ』

ヒューイは眉間に皺を寄せ、首を傾げた。

随分と引つかかる言い方だった。今この場でアルクスが何かを出
来るはずがない。ここは敵の領空で、アルクスはそこにたった一人
他に味方はいない。もう間もなく、第三遊撃隊の応援が到着する。

アルクスはそれを知らないとはいえ、いつ敵機に包囲されてもおか
しくない状況なのは分かつているはずだ。それ以前に、目的である
リセリアが乗っているのだから、ヒューイ機に手出しはできない。

『応じるのか。応じないのか』

こればかりはヒューイの一存では決められなかった。ヒューイは
ただのリセリアの監視役であつて、今現在リセリアの身柄を保護し
ているのはカルダなのだ。何より、一度アルクスの元を離れたとは
いえ、リセリア自身がアルクスの元に行くと言言え、状況は変
わってくる。

『その返事代わりの沈黙はノーと　』
『なるほどな』

アルクスの声を遮ったのは、今しがたヒューイが判断を仰ごうと
していたカルダ本人だった。

『ナディアはメテオール軍に対して、何か大きな交渉手段があるつ
てわけか。こちらが予想もつかない、大規模戦力か何か　それを

使わざるを得ないほど、リセリアはナディアにとって重要人物だ
てことか』

その推測を聴いているだけで、ヒューイには無線の向こうで不敵
な笑みを浮かべている彼の姿が目には浮かんだ。

指揮官らしいよく通る声で、カルダは告げる。

『交渉は決裂だ！ どうせ貴様らナディアのことだ。イエスだろう
とノーだろうとリセリアは連れてく。その交渉手段も行使するんだ
ろっ？』

自信満々に突きつけられたカルダの言葉に、沈黙が満ちる。だが、
それは直ぐに打ち破られることとなる。

『ふっ……ふふ。あはは、はははは！』

笑い声、だった。腹の底から出す、心の底からの乾いた笑い声。

『いいね！ オレ、そういうの嫌いじゃないぜ！ リセリアは返し
てもらっ。お前らを痛い目にもあわせる！』

その時、ヒューイは遠くに仲間の青い機体を見つける。五機。部
隊の全機ではないが、その中にはカルダの機体もあった。

アルクスもそれを捕捉したらしく、機首の向きを変えて離脱体勢
に入った。メテオール産の機体では考えられないような勢いで、ア
ルクス機が速度を上げていく。

リセリアを乗せている以上、最もアルクス機に近いヒューイがア
ルクスを追撃することはできない。味方機との距離も考えて、追撃
は不可能だった。

『ああそうだ』

逃げられる。ヒューイがそう思った瞬間、アルクスが思い出した
かのように呟いた。

今更言うことがあるのか。いぶかしむヒューイに向かって、アル
クスが別れを惜しむかのように一度だけ右手を振る。

『この空で一番はお前じゃないってこと、よく覚えておけ』

最後にそれだけを言い残し、アルクスは泣き出しそんな雲の空へ
と消えていった。

第三章 狂雲

「それじゃあ、リセリアはアルクスに連れ去られてきたってこと？」
ルベリエの確認の言葉に、ヒューイの隣でソファに座るリセリアは少し迷った後小さく首肯した。

ヴェルナー平原にてアルクスと相対した翌日。基地に戻ったヒューイ達は一度腰を落着けた後、カルダの部屋でリセリアから詳しいことを聞いていた。

主だった内容は、どうしてリセリアがツスタンド山脈にて倒れていたか。概ねは、ヒューイが予想したとおりだった。

あの日、ツスタンド山脈のある場所にいたリセリアをアルクスが訪ねていた。どうやらその時、リセリアはアルクスに付いていくことを自ら選んだらしいが、飛行中、アルクスに付いて行くことを拒否し、リセリアは逃げるために身を投げたということだった。

だが、相当の高度から身一つで落下してどうして生きていられたか。アルクスが訪れた、リセリアのいたとされるツスタンド山脈付近の『ある場所』とは一体どこなのか。そして何より、どうしてリセリアがナディア皇国軍に狙われているのか。それを聞いても、リセリアは頑なに答えようとしなかった。

ソファに囲まれたローテーブルの上には、相変わらずルベリエが淹れてくれた紅茶が四つ。だが、話が始まってからリセリアは一口も手を付けていなかった。

なにはともあれ、とカルダが場を支配しかけた沈黙を払拭する。

「これでリセリアがスパイだという可能性は消えたな」

「……スパイ？」

「あー……えつとな。ひとまずそれを謝っておこうと思う」

リセリアは首を傾げて真っ直ぐにカルダを見つめる。その純朴な視線に視線に耐え切れなくなったのか、居心地の悪さを誤魔化すようにカルダは紅茶を啜る。

それから、リセリアの目を見て頭を下げた。

「すまなかった。リセリアがナディアの者じゃないかって疑っていたんだ」

カルダは、リセリアを発見したのが国境付近であつたために、メテオールに侵入するための間者じゃないかと疑っていたこと。その動向を見張るために、世話係 半分嘘ではないが と偽って、ルベリエとヒューイをリセリアの監視に付けていたことを明かした。ヒューイとルベリエも、揃ってリセリアに頭を下げる。

三人に揃って謝罪されたりリセリアは困惑したようで、慌てて首をふるふると振る。

「それは……私もごめんなさい。きっと、私がもっと早くにちゃんと事情を話していたら、皆疑うなんて嫌なことしないで済んだのに……ごめんなさい」

何度も謝るリセリアに、ヒューイは彼女の頭をぽんつと軽く叩いた。勝手に疑って監視していたのはヒューイ達で、リセリアは何も悪くない。それに、リセリアと行動を共にしていたから良かったものの、ナディアに狙われているのであつたら、もっと早くから保護体制を整えるべきだったのだ。

それを告げると、リセリアはヒューイを見上げてはにかんだ。

「いいの。私は監視されているなんて全然思わなかったし……ルベリエとカルダと、ヒューイと一緒にいられてすごく幸せだったから」
白い頬をほんのり桜色に染めて、臆面もなく言つてのけるリセリア。夢を見ているような彼女の惚けた笑顔に、思わずヒューイの顔の熱が上がった。

そんな二人の空気の変化を感じ取ったカルダが、ごほん、とわざとらし過ぎる咳払いを一つ。ヒューイは慌ててカルダに向き直つた。「事のあらましは、すぐに軍上層部に報告する。この事をどの程度の大きさに見るかは分からないが、はつきりとした対応が決まるには少し時間を要すると思う。が、ああいった形であれ宣戦布告があつた以上、国内であろうとリセリアが狙われる可能性は高い」

メテオール国内にナディア皇国軍の者が全く入り込んでいないとは、情けないことだが言い切れなかった。なおかつ、あの時のアルクスの行動を考えれば、手段を選ばない可能性も十分に考えられた。ヒューイ、ルベリエ、とカルダは二人を順に見る。

「引き続き、リセリアと共に行動してくれ。今度は監視じゃなく、護衛ってことで、な」

『了解』

口元に柔らかな笑みを浮かべてリセリアを見るカルダに、ヒューイとルベリエは深く頷く。だが意気揚々と返事をしたヒューイとは違い、カルダの傍に立っていたルベリエは難しい表情をしていた。

「でもそれも、ひとまず上からの判断が来るまででしょ？」

「そつだ。問題は……さつきも言ったが、上層部の連中がどれくらい重要視するかってことだ」

「……予想、ついてるんでしょ。カルダなら」

カルダは思考を巡らすように目を閉じ、ややあってから微かな溜息を吐いた。

「上層部がこの一件に対して大きく出てくるというのは、今のところ難しいと思うな。ナディア軍が何故リセリアを狙っているのか、そもそもリセリアが何者なのか、それがはっきりしない限り、『ナディア軍が狙っている少女』扱いだ。ある程度の保護は望めると思うが」

焦点となるのは、ナディア軍がリセリアを欲する理由。

ルベリエは視線の集まるリセリアの傍に膝を付いて、俯く少女の顔を覗き込んだ。

「リセリア、どうしても答えられない？」

膝の上で重ねられるリセリアの手に自分の右手を重ね、もう片方の手で金の髪を梳くように頭を撫でる。

「言えることなら言っておいたほうがいいわよ。事と次第によっては、上層部が動いて正式に、こんなところよりももっと厳重に保護してもらう事だって出来るのよ？」

ルベリエの説得に、リセリアの瞳が揺れる。

何か言えない事情があるのかもしれない。言いたくない、けれど言ったほうがいいのかもしれない。言いたいけれど、言えない。その二つが入り混じって、リセリアの中で渦を巻いている。そんな表情だった。

「リセリア……」

ヒューイの口から、声が零れる。

結局、リセリアの唇が開かれることはなかった。

* * *

夜半、静寂と暗闇に包まれた中央棟の廊下を、ヒューイは一人進んでいた。コツコツ、と煉瓦模様にタイルが敷き詰められた床から硬質な音が返ってくる。廊下には、昼の間蓄積された熱気がまだいくらか立ち込めていたが、それも足元を流れる風によってどこかへ攫って行かれる。

やがて、ヒューイの左手にアーチ状に形作られた食堂の入口が見えた。食堂の中の電気は消えていたが、淡く青白い光が中から漏れている。風は、ここから流れてきているようだった。

とつくに営業時間を終えている食堂の中へ入る。丸テーブルと椅子が置かれているだけのがらんとした広大な室内。昼は喧騒の絶えない場所であるだけに、それだけで物寂しさを感じる。

その奥 向こうの壁一面が窓になっている食堂の、入口から入って正面の付近。窓と連続して設けられたオープンテラスへ続くのドアのあたりに、ルベリエの姿が見えた。

足音で気付いたのだろう。窓の外を見つめていたルベリエが、ヒューイを振り向いた。

「ヒューイ」

「よ」

突然現れたヒューイに、ルベリエは驚いた表情を見せる。そんな

ルベリエに、ヒューイはに片手を軽く上げてみせた。

「急にどうしたの？ 何か用？」

「用って言うほどの用でもないけど……」

ヒューイはちらり、と窓の外を伺い見た。そこには一人テラスの手摺りに腕を組み、一心に夜空を仰ぐリセリアの後ろ姿があった。月の光を浴びて輝く、淡い黄金色の髪は天頂を満たす星屑のよう。そのまま夜に溶けてしまふのではないかと思わせるほど、儂い背中だった。

「昼間リセリアがあんなだったから、ちょっと気になってな。リセリア、どうかしたのか？」

「外の空気吸いたいつて言い出したから。なんか思い詰めてるみたいで、少し一人になりたいみたいなんだけど……」

「……行っても平気かな」

今は静かにしておくべきかな、とヒューイはルベリエに問う。女の気持ちは、女であるルベリエの方がよく理解しているだろうと思っただからだ。

リセリアだって色々と考えることは多いのだろうから、そっとしておくのが最善なのかも知れない。だが、万が一リセリアが現状に責任を感じているのであれば、即刻否定しに行くべきだった。

ルベリエの返答は早かった。

「ヒューイなら大丈夫かも」

ヒューイ、なら。その含むところがある言い方に、ヒューイは目を丸くして瞬く。

「何で？」

「ヒューイだから」

答えになっていない応えだった。

腑に落ちない部分をいささか残しつつ、ヒューイはテラスのガラス戸に手を掛ける。その背に、ルベリエの呆れたような溜息が投げつけられた。

「それにしても、よく場所が分かったわね。ここにすることは誰に

も言っていないはずなんだけど」

「あーうん。なんか、部屋にいなかったから……勘で？」

ヒューイの返事に、再び溜息を吐くルベリエ。さすがに何度も嘆息されむつとしたヒューイが振り向く。よりも早く、ルベリエが強引に背中を押した。

「ほら、とつとと行く！」

半ば締め出すようにテラスに出された、次の瞬間。ボタンと勢いよく閉められた扉と、ガチャリと鍵のかかる音。

（ちょ、どーいうことだ！）

中途半端なことが嫌いなルベリエのことだから、躊躇ってないで用を済ませて来い、と強制的にテラスに追い出すのは納得がいく。だが、鍵まで閉めるとはどういう了見だ。

「ヒューイ？」

うつたえるヒューイの背に、シャラリと楽器のような声がかかった。慌ててリセリアを振り向く。そこで、呼吸が止まった。

ヒューイを半身で振り返るリセリア。金糸のような髪は、夜風にさらわれて小川のように流れている。陶磁器のような滑らかさを持った肌は、月明かりを浴びて発光しているかに見える。

リセリアの背後には、飛行訓練用の滑走路。その向こうに広がる平原。更にその向こう、地平線の上には幾ばくかの雲が流れ、星の瞬く夜空が広がっている。その夜空には、濃い黄金色の満月が浮かんでいた。

満月が、リセリアを闇の中に光として浮かび上がらせる。

この世の者ではないような 時折リセリアをそう思ってしまうことがあったが、それでも今ほどではなかった。もはや人智を超えた存在としかいいようがない。今この瞬間は、神によって意図的に創られた。そう思わせるほど、今ヒューイの目に飛び込んでくる景色は、神々しさを纏っていた。

「ヒューイ？」

もう一度名を呼ばれ、ヒューイははっと我に返る。リセリアはそ

んなヒューイを不思議そうに見ていた。

「どうしたの？」

「いや、そんな大した用ではないんだけど……リセリアの顔を見に来ただけ。あれからずっと元気なさそうだったからさ」

内心は昼間、リセリアが口を閉ざしてしまった事について聞きたい部分もあつたのだけれども、不安をひた隠ししているような彼女の表情を見たら、そんなこと言えなかった。

ヒューイはリセリアの隣に歩み寄ると、前のめりになる形で手摺りに寄りかかる。テラスの入口よりも少し強めに吹く風が、鳶色の髪を揺らす。遠くの空に雲はあつたが、天上は星々の光で明るく、南西からの風も静かない夜だった。

だが、それに反してリセリアの表情は暗く、硬かった。

「考えるのはいいけど、あんまり考えすぎるなよ」

風に乗せるように、ヒューイは呟く。しかし、風下でその言葉を受け取ったリセリアは、地面を見つめ続けたままだった。

「ヒューイは、聞かないの？ 私が、どうして何も話さないのか」

「……本心では聞きたいと思ってる。けど、聞かない。リセリアが言いたくないなら、無理には聞かない」

リセリアと時間の半分を共有して既に一週間以上が経っているが、ヒューイはリセリアについてまるで知らない。もっと知りたい。知って、彼女を助けてあげたい。だが、ヒューイ、カルダ、ルベリエの説得があつてもリセリアは決して口を開こうとはしなかった。

リセリアからの反応はなかった。夜の静寂が支配していく中で、星が動きそうなほど長く感じられる時間が過ぎる。ヒューイの感じる時間の流れが正常に戻ったのは、数秒の間を挟んだ後だった。リセリアが弱々しい力で、ヒューイのジャケットの裾を握ってくる。

「ルベリエは……」

「ん？」

今にも消え入りそうな弱々しい声を聞き逃してしまわないよう、ヒューイは耳を傾ける。

「ルベリエが、どうかしたのか？」

躊躇うリセリアにそう訊ね返すヒューイの声色は、自分でも驚くほど柔らかかった。しかし、リセリアは何か言い辛そうに数度薄く口を開閉させ

「ルベリエは、空に嫌われているの？」

唐突に口にされた意外過ぎるその問いに、一瞬、ヒューイは言葉を失う。

「聞いたのか」

ヒューイの確認に、リセリアは下を見つめたまま小さく頷いた。

「ヒューイ達を見るルベリエの目が……眩しそうだったから。そして、自分は二度と飛べないから。飛べなくなった、空の嫌われ者だって、教えてくれた」

あいつは、まだそんな事を言っているのか。

躊躇いがちに、少しずつ口にされていくリセリアの言葉に、ヒューイは嘆息せざるを得なかった。

「別に、空に嫌われたわけじゃないさ」

遠くの夜空を流れる雲を見つめたまま、ヒューイはあえて軽い口調で告げる。

ぼうつと見つめる先には、ゆつくりと薄雲の流れる夜空。鋭い爪と牙を隠した、優しい表情の空だった。

「一年前かな、いつもどおりの前線での任務中だった」

ポツリ、とそう切り出すと、瞬く星空をかき消すように、ヒューイの脳裏に当時の光景が色鮮やかに広がっていた。もう遠い昔の事であるかのように感じる懐かしい思い出に、知らず目を細める。

ヒューイとカルダとルベリエ。三人で、連日翼を並ばせ続けた日々。もう二度と戻ってこない過去。

「ツスタンド山脈の周辺は、元から飛ぶのが難しいって言われている空域なんだ。こころ風向きが変わる上、何の予兆もなしに突風が吹く」

風を切って飛ぶナディア軍の重い機体と違い、軽量化されている

メテオール軍の機体は、風の影響を受けやすい。

《空帝》と呼ばれているヒューイ自身、今でこそメテオールの軽い翼を操る事に慣れてはいるが、それでも一瞬でも気を抜けばどうなるか分からない。下手をすれば、失速状態のまま墜落、という事もあり得るほど、ツスタン山脈の周辺は飛行機乗りにとって飛び辛い風がある場所だった。

そしてその風は、ルベリエを襲った。

「ルベリエは失速してな……それでも、ルベリエの腕だったら失速状態から直ぐに回復できたはずなんだ」

けれど、そこは空の戦場だった。

「その一瞬を、撃たれた」

忘れることのできない、ルベリエ機が落下していくその時の光景。それを脳裏に浮かべて強張ってしまったヒューイの声に、リセリアの肩が小さく跳ね上がる。

その様子を視界の端に捉え、ヒューイは意識して声を柔らかくする。

「幸い命に関わるような怪我は負わなかった。でも、墜落の衝撃のせいか、視力がガタ落ちしてな……見えない事はなかったんだが、もう飛行機の操縦はできなかった」

飛行機のパイロットには、裸眼状態である一定以上の視力が求められる。その条件を満たす事が出来ないルベリエは、もう二度と自分で飛行機を動かす事は許されない。

「風で失速することがなければ、落ちる事もなかった。だから、空の嫌われ者なんて言われてるんだ」

色褪せない記憶を話し終えた、ヒューイは夜空に向かって息を吐く。小さな吐息は、平原を駆け抜ける風にあつという間に攫われて、瞬きの後にはその熱すらも残らなかった。

ぎゅっと、無言で話を聴いていたリセリアの、ヒューイのジャケットを掴む手に力が入る。

「本当は……ヒューイ達には話しておきたい」

でも、と俯いたままりセリアは続ける。

「言えない。全部話したら、私はきつと、皆の ヒューイの敵になる。ヒューイもカルダモルベリエも、私のことを嫌いになる。一緒にいらなくなる」

「敵になる……？」

反射的にヒューイは聞き返していた。

「だって、リセリアは皇国の人間じゃないんだろ？」

それには、リセリアは微かに首肯した。

ナディアの者ではないというのなら、ヒューイたちと敵対する理由などないはずだった。仮に敵対したとしても、それが必ずしもヒューイ達がリセリアを嫌うことには結びつかない。戦争しているからといって、ヒューイが全てのナディア国民、しいては戦場で出会ったナディアのパイロットを嫌っているわけではない。それと同じである。

「アルクス達は、そうだった」

地に向かって落ちる前髪がリセリアの表情を隠すが、その横顔は寂しさに満ちていた。

「きつと最初から、私を使うつもりだった。だから私のところへ来た」

「……俺たちがあいつらと同じようにリセリアを利用するって？」

彼女が自分の事を、アルクスと同じように物扱いしたこと。そして、ヒューイ達がアルクスとなんら変わらないような言い方をされ、ヒューイはむつとなる。リセリアが帝国・皇国の両方に何かしらの利益をもたらす存在であれ、少なくともヒューイはリセリアを道具扱いするような真似は絶対にしない。

ヒューイが怒ったと思ったのか、リセリアが細い肩を更に縮ませて、首を振る。

「ヒューイがそういう人だとは思っていない。けれど、きつと軍の偉い人たちは違う」

金の髪がサラリと流れ落ち、リセリアの白いうなじと肩があらわ

になる。あまりにも細く小さい双肩だった。リセリアが何を考え抱えているのかは分からない。けれど、何かを背負うには、あまりに小さな背だった。

「リセリア……」

その姿に、ヒューイは思わず手を伸ばしそうになり、けれど言葉一つをかけることもできず、ただ彼女の名を呼ぶことしかできなかった。

そうして沈黙の帳に支配されしばらくが経った頃。鼓膜を震わせていた夜風の旋律に言葉を託すように、淡い朱に染められた唇が開いた。

「私は――」

だがその声を掻き消すように。

地の底に響くような爆発音と共に、基地が揺れた。

* * *

身体を揺さぶられるのを感知した瞬間、ヒューイは条件反射でリセリアの肩を掴んで引き寄せていた。直後、あまりにも強い揺れにリセリアがバランスを崩し、ヒューイに寄りかかる。腕の中から上がる、小さな悲鳴。

「リセリア、ヒューイ！ 大丈夫！？」

「ああ――」

ルベリエがテラスのドアを乱暴に開け放ち駆け寄ってくる。

揺れは花火の打ち上げのように秒間に数回押し寄せたが、いずれも短く瞬間的なものだった。揺れが収まったところでヒューイはリセリアから手を離し、ひとまず食堂内に入る。

「何だ今の爆発は……爆撃か？」

「分からないわ。でも、爆撃されるほどの距離まで接近されれば、出撃命令が出るはず。ということ……」

基地内部からの爆発。互いに顔を見合わせるヒューイとルベリエ

は、言わずとも同じ結論に辿り着いたことを確信する。それと同時に、食堂天井に設置されている赤い警報ランプが光を放って回り始め、基地中にけたたましい警報が鳴り響いた。館内放送のスピーカーに、ぶちっという音と共に電源が入る。

『基地内部にて、複数の起爆あり。繰り返す』

続けて爆発によって火災が発生している箇所を列挙。各々の爆発の規模はそれほど大きくないようだったが、その数は十近くに及んだ。基地内の人間に、各員最寄りの火災場所にて負傷者の救助と消火活動に当たるように指示が出る。

その放送にルベリエは苦虫を噛み潰したように顔をしかめる。

「基地のインフラ狙いつてわけね。まずいわね、脱出するわよ」
そう言うなり、ルベリエはリセリアの手を引いて走り出した。

放送があつた箇所は、その殆どが基地のインフラ設備の拠点、もしくは軍事的に重要な機能をもつた場所だった。そのいずれも、大半がこの中央棟に集中している。今、ヒューイ達がいるのは中央棟二階。階段や非常口にはそう遠くない位置だったが、悠長にしていれば逃げ遅れかねなかった。消火活動どころの話ではない。

ルベリエとリセリアの後にヒューイも続く。幸い非常口は無事だったようで、ヒューイ達はそこから一度屋外への避難を試みる。だが、その瞬間。

『ナディア皇国軍空戦部隊が接近中。方向、十一時！』
「な……」

再び入った放送に、ヒューイもルベリエも言葉を失った。続けざまに、スピーカーからは接触までの概算時間が告げられる。早い。消火活動に当たっている時間などなかった。迎え撃たなければ、基地の壊滅は必至だった。だが、消火活動に割く人員を減らせば、基地が内部から崩壊する。

「こんな時に……！」
「こんな時、だからよ」

驚きはしたものの、ルベリエはあくまでも冷静だった。非常階段

を駆け下りる。その最中、幾つかの空戦部隊に戦闘配置を取るようにとの命令が入る。その部隊の中には、ヒューイの所属する第三遊撃隊も含まれていた。ヒューイ達は夜間戦闘向きではないのだが、現状では出撃も止むを得なかった。

「多分、基地内に爆弾を仕掛けたのはナディアの連中よ。入り込んでいたのよ」

ぎりつ、と。ルベリエが悔しさに歯軋りする。

「リセリアを疑っておきながら、既に基地内に侵入されていたなんて……！」

リセリア。その名前に、ヒューイは頭の中で何かが繋がるのを感じた。

「まさかアルクスが言っていたのってこれじゃ……」

その一言に、ルベリエもハツとなる。

昨日アルクスは、リセリアを渡すなら大人しくしてやると言っていた。カルダはそれを、大規模戦力か何かであると推測していた。大規模ではないが、安全だと思われる基地内部からの攻撃ほど痛手となるものはない。さらに、それがリセリアのいるヴェルナー西基地であれば、混乱に乗じてリセリアを奪取することも不可能ではない。

「まずいわ。非常にまずいわ。相手の狙いがリセリアなら、こんなところにいられない」

同じ結論に至ったルベリエが、焦燥を表に出して呟く。館内放送では、爆破が誰の手によるものか明らかになっていない。つまり、まだ爆弾を仕掛けた張本人は帝国軍人として公然と歩いている可能性があるのだ。

「ひとまず俺は行かなきゃいけないが……」

ヒューイはリセリアを見る。ヒューイが出撃しなければいけない今、リセリアはルベリエと共に行くべきである。しかし、火災に加えナディアの間者。決して安全策とはいえなかった。

その時、どこからかヒューイを呼ぶ男の声がした。最初は遠くに

聞こえた声は、徐々に近づいてくる。ヒューイの部屋もある隊員宿舎の方からも上がる火の手が空を赤く染め上げると共に、地上を走ってくるその人影を浮かび上がらせる。見覚えのある、オールバックに整えられた黒髪。

「カルダ！」

カルダは随分と長い距離を駆けてきたのか、少し上がっていた息を落ち着かせながら、三人を見て胸を撫で下ろす。

「よかった。ルベリエもリセリアも無事みたいだな」

そこにヒューイの名前が入っていないことが若干気になるが、今はそれどころではない。

「カルダ、リセリアは」

そこでヒューイは、口の前に差し出されたカルダの手に口を噤んだ。分かっている、と無言でヒューイを見る双眸が語っている。さすがカルダだ。

「時間がないから手短に言う。ルベリエはそのまま指令本部に向かえ。まだ生きている」

「はっ」

命じられた一言に、ルベリエがピシッと決まった敬礼を返す。

カルダはそれに目もくれる間もなく、ヒューイを見た。

「ヒューイ。お前はリセリアを連れてヘイズ基地へ向かえ。リセリアは以降、ヒューイの指示に従ってくれ」

慌てて何度も首を縦に振るリセリア。だが対照的に、ヒューイは一瞬何を言われているのか分からなかった。

ヘイズ基地とは、ヴェルナー西基地から南南西に飛び、アズール大河を越えた向こうにある基地だった。両基地間の距離は約二〇〇キロ。国内有数の霧の発生地帯であるヘイズ川の近くにあり、敵が山脈を外海側から迂回して侵入出来ないようにする為の拠点だ。だが防衛拠点といっても、重要度はヴェルナー西に比べて遥かに低い。安全地帯だった。

要するに逃げろ、と。そうカルダは命じているのだ。

「馬鹿野郎！ 人手が足りないっていう時に何言ってるんだ！」

戦力は少しでも多いほうがいいのではないかと進言するヒューイに向かって、カルダは冷ややかに返す。

「《暴風》の機体が確認された」

《暴風》アルクスが来ている。そのことに、ヒューイは確信を覚える。ナディアは確実にリセリアを狙って事を起こした。

「隊員の大勢が就寝中だった宿舍も、格納庫もやられている。飛べる機体は、多くない。ここが陥落する可能性は……低くない」

そう告げるカルダは淡々としていたが、言葉の最後には苦々しいものが混じっていた。そんなカルダに、吐き捨てるようにヒューイは言う。

「逃げ腰かよ」

「……これがリセリアにとって最も安全だ」

ヴェルナー西基地が落とされれば戦線における重要拠点を失うだけではない。リセリアが敵の手に渡ることとなる。リセリアは、『最初からアルクス達は私を使うつもりだった』といていた。リセリアがナディアの手に渡れば、彼女は自身の意思に反して何かに利用される。

カルダの黒曜石の瞳がヒューイを捉え、見据える。

「撃ちたくないんだろ。だったら今は逃げろ。リセリアのためにも」

言い切って、カルダは格納庫のほうへと走り出す。ルベリエは正面に回り込んで再び中央棟の中へ。

「くそっ！」

熱気を帯びる空気の中に悪態を残し、ヒューイはリセリアの手を取ってカルダの後を追った。

空を緋色に染め上げるヴェルナー西基地。その上空に踊り出て来たメテオール軍の機体を望遠鏡越しにはつきりと確認し、アルクスは愛機サイクロンの操縦席の中でほくそ笑んだ。基地中にあれだけ火の手が回

れば陥落は目に見えているというのに、メテオールはどうやらまだ殺し合う気があるらしい。

だが、シナリオ通りの展開だ。少し意外だったことがあるとすれば、空中を飛び回るメテオール軍戦闘機の中にリセリアが乗っている機体があることだった。大人しく基地で、忍ばせておいたこちらの者に捕まってくれば良かったものを。だがそれも、既にシミュレート済みだ。

敵機は幾つかの編隊を作り、アルクスたちの部隊に向かってくる。だが、その内一機だけ別の方角へ飛んで行こうとする機体を見つめる。見たことのある機体。昨日逢った、《空帝》のものだった。

（あれか）

あれがおそらくリセリアの乗っている機体だ。せめてリセリアだけでも安全な場所に逃がそうという魂胆だろう。当たり前前の事だがメテオール軍も、リセリアを易々と譲ってくれる気はないようだ。

「各員に告げる。以降の行動は作戦Bに順ぜよ」

ヘッドセットのマイクに向かって告げると、通常時からアルクスの指揮する隊、今回一時的にアルクスの指揮下に入っている隊からコードネーム順に「了解」の返事が返る。

アルクスはエンジンのスロットルを緩やかに上げていく。《空帝》との距離はだいぶあったが、サイクロンが本気を出せばそんなものは一分とかからずにゼロになる。その後は圧倒的な数の有利を利用して追い詰める。

「《空帝》機体には絶対に手を出すな。あれはオレが撃ち落とす。
ブレイク
散開！」

部下に釘をさし、無線を切る。アルクスは操縦桿を倒し、一直線に《空帝》機フォーゲルへ向かった。

敵の機銃が火を吹く。機体左側に寄って狙われた射撃に、ヒューイは右斜め上への急上昇で回避する。そのまま一回転宙返りをし、速度を上げる。だが、その狙いが分かっていたかのように、背面飛

行中に別の敵機からの射撃が襲い掛かる。射撃ポイントは、一瞬後にフォーゲルが通る軌道。仕方なしに機体を右にロールさせ宙返りを中止する。その後ろを、アルクスが追尾する。

今の数秒で進行方向はヘイズ基地と反対になってしまっていた。隙を伺い見て再び方向転換しなくてはいけない。だが機首を変えようとすると度にちくちくと針で突付くような射撃をされ、ヒューイは下手に動けないでいた。

（くそつたれが……っ！）

内心舌打ちして敵機の様子を伺う。確実に相手の機銃に、こちらの胴体を狙われている位置。しかし、何故だか撃ってこなかった。リセリアを乗せているからといって、彼らに撃つ気がないわけではないようだった。実際、フォーゲルが大きく動こうとする度に、アルクスを含めた三機は発砲している。その内いくらかは、機体の末端を掠めている。

右手後方の地上には、燃え続けるヴェルナー西基地が見えた。いまや火の勢いはすさまじく、視界の端に写ったその様子では、基地からの脱出を始めているようだった。

その瞬間、天啓的な一つの考えがヒューイの中に浮かんだ。

この進路この射撃。まさか

「誘導されてる……！」

南からヴェルナー西基地を越え、内海の方　ナディア軍の領空側へ誘導されていた。

だが、それが分かっても動けば進路誘導のための射撃を浴びる。胴体を狙っているわけではないようだが、そこで下手に操縦桿を切れば蜂の巣になる。

背後、ヒューイよりやや高さのある位置にアルクス機。両斜め後ろ、少し距離を置いた同程度の高度に一機ずつ。機首を上げれば確実に撃たれる。ならばと思い、ヒューイは垂直に急激に高度を下げた。

（右！）

アルクス機はぴたりとヒューイに張り付いて追って来る。両脇の機体は、互いにヒューイ機に向かって飛行軌道を取る。左の機体は少し上昇してから回り込むように、右は降下して速度を上げる。

ヒューイは降下を中止して、急上昇体勢に入る。右方へのシャンデル。降下体勢にあった右側の機体はヒューイを追うことができず、ヒューイはすれ違うようにして上空へと抜ける。射撃は機体を捻って回避する。

ひとまず一機を振り切る。だがあと二機残っている。直ぐに振り切ることが出来なければ、今離れたばかりの一機が加わり、再度三機で追い回される羽目になる。

嫌な考えは的中した。上方から回り込んでいた機体が、背面飛行のままヒューイの進行方向に先回りする。方向転換の最中だったヒューイはそれにより、進路転換に失敗する。そうこうしているうちに、先ほどの一機が機体を建て直しヒューイの方へ戻ってくる。後ろには、相変わらずアルクス機がつけている。一か八かの離脱の試みは、失敗に終わる。内海の方へと誘導されている状況に変化はなかった。

一対三ではあまりにも不利だった。振り切るには、機体のスペックが足りない。旋回力・上昇力はややこちらが勝っているが、純粋な速力はナディア機の方が上だ。

いつの間にか、内海の上空まで飛行を余儀なくされていた。暗くて水上の様子は見えないが、おそらく大小幾つもの渦が巻いていることだろう。この内海は、大陸東から流れ込む海流が行き場を失くし、渦潮を発生させる。内海に浮かぶ小島もあることで、渦潮は非常に複雑な形を描き、とても船が航行できるような場所ではなかった。

『さっきから思っただけどさあ』

オープン回線で呼びかけてくる、間延びした声　アルクスのも
のだった。

『なんで撃たないわけ?』

「何……？」

優位な立場に立っているためか、アルクスの声からは緊張が感じられなかった。対してヒューイは三機の一挙一動に忙しく目を光らせている状態。機体を照らすのは薄っすらとした月明かりのみ。あとは、聴覚だけが頼りだった。

怪訝そうに呟いたヒューイに向かって、アルクスは無線の向こうで笑みを零す。

『知ってるぜ。お前が戦場で撃つのは絶対、主翼か尾翼。エンジンもパイロットも狙わない。少しでもパイロットが生き残る可能性のある撃ち方をする』

ヒューイは応えなかった。

『だからさっき、こつらの機体とすれ違った時には撃たなかった。あの時撃てば、確実に胴体に当たったから』

それは事実だった。ヒューイは人殺しをしたくて、飛行機乗りになっただけではない。それに、飛行能力を低下させれば、戦闘続行不可で敵機は退却の道を取らざるを得ない。確実な墜落やパイロット死亡の結果に持ち込まなくても、それで十分だとヒューイは思っている。

アルクスが急上昇を始める。千載一遇のチャンスと見てヒューイはスライスバックする。両脇の二機は何故だかヒューイを追おうとしなかった。これならいける。だがその直後、垂直急降下したアルクスが、ヒューイの頭上を捉えた。

『反吐が出る』

血を吐くような言葉を突きつけられると同時に。右主翼に浴びせられる、無数の銃弾。不安定になる揚力に、機体がぐらりとバランスを崩す。一瞬の静止の後に、機体は完全に飛ぶ力を失い、合金で作られた鳥は重力に従って動き出す。

高度約一万フィートからの落下。暗闇に覆われる海の中へ落ちていく。

ヒューイもリセリアも、悲鳴を上げる間さえなかった。

第四章 凍雲の地

ナディアア皇国現女王イスカルラータ・ルイ・ナディアレージェ・オリオール。父である先王が病で亡くなったことで異例の若さで玉座についた彼女は、アルクスの報告を受け柳眉が吊り上げた。

「撃ち落としたとは本当なのか？」

「報告に嘘偽りはございません、陛下」

玉座に跪いたまま従順な態度で首肯するアルクスに、女王は不快そうに眉を顰める。

「アルクス。お主、その態度わざとやっておるだろう」

「いえ、滅相もございません」

あまりにもわざとらしく、飄々としてそれを否定するアルクス。女王の視線がより険悪なものになる。ちよつと意地悪をしすぎたかもしれない。

「人目がないときぐらい臣下としての態度は取るなと言ったはずだ。お前は私の、その……友人なのだから」

不服そうに唇を尖らせる女王　イスカ。彼女のその動作にアルクスはやんちゃな笑みを浮かべて、「あ、そう？　じゃあお言葉に甘えて」と立ち上がる。

今アルクスがいるのは、イスカの私室だった。王らしい広々とした豪華絢爛の部屋。下を見れば床には真紅の絨毯が敷かれ、上を見れば豪華なシャンデリアがぶら下がっている。

メテオール軍のヴェルナー西基地制圧の任務から帰還した時、時刻は夜明けまで一時間を切ったところだった。その時イスカは当然就寝時間中であり、作戦終了以外の詳しい報告は日の昇った後に回される　予定だったのだが、彼女から事の詳細を直ぐに知りたいという要請が出され、作戦指揮を取っていたアルクスは、今こうして部屋に招かれていた。

王の私室に入るなど、たかが特務大尉であるアルクスには過ぎた

真似なのかも知れないが、アルクス自身そのような些細な事は気にしていない。過去にも度々、アルクスは自分に数歳加えただけのこの若い女王に、部屋に呼び出されたことがあったからだ。そう彼女の数少ない友人として。

アルクスは上座に席を取っているイスカの近くのソファに腰を下ろし、大仰に足を組んだ。頼杖を突いてイスカを見る。女王に対する今のアルクスの態度を大臣たちにも見られたら即雷が落ちるだろうが、幸い今は二人以外には誰もいない。

（ま、見られてもオレは気にしないけど）

「で、何だっけ？ 撃ち落としたことだっけ？」

「そうだ。予定ではリセリアを基地内にて確保すると言っていただろう。撃ち落とすなんて欠片も聞いていない」

「だって言っただけだし。仕方ないだろ。リセリアが戦闘機で脱出したんだもん」

「もって……」

アルクスの駄々をこねるような口振りに、イスカは頭痛でも覚えたのか細い指で頭を抑える。

作戦前、イスカに対してそのような手筈で行動することは伝えただけ、ブリーフィングで取り決めたような作戦の詳しいことについては説明していない。リセリアが飛行機で基地を脱出した際の対応は予定通りだったのだが、イスカもまさか確保すべき少女が乗った機体が撃ち落とされるとは考えもなかったのだろう。

「せめて燃料切れを狙うとか……」

「無・理。サイクロンに搭載できる燃料はフォーゲルよりは多いけど、《空帝》相手じゃ敵わない」

どんな機体であろうと《空帝》 ヒューイの乗る機体は自在に風に乗ってしまう。つまり、同速を出そうとするのに必要となる燃料の量に差が生じてくるのだ。それが《空帝》用の機体フォーゲルとなれば、消費燃料の差は大きくなる。

なにより、速力重視設計であるナディアの機体は長期戦に向いて

いないのだ。巨大で馬力のあるエンジン、それを回すための巨大な燃料タンク。それらによってかさむ重量は、当然燃料消費に大きな負担を掛ける。

あの空域で相手の不時着を狙うまでの長期戦に持ち込めば、アルクスたちが王都レイテンに帰還できなくなる。そのため、飛行能力を低下させて内海に不時着させる作戦で行動したのだ。現実是不時着ではなく、墜落になってしまったのだが。

飛行機に詳しくないイスカに根絶丁寧な説明してやると、彼女は難しそうな顔をして、ふむと頷いた。

「墜落させたにしては、アルクスは随分と落ち着いているようだな」「そりゃね。墜落した《空帝》の機体は既に見つかってるから。海流に流されたらしく、ナディア側内海　フリエレン山岳地帯近くの内海に漂着してた。搭乗者二人は乗ってなかったらしけどね」

暗闇の中の出来事だったため、アルクスはヒューイとリセリアがどうなったか確認できていない。だが、機体の中に二人の姿がなかったということは、着水よりも早く脱出したか。あるいは、脱出は出来なかったが着水時の機体の損傷及び二人の負傷が少なく、漂着後に機体から離れたか。

にやりと、アルクスは隠し切れずに笑みを浮かべた。

「大丈夫。少なくともリセリアは生きてるよ。多分、《空帝》も。」

あの程度の墜落で《空帝》が死ぬはずないしな」

そんなアルクスに、イスカは不思議なものを見るような目を向ける。猫の夜目のような濡れ烏色の双眸。まだまだ少女として通じそうな風体だ。その可愛らしい目が、時に氷の女王の凍て付く眼差しに変わって人々を貫くのをアルクスは身をもって知っているが。

「珍しい。随分と《空帝》を高く買っているみたいだな」

「まあ……ね。あいつの腕は本物だと思うし、あいつの飛び方、オレは真似できねーし」

アルクスに、ヒューイのような風を的確に読んだ飛行は出来ない。彼の戦闘飛行を見たのは数時間前が初めてだが、それ以前から聞いた

ていた情報だけでも、驚愕すべきものがある。大規模な大気の流れを利用した長距離における効率的な飛行、風読みによる突風への対処。それだけではなく、上昇気流に乗ってスペックを越えたより高度への短時間到達。これがまた、機体のバランスを保つのが難しいのだ。もこなして見せたと聞く。そのどれもが、アルクスが容易にこなせるものではなかった。

そして、つい先ほどの飛行で見せた判断の早さは、大陸の操縦士の中でもトップクラスに入る。空の帝王と呼ばれても、申し分のない腕前だった。

だがアルクスはヒューイに勝った。後部座席にリセリアを乗せた状態とはいえ、あの時アルクスがヒューイを撃ち落としたことには変わりない。アルクスと共に二機がいたとはいえ、進行方向誘導以外の行動は一切手出しさせていなかったこともある。

「大体の居場所分かっていて。準備が出来次第向かう」

ヒューイの翼をもぐことは出来た。けれど、ヒューイはまだリセリアを手に入れたままでいる。アルクスはそれが気に食わなかった。「空でも地上でも、あいつはオレに敵わないって事を思い知らせてやる」

* * *

山道がこんなに疲れるものだったのか、と。生まれてこの方山登りというものを経験したことのないヒューイは、今しがた降りてきた山道を振り返り、肺の中の空気を全部搾り出すような溜息を吐いた。帰りはここを上らなくてはいけなかつと思うと、ぞつとしない気を取り直して町の中へと足を進める。ここはナディア王国の領土内。山道を歩くよりも、いつそに気を引き締めなければならなかった。

ヒューイが墜落してから、既に約半日が経過しようとしている。アルクスに機体を落とされてから着水するまでの間に、ヒューイ

は脱出用落下傘を身に纏い、後部座席に乗っていたリセリアを抱いて機外に飛び出していた。一人用の落下傘であつたため落下速度を急激に落とすことは出来なかったが、それでも着水時の衝撃は予想よりも遥かに小さかった。リセリアはほぼ無傷であつたし、リセリアをかばって着水したヒューイも軽い打ち身程度で済んでいる。

幸いにも、先に墮ちていた機体は木っ端微塵にはならず、浮力を得て水面に浮かんでいた。ヒューイ達はそれにつかまり救助を待つことにしたのだが、落ちた場所が悪かつた。

渦島内海の変則的な海流によつてはメテオール帝国沿岸に漂着する可能性もあつたのだが、流れ着いたのは不幸にもナディア皇国の領土だつた。

どうにかして救助を呼べないかと考えた。だが海水に濡れた無線機は使い物にならず、機密情報が漏れないようにするために、粉々にして海に捨てる羽目になつた。

それから、ヒューイ達は直ぐに機体を離れた。夜が明ければ、即刻発見されるのは必至だつた。

そして現在、漂着地点から北に進んだところにある山間にいた。周囲の様子気にしながら、しかし警戒しているのを悟られないように町の中を進んでいく。その傍にリセリアはいない。正確な距離は不明だが、おそらくは十数キロに及ぶ山道を歩き続けたために、リセリアの足と体力は限界をとうに超えていた。そのためこの町から少し山を登つたところで休ませていた。一人にするのは不安だつたのだが、町近くの昼の森林ならば、そう簡単には人に発見されないだろう。

（これがナディア……）

ヒューイは初めて足を踏み入れたナディアの地に、目を見張らざるを得なかつた。

舗装されていない道は細く、周囲の民家と古ぼけた建物は皆一樣に高さがある。道の端にはこの町が鉾山の採掘で成り立っていたのか、ひしゃげたシャベルや手押し車、そこから転がり落ちた無骨な

鉱石が転がっている。長い間使われていないようだった。見かける人も数は極端に少ない。町は、寂れていた。この様子では、営業している店を見つけるのも一苦労そうだった。

ふと空を見上げる。青空は、窓枠に切り取られたように小さかった。

しばらく歩き続けると、今までよりも人が多い場所に出た。が多いといっても、今しがた歩いてきた路地街に比較するとの話で、メテオール辺境の町に比べてもずっと少ない。

ヒューイは、少しは新しく見えるその道の一角に、「オープン」の看板がドアに掛けられている小さな店を見つける。ちらり、と目の端で窓から中を伺う。生活雑貨を取り扱っている店らしく、ちゃんと店主もいた。とりあえず、この店で事は足りそうだった。

「……いらつしゃい」

ドアを開けると、店主からやる気のない歓迎の言葉が掛けられた。中肉中背、至って平均的な中年男性だった。

店内を見渡す。値札に書かれている値の単位は、メテオールと同じフィスだった。十六年間も敵対関係にあっても、それまでに交流があったころの金額単位は、今も両国変わらず使われていた。

「何か探し物でも？」

きよろきよろしているヒューイを気遣ってか、店主が声を掛けてきた。気軽な店主の言葉に、ヒューイも自然と口調が砕ける。

「あつと……ええ。寒さ対策の上着を探していて。連れの女の子もいるんで、出来れば二つ」

ピツと二本指を立てるヒューイの上半身は、半袖の軍服と防寒用フライトジャケットのない状態だった。メテオール軍だとばれるといけないため、リセリアに預けてしまっていた。そのため、上は吸水性の良い黒のハイネックシャツ一枚とラフな格好だ。

大陸北にあるナディア皇国は、全体を通して年間の気温がメテオール帝国より低い。皇国東方ではまた違うだろうが、標高の高いこの場所では余計に気温が低い。大陸の気候は既に春半ばにまで差し

かかるうとしているのに、この格好一枚では寒くて仕方がなかった。店主はそれだったら、と言いついて店の奥へと消える。その間にヒューイは店内の棚を物色し、保存の利きそうなビン類の食料を数個手にとって、カウンターの清算カウンターの上に置く。ついでにカウンターの端に置いてあったライターも。これで当面の食料は何とかなりそうだった。

店主が戻ってくる。その手には、簡素な作りだが暖かそうなフーデ付きローブが持たれていた。付けられている値段は、お手ごろ価格だった。

「これでいいかい？」

「あと、これもよろしく頼む」

額き、カウンターの上の品々を指す。店主の計算した総金額はヒューイの所持金の範囲内で納まり、清算は滞りなく終わった。基地内で金を持ち歩くようにして良かった、心からほっとする。物資が補給できなければ、のたれ死んでしまってもおかしくはない状況なのだ。

無口なのか、黙々と紙袋に食料品を詰めていく店主。と、唐突に店主が口を開いた。

「お客さん、こちら辺の人じゃないんだね。東の人？」

その瞬間、ヒューイの心臓は大きく飛び上がった。やはり土地勘がないことは分かってしまったらしい。しかし、帝国民だというのはばれていないようなので、とりあえず話を合わせることにする。

「ああ。まだこっちは寒いかなって思ってたんだけど、ちょっと甘く見てた」

ヒューイの返答に、店主はまた沈黙する。疑われているか。だが、それは杞憂のようだった。ややあつて、

「こちら辺は、酷いだろう」

ポツリと、店主はそんな言葉を零した。ナディア皇国民だったらもしかしたら通じるのかもしれないが、ヒューイは一瞬意味が分からず眉をしかめそうになる。

「東は農作物地帯だからまだましだと聞いているが、ここら辺の山はもう全部駄目だ。町の奥に鉱山労働者がたくさん住んでいた場所があるんだが、もう見たかい？」

それを言われて、店主がこの町の 延いてはナディア皇国の経済情勢について話しているのだと察する。

「それならさつき、少しだけ見たな。確かに、随分荒れてたな。あれは酷い」

「……もう二十年近くあんな感じた。……値札は外しておくよ」

紙袋に品を詰め終わり、ローブが直ぐに入り用になると気遣ってくれた店主が値札を外し始める。そんな店主の口から何気なく発せられた年数に、ヒューイは驚愕が表に出ないようにするので精一杯だった。

平地が国土の大半を占めるメテオールと違い、国土の西半分にフリエレン山岳地帯を有するナディア皇国。風土を生かした農業・牧畜で国を支えてきたメテオールとは対照的に、ナディアは山岳地帯から採掘される金属類を利用した鉄鋼業で国を繁栄させてきた歴史がある事はヒューイも知っている。両国は互いの国力を常に競い合うような風潮はあったものの、その特色を生かし、交易し、閉鎖された大陸の中でもうまくやっていた。十八年前までは。

「この町で使っていた鉱脈は、他に比べて死ぬのが早くてね……」

交易が途絶えた後のナディアで情勢が不安になっていることは聞いていたが、この町は酷い。店主の口振りだと、他の町の鉱脈も幾つも死滅しているのだらう。『東の方はまだまし』という言葉から察するに、ナディア皇国全体が経済危機に陥っているのかもしれない。

呆然としているヒューイを気にした様子もなく、店主はローブを差し出してくる。

「あいよ」

「あ、ああすまない」

大きいほうの防寒着を羽織り、続いて雑貨を入れた紙袋を片手で

抱える。ビン類が予想以上の重さとなっていて、力を入れた瞬間に打ち身になっている箇所が軽く痛む。

「この町の治安はよくない。用がないなら早々に立ち去ったほうがいい」

「そうする」

最後にそう注意を促した店主に、ヒューイは肩を竦めて見せ、背を向けた。用事は済んだ。後は早くリセリアの所に戻るだけ。と、店を出ようとしたところで、ヒューイは「あ」と一つ忘れていたことに気付き、店主を振り返った。

「あと、ここら辺の地図とかありませんか？」

「地図？」

「来る途中で失くしたんだ」

いぶかしむ店主に対して、ヒューイは大嘘を吐いた。

疲労の蓄積した身体に鞭を打って、ヒューイは森の中へと戻った。ここは敵地、ゆっくりはしてられないと思うのだが、さすがにこの三日間に色んなことが重なりすぎていて、休暇をとりたい気分だ。山道を登りつつ、ヒューイは店主から貰ったこの地域の地図を見る。どうやら先ほどの町からもう少し山を下ったところに、ナディア軍の飛行基地があるようだった。この状況下、リセリアも一緒に堕ちたとはいえ、メテオール軍がたかが下士官一人に搜索部隊を出してくれるかは怪しいところだった。助けを待つのではなく、自らの力で帝国に戻る手段を考えなくてはいけない。その手段として最有力だと思われるのが、ナディア軍の機体を奪って逃走する事だった。

思索しているうちに、ヒューイは山道から少し離れた木々の間に金の髪を見つける。リセリアだ。

「リセリ……」

戻った、と。彼女の名を呼ぼうとして　森の中に佇むその姿に、息を呑んだ。

背を向ける彼女の白く細い手に、腕に、肩に鎮座するのは、街では見られないような見目麗しい彩色の小鳥たち。その周囲には幾羽もの大きさも色も様々な鳥たちが羽ばたいている。

くるり、とヒューイに気付いたのか、リセリアが身を翻す。

リセリアが、鳥と共に森の中で舞っていた。

生い茂る木々の間から、木漏れ日が差し込み、スポットライトのようにリセリアを照らす。

呼吸をすることを忘れるその光景、リセリアの纏うその雰囲気、覚えがかった。

ヴェルナー西基地が襲撃される直前、テラスに突然乱入したヒューイに向けて振り返った時の姿。月を背に背負ったリセリアの、この世のものならざる雰囲気。

まるでリセリアが鳥たちのように、この森の中 人間から離れて存在することが、至極当然だというように

ざわり、とヒューイの胸の奥で何かが疼く。その瞬間、

「リセリア！」

何故だろうか。その姿に言い知れぬ不安を感じて、ヒューイは声を張り上げた。

突然の闖入者に驚いた鳥が、一斉に翼を広げて飛び立った。森林を揺るがすような羽ばたきの音。リセリアが思わず目を瞑り、顔を覆うように両腕を挙げる。

はらはらと、上空から無数の木の葉と羽毛が舞い降りてくる。買った物を地面に放り投げると同時、ヒューイはリセリアに駆け寄った。

「リセリア、なんともないか!？」

鳥の去った後を名残惜しそうに見上げる少女の肩を、勢いよく掴む。あまりのヒューイの剣幕に、リセリアは一瞬目を丸くし

「ヒューイ。おかえりなさい」

おかえりなさい。何の変哲もないその一言に、かくん、と。そんな擬音が聞こえてきそうほどの勢いで、ヒューイは身体が全身の

力を失って頂垂れた。拍子抜け。何かあったのか心配した自分が馬鹿らしく思えるほど、リセリアは至って普段どおりだった。

「どうしたの？」

「どうしたのって、いや……」

リセリアに問われ、しかしヒューイ自身何故あんなにも焦ったのかわからずに、なんでもないと呟いて肩から手を離れた。手に残った、リセリアの肩に触れた感触に安堵を覚える。

「なんでもないなら、いいんだ。……ただ、野生の鳥は警戒心が強くて、普通は人に寄り付かないから、ちよつとな……」

歯切れ悪く、苦笑する。そういえば折角買った物を、咄嗟に地面に投げてしてしまったな、と思い出して踵を返そうとしたヒューイの手を、

「……ヒューイ」

リセリアが、掴んだ。

手に伝わる、暖かな温度。ヒューイの脈拍が一段速くなる。

唐突なその温度に驚き見たリセリアは俯き、その表情は暗澹としていた。見覚えがある。つい昨日、リセリアがヒューイに『言いたくても言えない事』があつて悩んでいた時の表情だ。

その言葉の続きを言うことを、リセリアは躊躇っていた。

「リセリア、そんな顔するなよ。本当に言いたくないんだつたら黙ってればいいんだ」

宥めるように、ヒューイはリセリアの頭に手を乗せる。だがその手は、突然顔を上げたリセリアの頭に跳ね除けられた。

「リ、セリア？」

優しくヒューイの手を握りながらも、相反した強い視線で真っ直ぐ見つめてくるリセリアに、思わずヒューイはたじろぐ。

「やっぱりヒューイには言っておきたい。知っておいてもらいたい」
その一世一代の決心をしたかのようなリセリアの瞳から、ヒューイは目をそらすことが出来なかった。

深く息を吸い、リセリアが口を開く。

「私は空に浮かぶ城にて生まれた、空の化身」
パティス

そしてリセリアは告げる。恐らく、最も言いづらかったであろうことを。

「この《鳥籠の地》は、私を守るために世界が作った檻なの」

* * *

「この世界は、神に愛された世界である」

暗くなり始めた空の下。焚き火に照らされた森の一角で説き始めたりセリアのその最初の言葉に、ヒューイは聞き覚えがあった。

この世界はその内に個別の小さな生命体を無数に内包した、一つの大きな生命体であるとされる。つまり、生物が各々の意志を有しているように、小さな生命の集合体ではあるが世界にも相対的な意志が存在する。

同じく、小さな生命体が己の肉体を維持させる意志があるように、世界にも己を保とうとする働きがある。それが生命体各々の遺伝子の中に組み込まれ、時に必要に応じて様々に変化を遂げる、『本能』というものである。

「でも、時にその世界のバランス維持機能から逸脱した生物が現れることがあるの」

生物の多様性に満ち、生命の溢れる美しき世界を神は愛していた。そこで神は、世界がより長く、美しく存続できるよう、その生物を是正するための一つの祝福を与えた。

それが、化身。

「化身は、そういった生物の存在を正すために世界から生み出された存在」

世界が正常な生命の流れを保てない危機に陥った時、世界の意志の欠片は、その是正すべき生物の元を訪れ、対話を行う。その生物と同じ姿と思考、世界の意志の両方を持って、海や大地の汚れ、悲鳴を伝え、そして、世界という生命が正常なバランスを保ち存続

できるように、その生物の在り方を是正する。それが化身の役割だった。

「……化身にはね、親はいないの。そんな化身が生まれ、守られる場所が城」
カストル

ヒューイからやや距離をおいて膝を抱えるリセリアは、少しだけ寂しそうに呟いた。

化身は城にて人知れず命を芽吹かせるが、それ以後の成長には生物と同じだけの時間を費やす。その間、化身は眠り続け、そうしていつの日か、定められた『対話すべき姿』にまで成長した時、ようやく『目覚めさせる者』を呼ぶことが出来る。

しかし、化身は世界を守ると同時に、時に危険も招く存在でもあった。

化身とは世界そのもの。姿形は他生物であろうとも、化身の身体は体現される世界と同一のもので、核となる心は世界の意思そのもの。故に、空の化身は空の汚濁を痛みとして感じる事が出来るが、反対に空の化身が怒り狂えばその心に同調して空は嵐となる。

「そんな化身が他生物の意の下に置かれてしまったら」

ぐつと、体を丸めたりセリアが顔を隠して息を飲む。その姿を見て、それまで呆然と話を聞いていたヒューイは、ようやく胸の奥に突っ掛かっていたものが取れるのを感じた。

「そっか……」

ヒューイは吸い込まれるように、周囲を染め上げる夕日と同じ赤い炎を見つめていた。

「リセリアは、自分が軍に利用されるんじゃないかって思った。それが怖かった」

だから言わなかった。だから言えなかった。

リセリアは空の化身。心一つで天候を変えることが出来る。リセリアの働きによっては、両国は大きな利益を受けることが出来る。

リセリアが何者か知れば、軍上層部は戦争に勝つために必ずリセリアを利用する。それぐらいは、《鳥籠の地》しか知らない安易に想

像がついた。

「信じて、くれるの……？」

リセリアが顔を上げ、不安な面持ちでヒューイを見つめる。そんなリセリアの姿を前に、ヒューイの口元には、いつの間にか微笑が浮かんでいた。

疲れて重くなっているはずの腰を上げ、リセリアの隣に座り直す。小刻みに揺れる肩を抱き寄せれば、互いの暖かさが如実に伝わる。日と共に落ちる気温のせいかな、その暖かさは薪の火よりも強く感じられた。

「……まだ、話が現実味を帯びてなくて、少しだけ混乱してるのは、確か……」

ポツリポツリと、零す言葉一つ一つを選んでいくヒューイを、リセリアが泣き出しそうな顔で見る。空は、一面茜色の雲で覆われていた。

ヒューイは生まれてこの方、視認できない神の存在など考えたこともなければ、超常現象の一つにも遭遇したことがない。リセリアに化身だ城だと言われてもあまりにファンタジックな話で、今一つぴんと来ないのは確かだ。

けどさ、とヒューイは続ける。

「リセリアの言っていることは信じられる」

今思い返せば、確かに空の表情はリセリアの心模様と同じような動きを見せていた、と納得できる部分も多かった。カルダの部屋で話をした時や、初めて後部座席に乗せて飛行した時、リセリアの笑顔のように空は澄み渡っていた。アルクスと接触した時は、相当に不安だったのか泣き出しそうな曇り空。初めて逢った時は、嵐の中でヒューイに助けを求めた。心の中で、泣いていたのだろう。

「ヒューイは……許してくれるの……？」

「許す……？」

咄嗟に低く呻いてしまっていたヒューイに、怯えたのかリセリアは顔を伏せて口を堅く閉ざしてしまう。覗き見たその表情は 真

相を話すのを躊躇っていた時のもの。何かがおかしい。

周囲を染め上げる夕日と同じ赤い火が、ぱちぱちと音を立てて爆ぜる。数秒後、リセリアは意を決したかのように小さく唇を開けた。「だって、だって、私の、空の化身のせいで」

「リセリアのせいで、この地は《鳥籠》になつたのに？」

第三者の声は、突然だった。

ヒューイもリセリアも、反射的に背後を振り向く。

「アルクス……！」

ざんばら頭に、ダークレッドの軍服。いつもゴーグルを額の上に乗せているヒューイとは反対に、アルクスは飛行機乗りのゴーグルを首に掛けていた。こうして地上で直面してよく見た顔は、予想以上に幼さを残していた。

「昨夜ぶりだな。二人とも無事で何より」

目を見開くヒューイ達に向かってアルクスはにつこりと笑ってみせる。明らかな作り物の笑みだが、それでもその口調が相まって、アルクスからは友人と世間話でもするような雰囲気の流れていた。ただしそれも、両足の太股にベルトで固定された、ホルスターに入った二丁の拳銃の存在を忘れればの話だが。

ヒューイはリセリアの手を掴んで立ち上がると、一足飛びにアルクスと距離を置き、身体を反転。リセリアを背後に庇い、後ろ腰へと手を伸ばして動きを止める。その間約二秒。

腰の後ろには、一丁の自動拳銃がベルトに固定されていた。墜落の際に浸かった海水のせいで使い物にはならなかったが、相手への牽制ぐらいにはなるかもしれない。

「それにしてもホント意外。軍には伝えてないだろうとは思ってたけど、リセリア、今になって自分が化身だって事ヒューイに言っただ」

潜んで今までの話の一部始終を聞いていたのか、心底意外そうに呟くアルクスの視線にリセリアがヒューイのローブを握る。

アルクスに拳銃を抜く気配は見られない。だがいつ戦闘状態に突

入してもおかしくない上に、アルクスが単独でここに来ているとは考えにくい。伏兵が潜んでいるかもしれない。

一体何が言いたいのか。リセリアを奪うためにやってきたのではないのか。ナディアに追跡されないように手を打ってここまで来たというのに、アルクスはどうしてこの場所が分かったのか。一気に噴出する疑問の数々が、ヒューイの脳内を目まぐるしく回る。だが、それらのことよりももっと気にかかることがあった。

「リセリアのせいで、《鳥籠》って、どういうことだ」

「簡単なことだよ。ね、リセリア？」

アルクスは敵対心を剥き出しにするヒューイとは正反対に、好意的に頷いてリセリアを見る。

頬に汗を伝わせるヒューイの背後でびくつ、とりセリアの肩が跳ね上がった。

「……化身が目覚めるまでの間、眠れる化身を守るために世界は閉鎖的に作られた……だから……」

いつも見られたような天真爛漫さを押さえ込んだ、化身としての面持ちで、けれど隠し切れない怯えを滲ませて、リセリアはとつと語った。

城は、海の化身なら城は深海に、大地の化身なら地中深くというように、それぞれが体現する世界の中に存在する。その城の海流や気流、大地の変動、火山の活動。そういった世界のあらゆる動きによって、城は生物の存在する世界から隔絶に近い状態となる。

その隔絶が解かれ、城が世界へ開かれるのは、化身と世界の何者かが互いを望んだ時だけ。化身が対話の架け橋となる存在を望み、是正されるべき生物が世界を望んだ時だけである。

化身の理を話し終えたりセリアに、アルクスは舞台役者のように両手を大仰に広げて、満足そうに頷いた。

「そう。空の城は俺達のこの、レーレヘイト大陸の上空にある。だから、この大陸は岩礁輪や環気流によって外海と内海を遮断されている」

「……空を浮遊する、空の城は、あまりにも人目につきやすい、から……」

故に空の城は、空の化身が眠る間レーレヘイト大陸の上空という場所に留まる事を定められた。そのための風が環気流であり、大陸への侵入する生物を限定するための岩礁輪である。そして、ヒューイたち飛行気乗りたちが空高くまで飛ぶことを許さない、大陸上空を行く不規則な風。

「アンタは許せるの？ 俺たちの翼を閉じ込めるこの檻を。オレがそれ聞いたときは、耐えられなかったけどなあ」

リセリアを。そう彼女に向けて笑んだアルクスは無用心にもヒューイ達から視線を外し、木々の間から覗く茜雲が浮かぶ紫苑色の空を見上げる。その瞳はリセリアに語りかける時にも見たことのないほど、穏やか。海の風を思わせる静けさ。

アルクスは おそらく自分と同じだ。直感的にヒューイはそう感じた。

空が好きなのだ。飛ぶことが何よりの生きがいなのだ。重力の束縛から放たれ、心の赴くがまま、ひたすらに風を感じて飛び続ける。それがヒューイは何よりも楽しみだ。

だから、尚のことアルクスの気持ちは分かる。けれど、

「許すも何も、それはリセリアが原因じゃないだろ」

飛べなくなる責任をリセリアに擦り付けるのは筋違いというものだ。

意見を変えないヒューイに、アルクスの視線の温度が下がる。だが、それも一瞬のこと。ヒューイとリセリアを交互に見て、アルクスは笑みを深くした。

「それは、この十八年間にあった戦乱が、この地が《鳥籠の地》であつたが故に起こつたって事を知っても、同じ台詞が吐ける？」

「《鳥籠の地》だから……？」

眉を顰めるヒューイの服を背後で掴む手に力が入る。ヒューイはアルクスから意識は逸らさずに目の端で見た。リセリアはヒューイ

の背に隠れるように体を一層小さくして俯いていた。

アルクスはその様子に気付いてはいるだろうが構う気はないらしく、作り物の笑みを浮かべたまま続けた。

「十八年前の戦争の発端って、知ってる？」

「経済状況の悪化じゃないのか」

正直なところ、ヒューイは戦争の発端となった出来事、もしくは原因をよく知らない。何せ、当時のヒューイはまだ物心もついているような子供である。戦争についての詳しくは軍学校に入ってから知ったが、その頃には既に休戦から十二年も経過していて、戦争の事など既に過去に終わった事であるという扱いが強かった。

ただ、ナディア皇国の経済が困窮したために戦争が勃発した、という知識は、座学が嫌いなヒューイの中にもおぼろげながらあった。だが、アルクスはヒューイの答えに首を横に振った。

「確かに、皇国内経済の悪化はあった。けれど、それは結果論」

アルクスは自身を落着かせるように、一呼吸を置く。

「ナディアは、もう行き詰った国なんだよ。……ナディアが保有する山には、もう大した鉄鋼資源が残されていない」

そう言ったアルクスの表情には明らかな疲弊が見て取れた。肉体的ではない、精神的な。

「ナディア皇国は古くから、山岳地帯から取れる鉱石を使った鉄鋼業が盛んだ。けど、二十年と少し前を境に、あちこちの山で鉱脈が死に始めた。資源は有限。搾取し続ければ、いずれ枯渇する。その後の調査で山岳地帯の採掘可能な場所には、もうほとんどの資源がない事が発覚した」

鉄鋼業で国を支えていたナディア皇国の地から、その原料が取れなくなる。そしてメテオール帝国の地にも、ナディアほど豊かな鉄鋼資源があるわけではない。それらが示す事は、経済の停止。貿易で国を立ち行かせることすらも出来ずに、ナディアの経済は停止を余儀なくされるだろう。

「先王は……メテオールのように農業や牧畜で民の生活を支える事

も考えたが、荒涼地帯の多いナディアではごく限定された地域を除いて不可能だった。近い将来に国が立ち行かなくなるのは明らかだったよ」

そう言われて思い出したのは、昼に訪れた滅びかけの町だった。近いうちに立ち行かなくなる、国の先達ともいえる町。それがあの町だったのだろう。

「メテオール帝国とは昔から国力を競り合ってきた。ナディアの経済が底辺まで沈めば、ナディアは確実にメテオールに呑み込まれる」
レーレヘイト大陸は、狭い大陸だ。国は一つであったほうが、経済的にも政治的にも都合のいい事とはいくらでもある。だが一つになったところで、古くから確執のあるメテオールとナディアの溝はそう簡単には埋まらないだろう。農工業共に落ち込んだ相手国に対する扱いがどんなものかは、言わずとも分かる。

「だから、《外》に救いの手を求めた」

その一言を聞いて、ヒューイはようやく、アルクスの言わんとしている事を掴みかけた。

大陸が閉鎖されたままでは、ナディアは一つの国として存続することはどうあっても難しい。レーレヘイト大陸から出て、国を存続させるためにどんな手があるかは分からない。しかし、それが最後の希望だったから 故に《外》に羽ばたく事を望んだ。その為に、この鳥籠を開放できるとしたら、空そのものである化身だけである。と。藁にもすがる思いで、ナディア皇国は微かにしか残っていない化身の伝承を調べ、城を探した。そして、

「ツスタンド山脈。国境線となるあの空域に、ナディア皇国軍が触れた」

たった少し国境線に触れただけ。それが戦争の始まり。そこからは泥沼の戦いだった。

しかし、工業において遅れを取っていたメテオールはそもそも戦争できるほどの軍事力を保有しておらず、その頃のナディアは経済情勢が傾きかけていた時期であった。両国の国力不足。その為、開

戦から僅か二年で休戦協定が結ばれた。

しかし、その十四年後に協定はあっさりと破られる。

「空の城が浮遊するのはツスタンド山脈付近の上空であることは判明していた。再び国境線に触れれば再び泥沼の戦争にもつれ込むのは目に見えてたし、戦争なんてする力がナディアに残っていないことも分かっていた。それでも」

アルクスが言葉を詰まらせ、恋焦がれるような目で空を見上げる。その先が彼の口から語られることはなかった。

言わずとも、分かった。もう、ナディアに先はないのだと。

だんまりを決め込むヒューイの顔を見て、理解したことを察したのだろう。再び視線をヒューイたちに向けたアルクスが、満足げな笑みを浮かべた。

「分かる？ 空の化身がいたから、この地は《鳥籠の地》になった。《鳥籠の地》だから、戦争が起こった。オレ達は、戦争が起こったから両親を失った」

「……っ！」

驚きに息を呑む。ヒューイの素性まで調べ上げたのかということではなかった。アルクスが自分と同じく戦争で両親を失っていた事。そしてアルクスは、ヒューイがそれによって戦争を嫌っているのを知った上で事を告げていたのだということ。

確かに、ヒューイは戦争を好いてはいない。しかしその戦争が、リセリアが存在する事を発端としているのだとしても、彼女を責め立てる理由にはならない。

「戦争がなければ、戦闘機になんか乗らなくて済んだかもしれないのに？」

内心を見透かした、冷やかな一言。今度こそ、驚きを通り越してヒューイの中の時間が凍り付いた。

（戦争が、なければ……）

戦争がなければ、ヒューイは軍にはいない。飛行機乗りであつても、戦闘機には乗っていないだろう。任務だの軍人意識だの、そん

な難しい事は考えずに自由に羽ばたいていただろう。相手を撃つ事なんて、きつとなかった。

愕然として中空を見つめるヒューイに、アルクスが左手を差し出す。友好の握手ではない。

「だから、リセリアを渡してよ。リセリアがいれば、『鳥籠の地』を開放できる。最良の形で戦争を終わらせる事が出来る」

柔らかい口調。だが、それはお願いなどという生易しいものではなかった。要求 『渡せ』という二文字がヒューイに叩きつけられる。

雷に打たれたような気分だった。目が覚める。

返事は、昨日と変わらない。リセリアについて何も知らなくても、全てを知った後でも。

「それとこれとは、別だ。リセリアが誰と一緒にいるかは、リセリア自身が決めることだ」

「わ、私、は……」

何か発しようとするリセリアの声を遮って、彼女を背に庇う。

ヒューイとアルクスが、揃ってリセリアを見る。

リセリアは、明らかに怯えていた。流麗な顔を不安でいっぱいにして、それでもヒューイの傍を離れようとしなかった。

それが、答えだった。

「……分かった。もう言わない」

アルクスの瞳から、それまで宿っていた優しい光が消える。彼がリセリアを諦めるわけがない。ならばここからは、奪い合いだ。

リセリアを木の陰に隠そうとするのと同時に、牽制代わりの拳銃を引き抜く。その瞬間、パンツと乾いた音が木立に響く。

それが目に捉えられないほどに速いアルクスの抜き撃ちだと理解したのは、腹部に熱い痛みが走ってからだった。

* * *

「ヒューイ！」

悲鳴に似た声を上げて、リセリアが崩れ落ちるヒューイを抱き留めようとする。もつれるように、ヒューイとリセリアは地面に倒れこんだ。

逃げる、と。言いたいの痛みが全身の神経を支配していてまともにも言う事ができない。薄っすらと開いた口からは、かすれた呻き声だけが漏れていく。

「かつ……」

熱い。左脇腹が焼けるように熱かった。傷口を押さえる手が、一瞬にして湿り気を帯びる。それだけで、血が危険な勢いで流れ出ている事が分かった。

地面に転がり痛みに身体を折るヒューイの目の前で、アルクスがリセリアの腕を掴んで無理矢理に立たせた。森を貫く、短い悲鳴。

それを聞いた瞬間、ヒューイは痛みではない何かによって全身の血が沸き立つ感覚を覚えた。

「くっそ……はな、せ……」

「うるさい」

大した狙いもつけてなかったのか、今度のは右二の腕に命中した。持ち上げようとしていた身体が再び地に沈む。

霞む視界には、目じりに涙を浮かべるリセリアの姿が映っていた。後頭部の髪を乱暴につかまれている。リセリアの横顔の直ぐ近く、くっつきそうなほどの距離にアルクスの顔があった。

「どうしてそんな奴の事気にするの？」

リセリアが、吐息と共に小さな声を零す。つかまれている髪の痛み、顔が歪んでいた。

「リセリアは空を助けて欲しいんだろ？ だから、『助けてくれる誰か』を呼んだ。その声を聞いたのはオレとソイツ。だけど、リセリアのところに辿り着けたのはオレだけ。オレだけが、リセリアを助けてあげられる」

アルクスの束縛から逃れようと、リセリアがもがく。だが、爪先

立ちの不安定な状態では大した身じろぎも出来なかった。

そんなリセリアに、アルクスはいとおしげな眼差しを向けて微笑む。

「空色カライロの空、空色のリセリア。何もない、空っぽの空。可哀そうなりセリア。君には何もない」

その言葉が降り注いだ瞬間。それがまるで魔法の呪文であつたかのように、リセリアの動きが止まった。何かを言おうと唇を開き、しかし悲嘆にくれた表情で口を閉ざす。リセリアは、それを繰り返していた。

「でも大丈夫。オレなら、君に色んなものをあげられる」

リセリアの左目から、雫が一筋零れ落ちる。ぽつ、とヒューイの頬に水滴が落ちる感触。涙雨、だった。

それを見て、アルクスはリセリアの頭を掴んでいた手を離れた。呆然とその場に立ち尽くすリセリアに両腕を回し、金糸を指で梳く。しばらくその感触を堪能したのち、アルクスは地に倒れ伏すヒューイを振り返った。

「そんなわけだから 死んでよ、《空帝》」

黒光りする拳銃が、ヒューイに向けられる。

身体を起こして、遮蔽物の陰に移動する。そんな芸当が出来るほどの余力は、ヒューイの中のどこにも残されていなかった。

だが引き金が引かれる時は、一向に訪れなかった。

アルクスが何かに気付いたように、拳銃を木立の中へ向けた。抜け殻になったようなりセリアを右手に抱いて、素早く後退する。

直後、アルクスのいた場所の地面が、無数の銃弾によって抉られた。

一体誰が そう思うのと同時、木々の間から耳に馴染んだ声が聞こえた。

「よく気付いたもんだ」

カルダ ヴェルナー西基地で別れた、上官兼腐れ縁が小口径機関銃を両手に抱えてそこに立っていた。背中には切り離れた後のあ

るパラシュートが背負われている。口元に浮かぶ不敵で憎たらしい笑みは相変わらず。無事だった。

鈍くなっている聴覚を研ぎ澄ますと、上空をレシプロ機が飛んでいる音が聞こえる。メテオール軍の機体のものだった。

と、地面に倒れるヒューイを脇目に見て、自信満々のカルダの笑みが崩れる。お前、明らかに今やばいって思っただろ。

木の陰に身を潜めたまま、アルクスがよく通る声を出す。いくらアルクスが速射に秀でていても、拳銃と機関銃では結果は明白だった。

「何故、お前らがここにいる」

「スパイを忍ばせているのはそっただけじゃないって事だ」

「なるほどねえ。まさか、一下士官のためにこんなところまで来るとは思えないけど……ようやくリセリアの重要性が理解できたって所かな」

「そういうことだ」

アルクスの隠れる木に銃口を向けたまま、カルダが淡々と応える。その様子に、アルクスから高らかな笑い声が迸った。

「遅すぎるのもいいところだ！」

だが、その耳障りな笑い声は突如として消え失せた。まだ森の中に残る余韻とともに聞こえてきたのは、人を嘲るような言葉。

「さてとまあ、ここでそちらの隊長さんに相談だ。今地上にナディア軍はオレ一人しかない。俺を撃ち殺せば、リセリアは取り戻せる。だが、この近くには軍の基地がある。さあどうする？」

カルダがアルクスを殺せばリセリアを取り戻せる代わりに、基地の戦闘機部隊がここに殺到し、リセリアを除いた全員を始末する。上空に待機している機体数からして、一つの基地全部を相手に出来るわけがない。つまりところリセリアを渡すのであれば、この場は見逃すと言っているのだ。

「今のオレは機嫌がいいからな。その約束はちゃんと守ってやるよ」
その言葉に、カルダから逡巡する気配が感じられる。だが数秒お

いてから、

「いいだろう」

とだけ小さく応えた。

物分りのいい隊長さんでありがたいね、と満足そうな言葉を残し、アルクスが山を下り始める。既に目を開けている事さえ辛いヒューイには、その様子を音で知る事しか出来なかった。

「ヒューイ……！」

リセリアが涙声で呼ぶ。それから涙を堪える息遣い。アルクスの足音は既に耳に入らなくなっているというのに、何故だかその声だけははっきりと聞こえた。

「っ……………空を愛し、空に愛されし者よ」

聞いた事のあるフレーズ。知っている。空を翔ける者だったら、知らぬものはいない。

空を愛し、空に愛されし者よ

空色の呼び声に応えし時

蒼穹の頂きにて相見え

追風に舞う強き翼を以て

鳥籠は開かれん

そう呟くりセリアの声は、ヒューイの心の奥深くに染み入っていた。

第五章 飛べない鳥

ずっと、雨の音だけが聞こえていた

身体が重力を浴びた感覚は、ヒューイの混沌とした意識を唐突に叩いた。

瞼を開ける。そう念じると、二度と開けられないと思ってしまうほどに重かった瞼は、予想に反してすんなり開いた。

ぼやけた視界に映ったのは、清潔そうな真っ白い天井だった。続いて嗅覚が戻る。鼻を突くような薬品の臭いがした。それから少しずつ聴覚が感じられるようになってきた。

静かな室内だった。だがヒューイが目を覚ました事に気付いたらしく、途端、周囲が騒がしくなった。誰かが部屋を出て行く音。

どうやら医務室のベッドに寝かされているらしかった。

微かに目を動かすと、ベッドの傍らからヒューイを見下ろしている女性軍医の姿が映った。軍医はこちらの状態を確認するために、幾つかの質問を投げかけてくる。しかし、ヒューイはそのいずれにも応えようとしなかった。応える気力などなかった。

そうしている内に、医務室に人が二人駆け込んできた。カルダとルベリエだった。軍医に静かにするように注意されているのにも関わらず、ヒューイの顔を覗き込んで口々に大丈夫か、と聞く。

だがそこに、彼女の姿はない。

首を傾げて、窓の外を見る。空には灰色の雲が覆いかぶさり、雨が深々と降り続いていた。「リセリアが、泣いてる……」

何故だか、目の端から冷たい水が一滴流れ落ちた。

「そう畏まらないでくれ。別に何をするわけでもないのだから」

簡素な木製の椅子に、それに似合わない優雅な仕草で腰掛ける黒髪長髪の若い女性が、そう言ってリセリアに苦笑してみせる。だが、

彼女の向かいに座るリセリアは身体の力を抜く事が出来なかった。それも当たり前。目の前にいるのはナディア皇国女王イスカ。二週間前、空の城にて眠るリセリアを連れ出すようにアルクスに命令した張本人である。気を抜けというほうが無理な話だった。

ナディアの山中でヒューイと別れた後、リセリアはアルクスに連れられる形で約二週間ぶりとなる空の城への帰還を果たしていた。

というのも、その二週間の間に城はすっかりナディア軍の軍事拠点となっていたからである。アルクスとリセリアが呼び合った事により、アルクスがいるならば空の城への道が開かれるようになっていた。

リセリアはふと、小さな部屋の中に視線をめぐらす。

時が来るまでここにいるように、とリセリアに与えられた部屋の中には柔らかそうなベッド、ローテーブルとソファ、ドレッサーといった生活家具が配置されていた。これらは元々空の城に用意されていたものである。

空の城は不思議なもので、その内部構造を生まれいずる化身の望むものに変えてしまう。人型となった現在の空の化身・リセリアが人として過ごせるように、今の空の城は人の生活が出来るような造りへと変わっていた。

リセリアがここで過ごすようになってから、今日で三日目。今リセリアは、ナディア王都レイテンからやってきた女王イスカと対峙していた。

ローテーブルの四方を囲むソファのうち、イスカの向かいにリセリア、二人の間の片席にアルクスが足を組んで座っていた。テーブルの上にはリセリアをもてなすための紅茶や菓子類が並んでいる。いかにも午後のティータイムのような雰囲気醸し出しているが、三人の間に漂っている空気は重かった。

落ち着かずがちらりと一瞬だけアルクスを見ると、彼はすかさずそれに気付いて優しいげな笑みを浮かべた。

「そんなに肩肘張らなくて、イスカは優しいから大丈夫だって」

「や、優しいって……よくもそう躊躇いなく言えるものだ」

そう言われる事に慣れていないのか、黒猫のような印象を与える女王の頬に少しだけ朱が指す。しかし、その顔は直ぐになりを潜めてしまった。

居住まいを正し、イスカはリセリアを見据えた。女王としての風格が漂う。

「まずは、謝罪をさせてほしい。これまでの数々の手荒な真似、申し訳なかった」

そう言っ てイスカは静かに頭を下げた。さらり、と床にまで着きそうなほど長い髪がその動作に合わせて揺れる。

「しかし、その上でお願いしたい。閉鎖されたこの《鳥籠の地》を開くために、私達に力を貸して欲しい」

「私は……」

顔を上げ、リセリアを見つめるイスカの眼差しは、あまりにも真摯で誠実だった。思わずリセリアはたじろぐ。しかし、

「……ごめんなさい」

今のリセリアには、ただその一言を発するしかできなかった。

突然のリセリアの謝罪に、訝しげな顔をするイスカ。強張る場の空気に疎みそうになりながらも、リセリアはおずおずと口を開いた。「確かに、空の化身はこの空を取り巻く環気流を取り除くことが出来る。でも私にはできない」

できない。その一言にアルクスの眉間に皺が寄る。しかし、イスカとリセリアの間でやり取りされることに、口を挟む気はないようだった。

「私は化身として、未熟なの」
「未熟？」

鸚鵡返しに聞くイスカに、リセリアは小さく頷いた。

あの日、アルクス 対話の架け橋と成りえる者 が空の城を訪れたことによりリセリアは目覚めた。

だが、それは本来目覚めるべき時ではなかったのだ。

リセリアが定められた姿は、今の形ではない。もつと心身ともに成長し、成熟した後にリセリアは対話の架け橋を望み、そうしてから目覚めるはずだった。

故に、不完全で未熟。リセリアは化身として成長過程にあった。

空の意志を核に作られていることには変わりはないが、未熟であるがためにリセリアと空の変化が完全に同調しているわけではない。加えて、本来の化身が行えるはずの『生物としての意志で世界を操る』という事が、リセリアには出来なかった。

それを告げた瞬間、アルクスの顔をから感情が消えた。

「何それ……今更そんな事言うわけ？」

「アルクス、止めなさい」

立ち上がったアルクスを、イス力が宥める。アルクスの顔が瞬きの間に怒気に染まる。

「さんざんこの大陸の連中は空の化身のせいで苦しんできたんだぞ。閉鎖された空を見ながら。それがようやく開放されるっていうのに、今更……！」

「アルクス！」

イス力が立ち上がって、アルクスの腕を掴んだ。

「じゃあ、なんで……なんでオレとヒューイを呼んだりしたんだ！」

頭上に降り注ぐ、アルクスの激昂。リセリアは俯いたまま口を閉ざし続けた。

自身の意志で自在に大気を操る事が、完全に出来ないわけではない。事実、リセリアはアルクスの飛行機から飛び降りた時、大気を操って落下速度を和らげる事が出来たために生きていた。だがそれは、感情の高まりに空が同調したために出来たのだ。

あれと同じような事が、もう一度出来るとは思っていない。リセリア自身、己の意志のみで大気を操ろうと試みたが、どうしても出来なかったのだ。

「所詮」

落ち着きを取り戻したかに見えるアルクスが、低く呻いた。

「空色のリセリアってことか」

そう言い残して、アルクスは荒々しく部屋を出て行った。残されたイスカがすまなかったと、部下の非礼をリセリアに詫びる。気分を取り直してお茶でもしようと氣遣ってくる。リセリアは、何も応える事が出来なかった。

* * *

ヴェルナー西基地は陥落した。現状の説明を求めたヒューイに対し、カルダはまず一言そう告げた。

ヒューイが渦島内海に墜落した頃、既に基地の存続は絶望的だった。そこで、ヴェルナー西基地の総指揮官からはこれ以上の人命が失われる前に、と早々に基地廃棄の決断が下された。それによって多くの者は無事基地からの離脱に成功したようだが、それでも爆発時の被害を含め、相当数の人が亡くなったらしい。

逃げ延びた者は、ヴェルナー西から最寄りの基地であるヘイズ基地へとひとまずは身を寄せた。受け入れ可能な人数の都合により、一部の者は各地の軍事施設への移動を余儀なくされたが、カルダとルベリエは今いるヘイズ基地に残ったらしい。

「……どうして……」

医療ベッドの上に上半身を起こしたヒューイは、壁に持たれかかっているカルダに小さく呟いた。その近くには、ルベリエがスツールに腰を下ろしている。

「どうしてリセリアが化身だって知ったんだ？」

ナディアの山中に突然現れたカルダは、アルクスの「リセリアの重要性を理解」という言葉を肯定していた。つまり、カルダの部隊はヒューイ達を助けるためではなく、空の化身リセリアを奪還するために派遣されたのだ。

しかしリセリアが、自分は化身であるということを伝えたメテオールの人間は自分だけだったはずだ。

「ん？　そういうお前は何で知ってるんだ？」

「……ナディアにいた時リセリアが、話してくれた。俺には……知って欲しいからって」

その応えにカルダは、思うところがあるようにそうかとだけ返し、数拍おいてから、

「彼女が人間離れた存在じゃないのかってというのは、最初から疑っていた。こう言っては悪いが、初めて会ったときから正直人間らしい感じはしなかったからな」

人間らしい感じはしなかった。カルダの感じたその感覚は、ヒューイにもあった。といっても、カルダのように違和感を覚えるほどの強いものではなく、世俗離れしている、程度のものだったが。

「それと基地が襲撃された一件。あれでどうにも気になって、帝都の軍本部に調べてくれるように頼んだ。過去、ツスタンド山脈の地域で人が見つかった例、もしくはそれに類似する出来事がなかったか」

「そしたら、あったのよ。何百年か前、山脈付近でリセリアと同じ金髪碧眼の人が見つかった例が。その人はリセリアと違って男性だったらしいけど」

ルベリエがカルダの話を引き継ぐ。

「そこに、少しだけ化身の記述があったわ」

この大陸における化身の発見が少ない以上、古い言い伝え程度にしか認識されてはいないだろうが、存在すること自体は、知識であれば知っている人は多いだろう。

「それで確信した。リセリアは空の化身　空の意志を持った人型の生物。空そのものだったな。そらの化身であるならナディアが執拗に狙う理由も納得が行く」

その結論に自力で辿り着いたカルダの勘の鋭さには、ヒューイも心底驚くばかりだった。

「それを軍に、言ったのか」

そう呻くように呟いたヒューイの声は、烈火の感情に揺れていた。

軍の任務が出なければ、カルダが部隊を率いる事は出来ない。だが、一人の下士官ごときを軍がハイリスクを犯してまで救いに来れるわけがなかった。それは、軍がリセリアを化身だと知った上で、カルダにリセリア奪還の任を与えた事を示していた。

震えるくらいに強く、ヒューイは左手を強く握り締める。

リセリアは軍上層部にそれを知られる事を恐れていた。知られれば、ナディアと同じようにメテオールがリセリアを利用しようと目論む事が目に見えていたから。

リセリアが化身であると分かれば、あれほど彼女が事情を明かすのを拒んでいた理由ぐらいカルダだったら容易に察しがつく。それなのに、カルダは軍上層部にそれを明かした。

「言ったよ。だから俺はお前を助けにいったんじゃないか」

お前を助けるために言った。そんな言われ方をしているようで、ヒューイは一層の怒りを覚えずにいられなかった。だがそれと同時に、カルダを責めるのも間違っているという自制心が働く。

カルダはリセリアの一件で、上から報告を求められていた。軍人である以上、上の命令には従わなくてはいけない。それに、リセリアの事を明かさなければなおのこと戦況が混乱するのも明らかだった。

「どこへ行く」

「決まってる。助けに行く」

ベッドから降りようとするヒューイを、カルダが鋭く呼び止めた。医療用の薄い服の下、何重にも包帯の巻かれた箇所がズキリと痛む。アルクスがリセリアを連れ去った直後、カルダはヒューイに応急処置を施したらしい。墜落による怪我等をみこして、用意周到に救急救命道具を持ってきたのだ。そのかいあってか、ヒューイは無事一命を取り留めたらしい。らしいというのはヒューイが、アルクスが去ってから先程まで意識を失っていたからだ。

怪我の具合はそれほど酷くなかった。命に関わったのも出血の多さが原因らしく、内臓の損傷もほとんどない。身体に鞭を打てば、

動ける。

「呼んでるんだ……」

あの時 リセリアを見つけたときと同じ感覚がヒューイを襲っていた。何故だか分からないが、行かなくてはいけない。動き出さずにはいられない。その原因が何なのか、今なら分かる。

リセリアが、呼んでいるのだ。リセリアがヒューイを呼び、ヒューイがリセリアを呼んでいる。

「アルクスと共にいることを、リセリアが選んだわけじゃない。だから……」

行かなくてはいけない。その言葉は音にならなかった。

夢現のように呻くヒューイを見ても、カルダは怖いほどに平静を保ったままだった。

「だとして、どうする」

冷ややかな声だった。

「奴らは今、空の城にいるんだ」

ナディア軍の部隊の動向から空を調べた結果、ツスタン山脈上空付近に空の城は浮かんでいたらしい。だが、その高度は二万フィート以上。ある一定の範囲内を浮遊しているらしいが、容易に近づける高度まで下がってくることはないとの事だった。

メテオールよりも一足早くその城を発見していたナディア軍は、今やその城を軍事基地として利用しているようだった。そしてその基地に、どこよりも戦力を集中させている。

アルクスが現れた時、ヴェルナー西基地でその接近を捕捉出来なかったのは、おそらく索敵圏外の高高度から接近されたためだった。空の城から離陸したのだとしたら、それほどの高度を維持することも不可能ではない。

「それでも行く」

「いい加減にしろ！」

頑なに言い続けるヒューイに、突然カルダが怒鳴った。

「お前の乗る機体はもうない。他の機体を回すだけの余力なんて今

の軍にはないし、乗れたとしてもうちの機体じゃスペック不足だ。
よしんば辿り着けたとしても空の城は敵の巣窟だ」

目の前に叩きつけられる、機体性能の差。

ナディアの機体と違い、帝国の機体は機動性には富むが、より高度での飛行には適していない。飛べない事はないが、速度は確実にかなりの低下を強いられる。そんな状態で空の城に辿り着いても、高度飛行に適したナディアの戦闘機部隊に迎え撃たれる。

操縦士であるヒューイは、それを何よりもよく理解している。理解しているからこそ、口を噤まざるを得なかった。

俯き、言すべき言葉を失くしたヒューイを見て、カルダは声のトーンを下げる。

「リセリアの正体が分かった今、メテオール軍は彼女の確保に向けて動いている。近い内に、ナディアとは大規模な戦闘があると思う」
淡々と告げられた事実、ヒューイは緩慢な動きでカルダを見上げた。覇気のない動き、だが髪の下から覗く瞳は、これまで宿した事のないほどに剣呑な光に満ちていた。

軍に利用される事を、最もリセリアが望んでいなかったことだというのに

「……利用するのか。戦争に勝つために」

「使えるものは使う」

「っ、カルダはそれで納得できるのかよ！」

「納得なんてしてない！ リセリアをそんな軍の馬鹿どもに使わせたくない！ けれどリセリアの力が使えるなら使いたい！」

思わず張り上げてしまった声に、釣られるようにしてカルダも感情を顕わにした。ダグラス少佐ではなく、カルダという一人の飛行気乗りの本音。

「リセリアがいれば、大気を操り《鳥籠》を脱出できるんだ。もつと、どこまでも遠く高く飛べる。お前の飛んでいる高みまで届くかもしれないんだ！」

遠く高く、どこまでも 青い空を目指し、真っ白な雲を抜け、

限らない遥かなる高みへ行きたい。カルダのその思いは、空つぽの空を飛んだヒューイが一番よく知っている。きっと、一度でも空の中へ行つた事のあるものなら、少なからず感じているだろう。

だが、それでも 理由になんかできるはずがない。

「ふざけん ！」

ふざけんな。そう張り上げた声は、最後まで続かなかった。

パン、と。その瞬間、風船の破裂音にも似た高らかな音が医務室に反響した。

何が起こつたのか、分からなかった。

「……ふざけてんのは、どっちよ」

搾り出すような声が、ルベリエの声。ヒューイの目の前には右手を左に振り抜いたまま俯く彼女の姿。

ルベリエが鮮やかで、容赦のない平手打ちを放つた。呆然とするヒューイがそれを理解したのは、左頬に痛みを感じ始めた頃だった。

「……飛行部隊の連中が、なんであんたを嫌つてると思う……？」
茫然自失のヒューイを目の前に、ルベリエは肩を震わせてそんな話を切り出した。混乱に動かない頭が、ゆっくりと回りだす。

ヒューイ自身、第三遊撃隊を含めた操縦士にいい感情を持たれていない事を知っている。《空帝》と呼ぶときの彼らの表情は苦々しい。

けれどヒューイは知らない。彼らがどうして《空帝》への嫌悪を顕わにするのか。《空帝》と呼ばれたところで、軍からの期待はあるかもしれないが、それだけだ。特別に優位な待遇を受けているわけでもないのだ。

答えられず、ヒューイは口を閉ざす。

「あんたが……」

ルベリエは両の拳を体の横でぎゅっと握り締めた。その表情は、見えない。ヒューイには、見ることができなかった。

「あんたが風に乗ってどこまでも遠く高く飛んでいくのを、他の操縦士はただ後ろから眺めている事しか出来ない。ただ遠くから見て

いるしかできない。あんたみたいに、空を　　っ！」

抱え込んでいたものの全てを吐き出すように、ルベリエは顔を上げ、「空を飛びたくたって、飛べないやつだって大勢いるのよ！」

目の端に溜まっていた大粒の雫が、宙を舞った。

飛びたくたって飛べないやつ　　ルベリエ・クリソベル。かつて同じ部隊で空を飛び、空に嫌われ翼を失った飛行機乗りの素顔だった。今まで見たことのないほど感情を曝け出したその顔は、あまりにも幼く、視力を矯正する硝子の向こうに映る水珠が、今の彼女を物語っていた。

息を詰まらせるルベリエの肩を、壁から背を離れたカルダが優しく掴む。一度だけ抱き締めるように彼女の頭を引き寄せる。そのま

ま後ろに隠し、流れるような動作で一步前へ出る。
「いいか。その力は、お前だけのだ。お前にしか飛べない、お前

しか出来ない事だってたくさんあるんだ」
言葉を弾丸にするように、カルダはヒューイの鼻先に人差し指を突きつけた。

「その能力を称えられての《空帝》だろ。なのに、《空帝》と呼ばれるのは嫌だって？　贅沢言ってんじゃねえよ！」

贅沢　　？

確かに、《空帝》の呼び名は、ヒューイの飛行能力を称えられてのものかもしれない。けれど、それは戦争がなければ、その称号はおそらく生まれることなどなかった。戦闘機という鉄の翼を手にしたヒューイが数え切れない敵機を撃ち　　人殺しをしなければ。

生存率を上げるために、敵機パイロットは狙わない。それがヒューイの撃ち方だ。けれど、それが必ずしも生存に繋がるわけではない事を、ヒューイはこの目で見てきた。

機動力を失った戦闘機は敵機の追撃の危険に晒されるし、落下傘での脱出に成功したとしても、無事に国に帰れるわけではない。敵軍に捕らえられた捕虜は、者によっては人質となることもあれば、機密事項を聞き出すために拷問が行われることだってある。

ヒューイが空で会った者達の中には、ただ亡くなったただけではなく、そういった末路を辿った者もいたはずなのだ。

もしかしたら ヒューイが彼らに与えていたのは、生存の希望ではなく空で散るよりも辛い絶望だったのかもしれない。

ギリツと奥歯を鳴らし、ヒューイは血が滲むほどに強く手を握り締めて低く呻いた。

「俺は……そんな称号欲しかったわけじゃない。戦闘機に 人殺しをしたかったわけじゃない！」

「だったら軍なんて辞めろ」

その言葉は、冷や水のようにヒューイを打った。

「撃たなきゃ撃たれる。そうなった状況でお前は撃てるのか。相手を殺せるのか。確実にしとめられるのか！」

目を見開き、言葉を失うヒューイを目のしても、カルダの激昂が止まることはなかった。衝動を具現して、ルベリエが止めるよりも早くカルダの右手がヒューイの胸倉を掴む。

「空を飛びたいから飛行機乗りになるなんて、子供みてえな事言ってるじゃねえよ！ 俺たちは戦争やってるんだよ！」

「っ！」

水を浴びせられて消えかけていたヒューイの中の火が、業火となつて思考を迸る。反射的に、ヒューイは胸倉を掴んでいたカルダの手首を力の限りに驚掴みにした。しかし、あらん限りの力で掴んでいるというのに、医療服を締め上げるカルダの手は一切緩まない。

「じゃあカルダは空を飛ぶ 戦争をする覚悟があるから、飛んでるっていうのか」

「当たり前だ。飛ばなきゃ、守りたいもんも守れない」

そう、真っ向からヒューイを見返すのは、曇りのないカルダの黒曜石の瞳だった。その瞳に宿る光を、ヒューイは知っている。記憶の中 戦闘機に乗る時にいつも見る、立ち塞がる全てを貫くような光。士官学校時代にも度々見ていたその強い光が輝きを増したの
は、

「守りたい、もの……」

カルダにとつてのそれは、家族か友人か　あるいは恋人・ルベリエか。

うわごとのように言葉を反芻するヒューイの右手が、掴んでいたカルダのそれから滑り落ちる。それを目にし、カルダもそつと右手を離し、静かに背を向けた。

「お、れは……」

今度こそ、完全に返すべき言葉の欠片すらも失う。

そんなヒューイに浴びせられるダグラス少佐の言葉は、凍り付いた海のようにどこまでも冷ややかで淡々としていた。

「それと、降格の処分が下された」

呆然と中空を見つめていたヒューイの肩が、ピクリと跳ねる。

最前線のヴェルナー西基地が落とされ戦力が少なくなった今、わざわざ《空帝》を降格させる知らせが示すことはただ一つ。

お前の翼はもうない。

地に落ちた鳥は、ただただ沈黙してそれを受け取った。

* * *

いつの間にか、雨は止んでいた。

といつてもヘイズ基地の周辺が雨雲の切れ間に入っただけのよう
で、夕焼けに少し色を赤く染めた黒い雲が、まだ空のあちこちに浮
かんでいる。

ヘイズ基地の外れ　基地施設からやや離れた小高い丘に、ヒューイは一人佇んでいた。忍び寄る夜の影と共に流れていく暗雲を眺めるヒューイの髪を、湿り気を帯びた風が揺らす。

何もなかった。

今まで軍からかけられていた期待も、それに対して感じていたプ

レッシュャーも、《空帝》に向けられた飛行機乗り達の羨望と妬みの眼差しも 絶える事など一度もなかった、あれほど空に焦がれていた衝動さえも。

空っぽだった。

あの瞬間 『空色のリセリア』と。捕えられたリセリアがそう呼ばれた瞬間、彼女はこんな空虚な気持ちだったのだろうか。

あの時のリセリアの姿が脳裏に浮かぶ。空色と呼ばれ、一筋の涙を流したりセリア。

今ヒューイが感じているものが、リセリアのそれと同種のものなのか知る術はない。それでも、リセリアが空っぽだというのなら彼女に何も無いというのなら。彼女はずっとこんな無の感情を抱えていたのだろうか。

「空帝にしては、寂しい背中だねえ」

唐突に、ヒューイの背にどこか軽薄さを滲ませる声がかけられた。ゆるり、と気だるげに振り向くヒューイ。そこには、挨拶代わりに片手を軽く上げる馴染みの整備士・フェリオットの姿があった。

こんな状況下では避難先であるヘイズ基地でも仕事に追われているのか、フェリオットはいつも通りの薄汚れたつなぎ姿だった。見慣れたその風体に、安堵が胸を撫で下ろす。

カルダから現状に至るまでの経緯を聞かされた際にフェリオットの安否についても聞いてはいたが、実際に姿を目にするとやはり安心するものだ。けれど、疲れ果てた空っぽの心が、それ以上の何かを感じることはなかった。

「……無事でありよりだ」

「それはこっちの台詞だよ。生きてたなんてびっくりだ」

幽霊じゃないよね、と冗談めかして笑うフェリオット。ヒューイもそれにつられて笑いそうになり、しかし薄い笑みすらも浮かべることができなかった。思わず、フェリオットの笑顔から視線を逸らす。そんなヒューイの前に、フェリオットの明るい笑みもあつという間に消え失せてしまった。

空気が、重みを増す。俯き気味に歩み寄ってきたフェリオットはヒューイの隣に並び、ふと空を見上げた。その視線の先を、思わずヒューイも追う。雨雲を運ぶのと同じ風が、二人の間に流れる言葉を攫っているのかのように、沈黙が辺りを包んでいた。

静かだった。平原の草木を揺らす風。それ自体が葉擦れの音さえも一緒に抱え去ってしまったのか、まるで世界が口を閉ざしているようだった。

どれぐらいそうしていただろうか。速度を増して沈んでいく太陽が、低高度の黒雲の下に顔を覗かせた頃、フェリオットがおもむろに口を開いた。

「降格、されるらしいね」

事実を述べるフェリオットに、ヒューイは淡々と、ああと頷いた。「撃てない操縦士なんか、軍は要らないってことだろ」

過去、ヒューイの飛行態度に関して軍内で度々問題が浮上していることは知っている。戦場における度重なる軍規違反、拳句戦場に出ても撃たない。相手を確実に仕留められるよう撃たないとなれば、問題浮上も当たり前前的事だ。むしろ、今までそういったことがありつつも降格処分が下されなかったほうが不思議ともいえた。

おそらく、その結論に至っていないのは、ヒューイの行動が問題であっても、実践においては致命的な問題になっておらず、かつ第三遊撃隊が収めた戦績があるから。そして、何より《空帝》の名がメテオール国内のみならずナディア皇国まで知れ渡ることとで及ぼす効果の方が勝っていたからだろう。

だが、今回は違った。

『何で撃たないわけ？』

ヴェルナー西基地が襲われた夜、無線越しに投げつけられたアルクスの言葉が脳裏に反芻する。

あの時、ヒューイはナディア敵機を目の前にしても撃たなかった。否、撃てなかった。撃てば、相手パイロットが確実に死ぬ。そんな状況でしか、撃てるタイミングはやってこなかった。

その結果、メテオール軍は空の化身を失うことになった。

この失態は、いくら《空帝》だからといって見逃せるものではなかった。空の化身を手中に収めることは、空を統べる事とほぼ同義。その事の大きさを鑑みてなお降格処分程度で済んでいるのは、《空帝》の名のおかげなのだろう。

空虚が、無情にもヒューイに事を冷静に分析させる。

もし、撃っていたのなら。三対一という圧倒的不利な状況での空戦だったとしても、もっと違った結果を残すことが出来たのではないか。

そんな考えはもう幾度となく浮かんでいた。その度にヒューイが出した答えは、否。いずれにしたところで、アルクスはなんとしてでもヒューイの元からリセリアを連れ去っていただろう。

「撃てない《空帝》、か」

「俺は《空帝》なんかじゃない」

ポツリと呟いたフェリオットの言葉を、ヒューイは間髪おかず切り返した。あまりの切り返しの早さにフェリオットは目を丸くし、それからやれやれといった様子で肩を竦めた。

《空帝》じゃない、と。そう呼ばれ続け、だがそれを否定する言葉を聞いたら、きつとカルダは激昂するのだろう。それとも、もう呆れ果てて何も言わずに終わるのだろうか。だが事実、今やヒューイは《空帝》ではない。空の帝王だと謡われたヒューイは、その空でアルクスに負けたのだから。元々名ばかりだったその称号が確かにそうだったと証明されただけの話だ。

「ただ、飛びたかっただけなのに、な……」

不思議だった。空への衝動をあれだけ強く抱いていたことが、今のヒューイにとっては不思議な感情にしか感じられなかった。

今のヒューイの中には、追い風も向かい風もない。空を渴望する乾いた風すらも吹いてはいなかった。

飛びたかったただけなのに。そのために軍学校を出て、軍に入り、操縦士になったというのに、どうして今自分は大地の上にいるのだ

ろう。

「なあ……フェリオ」

空を見つめたまま零した呼び声が、一瞬で風に溶ける。それを聞き逃さなかったフェリオットも、ヒューイの方を見ることなく「ん？」と聞く耳を向ける。

「なんでフェリオは軍の 戦闘機の整備士なんてやってるんだ？」その問い掛けに何かを察したのか、フェリオットは感情の読めない声で「んー」と考え込む素振りを見せた。答えは、五秒と待たずに返ってきた。

「飛行機が好き、だから」

答えはあまりにも単純で明快だった。

「……本当にそれだけ？」

「そうだよ。それだけ」

あまりにあっさりとした回答に、ヒューイは肩透かしをくらって思わず聞き返してしまった。

フェリオットはつなぎのズボンに空いている両ポケットにぞんざいに手を突っ込むと、目一杯背伸びをして夕焼け空を仰ぎ見た。

「僕はね、昔から飛行機が大好きだった。好きだから、将来は飛行機に携わる仕事に就きたいって、子供の頃からずっと思ってた」

夢を語る少年のようなフェリオットの横顔を、ヒューイはただ見つめた。

「だから、軍に入った。軍の整備士だったら、仕事で好きなだけ飛行機に触っていられるし、軍にいれば、設計させてもらえるチャンスが増えるから」

「設計？」

「うん、そう。飛行機を弄るのも好きだけどね、いつかは設計も手がけたいって思ってる」

フェリオットとはヒューイが軍に入ってから、仕事外でも頻繁に言葉を交わしていた仲だが、設計に関しての事を聞かされるのは初めてだった。

だってさ、とフェリオットが思わず口元を緩める。

「僕の考えた飛行機が空を飛ぶ。それを考えただけでワクワクする」
そう言つて、フェリオットは笑う。穢れを知らない無邪気な顔で、現実を知らない子供のような顔で。そう　　見ているものまで笑顔にさせてしまいそうな、心の底から楽しみに溢れた笑顔だった。

（　　知ってる……）

そのフェリオットの笑みがどこから生まれてくるものなのか、ヒューイは知っている。知らないはずがなかった。

「お前、は……」

消え入りそうになる声を、振り絞る。

「フェリオットはそれが、手にかけるのが戦闘機だって、人を殺すための飛行機だって分かつて、それでも手がけたいって、作りたいって言うのか」

力のない、たどたどしい言葉だった。だが、それは刃だった。詰問となるには十分な力を秘めていた。

留まる事を知らない雲が、真っ赤に燃え上がる太陽を隠す。その瞬間、世界がもう一段階暗くなったような気がした。

笑みを消したフェリオットが、ゆつくりと瞼を閉じる。深く息を吸い、ヒューイの言葉一つ一つを噛み締め、向き合うかのように。

「そうだよ」

それでもやっぱり、フェリオットの口から紡がれる答えは決まっていた。

「……僕はね、戦闘機は戦うための飛行機であるとは思ってるけど、人を殺すためのものだとは思ってない。人を殺すのはそうしなければいけない時、人がトリガーを引くから」

とつとつと語るフェリオット。黙し続けるヒューイ。彼が何を言いたいのか、ヒューイはもう分かつていた。

「戦闘機の翼は必ずしも人を殺すものじゃないって事を、一番知ってるのは」

ヒューイだろ。その名を、フェリオットは言わなかった。彼の言

う事を、ヒューイは多分、誰よりも良く知っている。ヒューイは戦闘機という鉄の翼で飛びながらも、人を殺さない可能性を模索して飛んでいたのだから。

ギユツと、ヒューイは唇を真一文字に引き絞った。

そんなヒューイの様子を感じ取ってか、フェリオットが口調を和らげる。

「そうは言っても、戦闘機が人を殺すのは分かってるよ。戦うために、撃つために造られてる物だからね」

でも、とフェリオットが微笑む。

「それでも、作りたいから。触れたいから」

ザアアと、春一番のような風が吹き抜けた。

「この先、戦闘機に触れ続けることでこの身に何が起ころうとも、僕は構わない。だってそれは、僕自身が選び取ったことだから」

風が吹く。渦を巻くように、天空へと誘うように。

フェリオットは背を丸めて、手を入れたままだったポケット、その右側をこそごとと漁り始めた。そこから何か大きなものを出そうとしててこずっているのか、何度も引っぱり出そうと悪戦苦闘する。「だってそうでしょ？」

ヒューイに向き直り、フェリオットは弾んだ声で告げる。そしてそれをヒューイに向かって、中に放り投げた。

「好きだって思う気持ちは、止められないだろ？」

ゴーグル、だった。

破顔するフェリオットが見守る先で、ゴーグルは放物線を描き、咄嗟に手を出していたヒューイの手の内に綺麗に収まった。まるでそこがあるべき場所だともいうように。

見慣れたデザイン、手に馴染んだ重み、使い込んで擦れているベルト、細かい傷が幾重にも刻まれたフレーム、何度も取り替えられたレンズ。それは間違いなくヒューイが軍に入ったときに受け取ったものだった。

顔を上げると、目を細めたフェリオットが破顔してヒューイを見

ていた。夕陽に赤々と照らされたフェリオットの柔らかい眼差しが、ヒューイを見つめる。

思わず目を細めたのは、夕陽の眩しさだったのか。けれど、その眩さから目を逸らすことは、もうなかった。

* * *

丘を吹き抜ける風が、ヒューイの赤茶に染まった蔦色の髪を攫う。一緒に、そこに絡み付いていた重い思考も奪っていくかのように。

脳裏にリセリアの顔が浮かんた。

青空のように、曇り空のように、雨空のように。澄み渡る夜空のように、光をもたらす夜明けのように。時と共に移り変わる空のように、いつだって色んな表情を見せてくれた。その一つ一つが、ヒューイの記憶の中で鮮明な光を放つ。

ああ、と。ふとヒューイは、その記憶の中に唯一見当たらないものがあることに気付く。

（怒った顔だけは、まだ見たことないっけ……）

ヴェルナー平原の空のように、いつも穏やかだったリセリア。雷雨のように怒りを剥き出しにすることがあるとしたら、どんな顔をするのだろう。

空色のリセリア。

首を痛いほど真上に向け、天上を仰ぎ見る。散り散りになった暗雲が、雨を運んだ風に攫われて夕焼けに彩られた空の上を流れていた。高空を流れる風は地上よりももっと強く速く、けれど行き先を見失うことなく遙か遠くを目指し駆けていく。四方八方から吹き乱れる、地上の乱流とは裏腹のように。

瞼を閉じると、柔らかな風が頬を撫でるのが感じられた。胸いっぱいには吸い込むと、雨上がりの澄んだ空気がヒューイの身体を満たす。

行かなくてはいけない。

飛ばなくてはいけない。

（ 違う ）

飛びたいと思う衝動。けれどそれは、あの空を目指し白い雲を抜け、どこまでも高みへ行きたいあの気持ちとは違う。

黒く染められた瞼の裏に、リセリアの華奢な後ろ姿がはつきりと描かれる。触れれば手折ってしまいそうな、細い肩。夜空に流れる天の川のような金の髪。

ゆっくりと瞼を開ける。暗闇に思い浮かべたリセリアの姿が、眼前に広がる夕焼けの空に被った。

逢いたいんだ。

「リセリア ……」

確かな形を得た想いが、無意識の内にヒューイの唇を動かす。吐息に似た囁きは風に溶け、瞬きの間に空へと吸い込まれていった。

真紅に染まった、静かな世界だった。

上を見れば雲の上から見上げる空に障害物はなく、真紅の夕焼け空だけが視界を埋め尽くす。下を見れば、眼下に広がる真つ白な雲海が朱色に染め上げられていた。そして視線を水平に移せば、随分と低くなった太陽が真つ赤に燃えていた。

戦火に焼かれるのはこういう感じなのかな、と。そんなことを思ってしまうほどに、リセリアの見る天上の世界は赤々と染まっていた。

私室として宛がわれた空の城の小さな一室 リセリアを閉じ込めておくための部屋 空模様 のバルコニーへと続く大きな窓に手をついて、リセリアは自分自身を見つめていた。じっと、まるで彫像が佇んでいるかのようにずっと、もう数十分はこうしていた。いや、もしかしたらそれ以上の時間こうしているのかもしれない。

風鳴りの音すらない、静かな雲上の世界。地上で吹き荒れる風も、空の城がある高さまでは届かず、この高空では地上とは違った流れ

の中にある風が緩やかに吹いている。きっと彼が見れば、この絶景に感嘆の声を漏らすのだろう。

彼 ヒューイ・ノルグスであれば。

「どうしたらいいんだろう……」

「決まってるじゃん」

ぼつり、と桜色の唇から零れた言葉に、思いもよらぬところから軽薄そうな明るい声が返ってきた。

唐突な返事にリセリアがハッと振り向くと、そう広くない部屋の中ほど、シーツの端まで整えられたシングルベッドの端に茜色の軍服を纏ったアルクスが腰を下ろしていた。彼もまた、差し込む夕陽に赤く染まっていた。

いつからそこにいたのだろう、と驚きの色を隠せないリセリアに向けて、アルクスがニコリとわざとらしい笑顔を作ってみせる。

だが、その笑みも一瞬だけだった。アルクスは策を巡らすような不適な笑みを口元に浮かべ、鋭い眼光と共にリセリアに向けて右手の指を二本立てて見せた。

「このままオレに協力するか、それともヒューイの元に戻るか」

二つの選択肢を示し、まあ、とアルクスは微かに笑んで続ける。

「もし後者だった場合は、すんなり返してあげるはずがないけどね」
クスクスと、無邪気にリセリアに語りかけるアルクスはまるでこの状況を楽しんでいるかのようだった。否、実際アルクスは楽しんでいるのだろう。《空帝》に勝利し、求めたりセリアが自分の手元にいるこの状況において、リセリアが自分とヒューイのどちらに付くのだろうというこの駆け引きを。

「私、は……」

何か言葉を返さなくてはいけないと思い、口を開く。しかし、後に続く言葉は何もなかった。ただ掠れた吐息だけが漏れていく。

「……自分じゃ決められない？」

ややあってからあったアルクスの問い掛けに、リセリアの小さな肩が小さく跳ね上がる。アルクスはそれを見逃さなかった。彼の口

元に、深い笑みが刻まれる。喜びに満ちた、優しい笑みが。

「仕方ないよね。この空を体現するリセリア。空は空っぽだというのに、持ち合わせて生まれてくるはずだった化身としての心さえも未熟なまま誕生しちゃったんだもんね」

アルクスの向ける言葉は、間違いようのない真実だった。

空っぽの空を体現する、空っぽなりセリア。せめて化身の心がちゃんと成熟してこの身に宿っていたのなら、少なくとも今化身としてどうすべきか決められたはずだった。今のリセリアには、それを決めることすら出来ない。

リセリアはギュツと胸の前で両手を握り合わせる。その姿を、アルクスは一心に見つめ続けていた。

「でもね、オレは別に今のリセリアでもいいよ。未熟で空っぽでも、これからはオレがその空っぽを埋めてあげるから」

愛おしささえ込められた眼差しで。突き刺さるようなその視線から、リセリアは思わず目を逸らして俯いた。そんな彼に応えられる言葉すら見つからないほど、今のリセリアは空色だった。

「イスカだって、メテオール馬鹿共と違ってリセリアに対して好意的だしさ」

アルクスは懐から何気なく煙草を取り出し、続けた。一緒に取り出した携帯ライターで火を点ける。

「空の化身云々があっても、イスカだったらリセリアをちゃんと一人の女の子としての待遇でナディアにおいてあげられる」

アルクスが胸いっぱいに吸い込んだ煙を、部屋中に吐き出す。その瞬間

「っ！ けほっ、ごほっ」

リセリアを激しい咳が襲った。あまりの連続的な咳き込みに、思わずリセリアはその場に膝を着く。感情とは関係なく、目の端に水滴がじわりと浮かぶ。

「リセリア!？」

アルクスが血相を変えてリセリアに駆け寄ってくる。しかし、そ

んなアルクスをリセリアは片手で制した。来ないで、と。その手に持つものが原因なのだから。

肺が、身体が　大気に混じるその物質に拒絶を示していた。

空として大気の汚れに反応したわけではない。大気の汚れに拒絶を示す空の意志が、そのままリセリアの身体の反応となつて現れているのだ。

「あー……ごめん。空は^{リセリア}汚れを拒絶するんだよね」

大気の汚れは、リセリアにとって毒だった。

もう一度ごめん、と言い残して、アルクスは静かに部屋を去っていった。しかし、一度放出されて煙は部屋中に薄く広がって、閉め切った部屋では消えなかった。

リセリアは力なく立ち上がり、この部屋唯一の窓　バルコニーへと続く大窓に弱々しく手をかけた。ゆっくりと窓を開けると、途端清廉な空気が部屋の中へと吹き込んだ。行き場をなくした空気は渦を巻くが、その一部は再び窓から部屋の外へと出て行く。

バルコニーに足を運んだりリセリアは白い手摺りに捕まり、崩れ落ちた。

化身としても未熟で鳥籠を開放することもできず、アルクスにもヒューイにも応えることができず。

私は、どうしたらいいのだろう。

自身に問いかけても応えることすらできない。それなのに、その瞬間、

『リセリア』

と、名を呼ぶ彼の声。こんなところで聞こえるはずもない彼方にいる彼の声が聞こえたような気がして、リセリアはハッと顔を上げた。しかし、目の前に広がるのは赤い空だけ。

幻聴にも似た声。耳に直接声が届いたわけではない。

呼んでいる、のだ。

瞼を閉じて、意識を澄ませて行く。どこまでも広がる大空　その一角にある小さな鳥籠。己の抱いた腕の中に、彼がいた。空を見

つめて、リセリアを呼んでいる。その様子が見えるのではない。
分かるのだ。

呼んでいると。リセリアが眠り籠から目覚める前、アルクスがリセリアのいる空の城の場所が分かったように。嵐の中、助けを求めたりセリアを彼が見つけてくれたように。

アルクスと同じ、空を愛して^{リセリア}くれる者。
目の端から、透明な雫が一筋流れた。

「ヒューイ……」

吐息は風となつて、空を翔ける。

リセリア、と彼女の名を呼んだ瞬間、

「　　っ!？」

一陣の風が、吹き抜けた。

それまで吹いていた風とは違う、力強い風。草を揺らし、木の葉を揺らし、他の音をすべて包み込むような大きな葉擦れの音を立てて。平原を駆け抜け、瞬きの後には海の向こうへ。

身体を攫っていきそうなほどの突風に、ヒューイは反射的に息を止め、足に力を込めて踏ん張る。

それは本当に数秒にも満たない間のことだった。

目を開いたヒューイの前には、何事もなかったような平原の光景があった。

雲が、流れる。風に乗って、ゆっくりと。

ああ、と。ヒューイの中に、何かがストン、と落ちていった。

「空を愛し、空に愛されし者よ　　」

いつの頃からか。空を翔ける者たちの間で語り継がれてきたその言葉が　リセリアが降り注ぐ雨と共に送ってくれた言の葉が、スルリと口の端から零れ落ちる。

空色の呼び声に応えし時　　音も無き空色の呼び声を聞き応えし時

蒼穹の頂きにて相見え　　空の城にて空の化身と人は出会う

(そうだ……)

翼を失ったヒューイに、リセリアはその言葉をくれた。

「リセリアは、俺にその意味を教えてくれたじゃないか」

説明してくれたわけではない。けれどその意味を、音無き言葉で伝えてくれた。鳥籠を開く鍵、それを正しく鍵穴にはめる術を忘れてしまった人に、彼女は道標をくれたのだ。

目の端から、透明な雫が一筋流れ落ちる。

リセリアが呼んでる。

彼女が　リセリア自身が、ヒューイとアルクスどちらを選んだのかは分らない。

けれど今、少なくともヒューイはリセリアを呼び、リセリアはヒューイを呼んだ。声が聞こえたわけではない。それでも、分かる。呼んでいるのだと。あの時、嵐の中でリセリアを見つけたときヒューイが音もない呼び声を感じ取ったように。

その呼び声は、二人が地上と遥か雲の上にしようとも、どれだけ遠く離れていようと、届いた。

翼になりたいと思った。

何のために飛ぶのか。理由なんか要らない。ただ飛びたいと思った。だから軍学校で勉強を続け、軍に入った。ただがむしやらに空を目指したあの頃と同じだった。

彼女に会いにいけるのなら、彼女の翼になれるのなら

フェリオットから受け取ったゴーグルを握る右手を胸の前に上げ、力を込める。空を見上げ、風の動きを感じる。

（まだ　　）

まだ、ヒューイとリセリアは繋がっている。リセリアの空色の呼び声は、確かにヒューイの元へ届いた。ならば、

「追風に舞う強き翼を以て、鳥籠は開かれん……」

まだ、終わっていない。

「道は途切れていない」

たった一つだけ、残された道がある。

「カルダ！」

壊れそうなほどに豪快な音を立てて、ヒューイはその部屋の扉を開け放った。ドアノブが回った瞬間あらん限りの力で押し出されたドアは、勢い余って百八十度回転。壁にぶつかって跳ね返る。

部屋の中には、簡素な装飾が少し施された机が入って左手に一つ、その正面に客人を出迎えるためのテーブルセットが置いてある。窓は清楚なカーテンがつけられた小窓が一つ。そこから、真っ赤な光が差し込んでいた。

ヘイズ基地に臨時配属された、カルダ・ダグラス少佐の臨時の執務室。ヴェルナー西基地での執務室に比べたらかなり手狭だが、ヘイズ基地に正式配属されていないヒューイたちの中では相当いい待遇だった。

その執務室の主　デスクで書類と睨めっこしていたカルダは、ヒューイのあまりにも乱暴な登場の仕方に一瞬目を見開く。だが、カルダは直ぐに視線を逸らして手元の書類と向き直ってしまった。元前線基地の少佐として、今後の隊の編成やなにやらに追われているのだらう。しかし、カルダの都合なんて知ったことじゃなかった。

開けた時と同様力任せに、扉を後ろ手に閉める。数歩しかないカルダとの距離を、ヒューイは大胆で詰める。

迷いのないしっかとした足取りで、真っ直ぐカルダの元へ。

「……どうかしたのか」

分かっているはずなのに。顔を見れば、ヒューイが何を言いたいのかなんて彼は分かっているはずなのに。カルダは平時と変わらぬ《少佐》として問うてくる。

バンツと机に手を突いて、ヒューイは上からカルダの目を見据える。衝撃に、机の上に散らばっていた書類が浮き上がった。

「俺をナディアとの大規模戦闘に参加させる」

「却下」

返答は光の速度だった。

実際はただの音速であるが。

ヒューイと目を合わせようとせず、カルダは黙々と手元の書類を眺め続けた。視線が書面上を右へ左へと滑る。時に止まっては、また思い出したかのようにぎこちなく彷徨いだす。

（ 内容、頭になんか入って来てないくせに…… ）

変なところで意地っ張りな旧友の態度に、ヒューイは思わず苦笑しそうになった。それすらも、カルダは淡々と無視する。

「降格されたことを忘れたのか」

「もちろん覚えてる」

「……撃てない操縦士など」

「撃つてやるよ」

冷徹なカルダの言葉を遮って放たれたヒューイのその意志に、カルダが反射的にヒューイの方を向いた。剣呑さが消えた瞳と、返す台詞を見失って薄く開いたままの唇。少佐と呼ぶには幼く感じるその顔を表すには、ぽかんとという擬音が一番当てはまるだろう。

（ ようやく顔を上げたな ）

久しぶりに見る親友の心から驚く顔に、ニツとヒューイの口元に思わず笑みが浮かんだ。

デスクから身を離し、静かに拳を握り、呆然とするカルダに向かって告げる。

「俺は、リセリアに会いに行く」

そのためなら、そのために必要だというのなら 撃とう。そうすることでもしかリセリアの元へいけないというのなら、構わない。既に血にまみれたこの手が、これ以上紅く染まるうとも。

諦めではない。

それが後にどんな報いとなってヒューイに襲い掛かるうとも、それが自分の選んだ道であるから 向き合ってやろうと決めた。

ヒューイの視線を真っ向から受け止めるカルダはまるで百面相をしているようだった。何度も言葉を探して口を小さく開閉させ、それからようやく声を絞り出した。

「会ってどうする」

「会って聞きたいことがある」

どうしても一言、会って伝えたい言葉があった。他の誰でもない、リセリアに。ヒューイ自身の声で、言葉で。

揺るぎないヒューイの眼差しに折れたように、カルダは視線を逸らして大仰に嘆息して見せた。

「いいんだな」

何を訊ねるでもない短い問い。それが無意味だと知っていても、カルダは聞く。撃つでもいいんだな、と。

どこまで行っても、カルダはカルダだった。ヒューイと違う生まれで、軍学校でも一段違う教育を受け、エリートとして若くして少佐の座についても、カルダはどこまでも、いつでも最もヒューイの近くにいたカルダだった。

ありがとう、と心中で小さく呟き、口角を吊り上げる。

「上等 《空帝》を嘗めるな」

そう告げたヒューイの瞳は、『守りたいものがある』と。そう言い放ったカルダのそれによく似ていた。

* * *

かれこれ一時間はこうしているだろうか。冷たい廊下に座り込んで煙を吹かし続けるアルクスの足元には、数本の吸殻が溜まっていた。

無造作に啜えた煙草の煙を吸い込んで、覇気もなく吐き出す。

廊下の先、開け放たれたテラスから吹き込んでくる夜風が白煙と散る灰を攫っていく。宙を舞う灰は時折、ナディアのフリーエレン山岳地帯に降る雪を思い出させた。

廊下の壁に一層体重を預け、テラスを見る。テラスへと続くガラス製の戸の両端には、長いカーテンが掛けられていた。その向こうには、今にも零れ落ちそうなほどの星屑が散らばる夜の天蓋が見えた。

中々いい場所だな、と柄にもなくそんな事を思いながら短くなつた煙草の火を床で揉み消し、新しいものを取り出す。

そろそろ止めておいた方がいいかもしれないと自分の中の一部が忠告するが、その考えに反して手は煙草の先端に熱を灯す。イスカに見つかったらまた散々な小言を聞かされそうだった。

いつだったか。まだアルクスが特務大尉の地位に昇格して最前線へ出る資格を得るよりも少し前。空帝と戦つてみたいのに中々それが叶わず、苛立ちに任せて連日のように吹かし込んでいた頃だった。『そんなものばかりに浸っていると、いつか飛べなくなるぞ』

今よりもまだ少女らしさが抜けきらない女王イスカにそんな事を言われた事があつた。

イスカの言つたことは正しい。時には低酸素下での飛行を求められる操縦士にとって、呼吸器の働きを低下させる喫煙がよろしくないことは、公然の事実だった。

いつか飛べなくなるかもしれないなんて、分かつてる。先のことなんて分からない。だから今、飛べればいい。地に束縛されず生きていければ、それでよかった。

解き放たれた空を飛べるなら。

脳内に浮かんだりセリアの姿にわけも分からない苛立ちを覚え、アルクスは啞えた煙草を思わず噛み潰した。その時。

「随分といいご身分だな」

ゆつくりと、アルクスは一人の時間に割り込んできた無粋な声の方を振り向く。そこに、差し込む月明かりに照らされて、精悍な男が佇んでいた。

誰だったか。見たことのある顔なのは確かなのだが、どうにも名前が思い出せなかった。そもそもオレはこいつの名前を知っていたつけ　と脳内を探り、ようやく記憶の片隅からこの男に関する情報を持ち上げる。

「ああ、イスカの取り巻きか」

あからさまに嫌味を込めた一言に、《取り巻き》の片眉が跳ね上

がる。しかし、そこはさすがイス力を支える重鎮の一人。声を荒げるような無様な真似はしなかった。

「私は」

「別にわざわざ名乗んなくていいよ。オレ、覚える気ないから」

こいつがどこの誰でなんという名前だろうと、アルクスには関係のないことだった。

無関係を決め込むアルクスの態度に募った苛立ちが限界値を超えそうなのか、発する《取り巻き》の声は小刻みに震えていた。

「いつまでそうしてふて腐れているつもりだ」

「ふて……腐れてるだって？」

思わず目を細め、やや俯いた状態で《取り巻き》を見据えた。さりと流れる黒髪の隙間から剣呑な光が覗いた。

見る者によつては殺意すら感じるその視線に、《取り巻き》が一瞬たじろぐ。だが、果敢にも黙りはしなかった。

「そうだろう。ようやく手に入れた空の化身が、意のままに動かないからと腹を立てているだけではないのか」

違うのか、と無言で問う《取り巻き》にアルクスは答えなかった。夜になって強くなってきた風の通り抜ける音を聞きながら、静かに煙を吐く。

「よいか。お前は特務大尉である前に、ナディア軍の操縦士なのだ。特例的に大尉になったとしても、果たすべき職務はいくらでもあるだろう。姫様だってお前に期待してその階級を与えたくださったのだ」

そんな《取り巻き》に対してアルクスは思わず、ハッと嘲笑を浮かべていた。

つまるところ、こいつはこんなところで油を売ってないでせつせと、こいつが『姫様』と慕う女王様のために働けといたいのだ。

確かにやるべきことは山ほどあるだろう。近々起こるであろうメテオールとの大規模戦闘において、アルクスが最前線に出ることは既に決定済み。更に、おそらく二、三日としない内にアルクスがそ

の最前線の部隊を率いることになるのはほぼ確実だった。

だが、そんなことは二の次、三の次だ。

「果たすべき職務についてうけとさあ……」

口に煙草を咥えたまま、器用にアルクスは言い返した。

「オレにとって果たすべき職務は、リセリアをオレのものにするのとだけだよ。そのための『特務大尉』だろ？」

リセリアの『空色の呼び声』を聞いたアルクス。だからこそ空の化身を手に入れるため、化身の搜索をある程度自由に行うことができる特務大尉という特例階級が与えられた。

「オレ達はメテオールを滅ぼす事が第一目標なんじゃない。《鳥籠の地》を開放するために、リセリアを見つけ出したんだ」

『空色の呼び声』を聞いたものが、空の化身を手に入れ、鳥籠を開放することが出来る。それが出来るのは、アルクスだけ。もう一人、たった一人、アルクスと同じく『空色の呼び声』を聞いたヒューイ・ノルグスを除いては。

軍事主義的面の強いメテオール帝国で、リセリアがナディア側にいるのと同じ待遇を受けるのは難しいだろう。

なのに、リセリアはまだ迷っている。アルクスと、あの弱い《空帝》とどちらを選んでよいのか。

だから、リセリアはアルクスの元にいなければいけない。空^{セリア}の化身にとってアルクスだけが唯一であり、アルクスにとって空の化身だけが唯一にならなければいけない。

「安心しなよ。リセリアは誰にも渡さない。渡してなんかやらない」
特に、リセリアが思い浮かべるあの男にだけには。

傲岸不遜なアルクスの態度に、今度こそ《取り巻き》は明らかに不快の意を示して背を向けた。苦虫を噛み潰したような顔をして、足早にその場を後にする。去り際、

「どこの生まれとも分からないガキが、よくも姫様に取り入ったものだ」

はつきりとは聞こえない、しかし確実にアルクスの耳に届く大き

さでそんな事を言い放って。

それが本音か。

硬質な足音が遠ざかっていく。そうしてやがて回廊に響く音も聞こえなくなり　ヒユと、冷たい夜風がアルクスを包んだ。

じじつと指に挟んでいた煙草の先端が、徐々に灰になって吸殻の山の上に降り積もる。くしゃくしゃになった山の上に、無感動に灰色の粉が降り注ぐその様子を見つめて

何故だろう。

どうしてだか、誰もいないはずのその場にいられなくなって、アルクスは無意識のうちに立ち上がっていた。どこに向かいたいのかすら、分からない。けれど、足は動く。行き先はそこしかない、初めから知っていたかのように。

ギツ、と。横たわっていた上質なベッドが軋む音に気付いて、リセリアはうつすらと瞼を開けた。軽く身動きして、部屋の様子を見るが、寝起きのぼやけた目では視界がはつきりとしなかった。

「……アルクス？」

いつの間に眠っちゃったのだろう、と目をこすりながら、リセリアは唯一この部屋を訪れてくれる彼の名を呼ぶ。

「……ごめん。起こすつもりはなかったんだけど」

「うつん、いいの」

思ったとおり、アルクスがそこにいた。少し俯いているために、顔はよく見えない。けれど、ゆっくりと上半身を起こしたりセリアの金系の髪を撫でるアルクスの手は、優しくかった。　優しすぎた。腫れ物か罫の入ったガラスに恐る恐る触るような。

なんだか様子がおかしい。それは、空っぽのリセリアでも分かった。

空の城に来てからアルクスは、リセリアがいれば彼女の中の何かを埋めるように、常に何か話してくれた。それは軍で起こった他愛のない日常の話であれば、言葉の裏でリセリアを叱責するようなも

のでもあつたけれど。

彼は、リセリアに常に何かを与えようとしてくれていた。

「アルクス　？」

そう名を呼んで、顔を覗きこむ。瞬間、リセリアの瞳が大きく見開かれ

気が付いたときには、リセリアの細身はアルクスに勢いよく抱き締められていた。軍服に染み付いた煙草の臭いが、鼻腔を刺激する。触れて知る、思ったよりも鍛えられていた腕に力強く抱き締められ、思わずリセリアの喉から細かい声が漏れる。

抱きすくめた勢いそのままに、アルクスはリセリアごと、崩れるようにベッドに倒れこんだ。柔らかな布団が沈み込み、二人を包む。沁み一つない清潔なシーツの上に、リセリアの髪が広がった。

「アル、クス……？」

アルクスの腕の中でじつと身を縮めるリセリアの声は、知らず知らずのうちに先ほどよりも強張っていた。けれど、不思議なことに彼の腕を解こうとする気は起きなかった。

どうしたのだろう、と恐る恐る顔を上げようとする。しかし、アルクスがりセリアの首元に顔を埋めてきて、その表情を見ることは出来なかった。つんつんと癖の付いたアルクスの髪がりセリアの首周りをくすぐる。

「……オレにはリセリアだけなんだ」

ポツリ、と零された声は、弱々しかった。常に堂々とした態度をとっていた彼からは全く想像も出来ないような、今にも泣き出しそうな声だった。

何か声をかけようとして、オレは、と消えそうなほどか細いアルクスの呟きに口を噤む。

「小さい時からずっとずっと、空を見ていた。ボロボロに廃れた町の、今にも崩れそうなビルの隙間から」

裸足で、来てる服もボロボロで、腹だつて空いてて。

でもそれは町の大半の大人も子供もそうで。

その日生きるので、精一杯だった。

ぽつぽつと、降り始めの雨粒のようにアルクスは一つずつ言葉を紡いでいった。それを、リセリアは雨受け皿のようにただ受け止めていた。

「でもオレは、リセリアを見ていた」

ギョツと、腰と背中に戻された手に一層の力が込められる。

「空を飛ぶ鉄の翼があれば、そんな大地から離れられる。オレは、ずっと、リセリアに会いたかった」

「アルク」

「何も言わないで」

かけようとした言葉を、アルクスが震える声で遮る。

「何もしないから　お願いだ」

腕の中で小さくなるリセリアに、懇願する。何も言わなくていい、何もなくていい。だから

「今夜一晩だけ、このままでいさせて」

差し込む月明かりが二人を闇夜に照らし出す。

リセリアはしばらくじっとアルクスを見つめ　やがてそっと瞼を閉じた。冷たい夜風が囲む空の城で、ただ彼のぬくもりだけを感じて。

寄り添う二人を見守る月を切り裂くように、雲の切れ間から一筋の星が流れた。

第六章 天空へ続く道

明け方の、澄み渡った青空が広がっていた。

南東から吹く風はやや強いが、空は穏やかで、見渡す視界に降雨をもたらず類の雲はない。真つ青な絵の具を垂らしたような空には、翔ける鳥のような翼雲、そこから抜け落ちた羽根雲、それらとともにふわふわと宙を漂う蝶々雲が浮かんでいる。

まるで生き物たちが駆け回るような、いい空だった。

ただ、油断は出来ない。どこからともなく吹く風に、時折冷たい湿気が混じっているから。一度その風が強くなれば、瞬く間にこの青天は崩れてしまうだろう。

リセリアがアルクスに連れ去られてから、二週間。《鳥籠の地》は、とうとうその日を迎えようとしていた。

行く当てもなく、どこまでも飛んで行きたくなる衝動を押さえ、ヒューイは操縦席内の各計器類を手際よくチェックし、離陸準備を整えていく。それから無線の確認。部隊や軍司令部との連絡に支障がない事を確認し、機体に内蔵されている優先通信を、やや放れた後部座席に座る操縦士と確認する。

ヒューイが乗っているのは、軍用機。特に空中戦闘能力を持った機体の中でも珍しい、二人乗りの戦闘機だった。それも後方の操縦席にも、前方とほぼ同様の操縦機能を備えた機体だった。通常このような機体が最前線に配備されることは少ない。だが、今回ばかりは特例だ。愛機と呼ばたあの機体のような戦闘力を持たない機体だが、仕方がない。

全ての異常がない事を確認し、エンジンを入れる。低い音を立てて動き出すエンジン。それにあわせて低速でプロペラが回り始め、ヒューイはブレーキを外して滑走位置まで機体をタキシングさせていった。

離陸ポジションに着き、機体の動きを止める。広い滑走路に、ヒ

ユーイ機に並ぶようにして最新鋭の数機が配置に着く。

この日のためにメテオール中から集められた精鋭たちの中に、見知った顔をちらほらと見つける。ヴェルナー西基地から無事逃げ延びた同僚達だった。

先陣を切る第一陣の後ろには、控えるように更に何列もの機体が配備されていた。今この基地に集まった勢力は、メテオールの最大戦力だということが如実に分かる数だった。

その中でも先頭機の操縦席に全体重を預け、ヒューイは空を仰ぎ見る。綺麗な青空。けれど、穏やかで静かで、けれどふとしたときに崩れてしまいそうな、彼女の空だった。

『全機、準備完了。作戦開始時刻まで、残り〇三二〇』

無線から聞こえるその聞き馴染んだ声に、ヒューイは一瞬驚く。それは間違いようもなく、ルベリエ・クリソベルの声だった。さすがルベリエ、というべきか。今回のナディアとの前面戦争でも、作戦本部で通信官を取り纏めているようだ。

馴染みの声に後押しされて、ヒューイの口からそれがスルリと出て行く。

「後続の奴ら、聞いているか？」

無線を通して全操縦士にヒューイの呼びかけが伝わる。無線越しにイエスサーと返ってくる声もあれば、無言の返事を返す者も。《空帝》と呼ばれたヒューイに返す反応は様々だった。

彼らの様子に思わず口元に苦笑を浮かべ、

「あーそんなに堅苦しくならなくていい」

と、ヒューイはよく聞こえるようにインカムを押さえた。

「《空帝》として、後へ続く者達へ告げる」

その瞬間、ざわり、と無線の向こうから微かな動揺が伝わった。今まで頑なに《空帝》であることを否定し続けたヒューイ自身の口がそう名乗れば、彼らが動揺するのも当たり前と言えた。作戦前に動揺を与えるのはご法度。だが、そうなることが分かっているにもかかわらず言っておかなければ鳴らなかった。

ヒューイ・ノルグスが《空帝》として。これは他の誰でもない、ヒューイが始めて空の帝王として翼を並べる者達に送る言葉。

それを止めようとする声は、不思議なことに上がらなかった。

「俺達はこれから、『最後の手』を使って空へ上がる。先陣は俺が切る。皆は俺を見て、飛び方を見て、俺に続け。空に上がれ」

既になんども事前のブリーフィングで打ち合わせたことに、無線からは無言だけが返ってくる。《空帝》への不満は余るほどあれど、その腕を知らないものは空を翔ける者にはいない。だから皆ヒューイを信じ、その作戦には同意しているのだ。だが、

「俺を信用するな」

ヒューイはその信頼をへし折った。けれど、無線越しにはもちろん耳にざわめきの一つも届かない。

スウツと、《鳥籠の地》翔ける風を胸いっぱい吸い込み、ヒューイは声を弾ませた。

「風を感じる」

背後から駆け抜ける風が、声を攫う。

「空を信じる」

見上げた先。一羽の鳥が、風に乗って空に舞う。

「空は、空を信じてくれたやつを見捨てたりはしない」

それは誰に向けての言葉だったか。

それが、ヒューイの出した答えだった。

（そうだろ、リセリア）

だってあの瞬間、リセリアはヒューイに応えてくれたのだから。

『作戦開始まで、残り〇〇ー〇〇』

残り十秒前。ルベリエがカウントを開始する。

ヒューイは額の上にあったゴーグル　フェリオットが直してくれたそれを、目に装着し、彼を呼んだ。

「カルダ」

誰よりも信じ、頼れることの出来る友の名を。公然の場で、上司を呼び捨てにするその行為を、今この場で咎める者はいない。

『三、二……』

一秒ずつ、その時が近づく。

「頼んだ」

『頼まれた』

『ゼロ』

ルベリエのカウン트가ゼロを告げた瞬間。確かに応えた親友の声を耳に受け　ヒューイはエンジンスロットルを叩き込んだ。

海と空に閉鎖されたレーレヘイト大陸史において、メテオールとナディアの間で戦争が勃発してから、十八年と百三十六日が経過したその日、朝方。

《鳥籠の地》最後となる戦いが幕を開けた。

* * *

彼の息吹が、強さを増した。

「ヒューイ……」

自分の中での彼の存在の強さ、リセリアを呼ぶ心の声の強さが、意識を傾けなくとも手に取るように感じる事が出来た。

ポツリとこぼしたりセリアの言葉をアルクスは聞き漏らさなかった。バルコニーで風を受け、金色の髪を惜し気もなく靡かせるリセリアの元に、アルクスが不機嫌を隠さない足取りで近づく。

「何？　まだ迷って……」

アルクスとヒューイどちらを選ぶか、まだ迷っているのか。そう聞きかけたアルクスの口が、止まった。

じっと中空を見つめるリセリア。だが、その目は空を見ているわけではない。焦点の定まらない瞳、いとおしさを込めたそれで見つめる空のスクリーンに、誰の姿を重ねていたのか分かってしまったから。

「来るのか」

「え……？」

あまりにも唐突なアルクスの言葉を咄嗟に理解できずリセリアはきょとんとし、しかし誰が来るのか。アルクスの一言が指すところに気付いて、はっとする。だが、もう遅い。

「総員、戦闘配置。あいつを　メテオールの奴らを撃ち落とせ」

ヘイズ基地から真つ直ぐ北におよそ二〇〇キロ。ヘイズ基地を飛び立ったヒューイを先頭とした一団は、ひたすらにその場所を目指して飛び続けた。かれこれ一時間。最大速度ならば半刻と少いで越えられるが、今後の戦闘に備えて出力をセーブしているために既にそれだけの時間が過ぎ去っていた。

その間も、無線からはヴェルナー中央基地　東西に広がるヴェルナー平原のほぼ中央に位置する　から出動した部隊の状況報告が断続的に流れてくる。空の城より迎え撃たれたナディア軍に、苦戦を強いられている報告が。

空の城という高度の利を持つナディア軍に対して、ヴェルナー中央の奴らの勝ち目はほぼない。だが、それでも出撃せざるを得なかった。ヘイズからの部隊に、ナディアの戦力を集中させないためにいわばヴェルナー中央の部隊は、囷だった。

ギリツと、ヒューイは無線に音が拾われぬように奥歯を噛み締めた。今この瞬間も、ヒューイたちを空に上げるために操縦士の命が空に散っているのだと思うと、やりきれないものがあつた。

だが、幸いにして五時方向から吹く南東の風は機体を後押しする追い風になっている。ヘイズの部隊の進行は予定よりも大分早かつた。

高度計を確認するとまだ一万フィートにも至っていないが、これでいい。現在のメテオールの機体では、技術の粋を詰め込んだ最新鋭でも空の城がある二万フィートに到達することは容易ではない。よしんばそこまで上がったとしても、待ち伏せたナディア軍に迎撃されるのが落ちだった。

だから、ヒューイはこの道を選ぶ。

眼前を覆うほどに迫った目的地　　ツスタンド山脈を目の前に、
淡々と無線に告げる。

「こちら先行隊ヒューイ・ノルグス。　　見えてきた。第二シーク
エンジンに移行する」

『……了解』

待つこと、約一秒。ザ、ザッと、ノイズを混じらせて、はるか遠
くの作戦本部からルベリエの声が返る。

まだ背の低い山脈の合間に、ヒューイは迷うことなく機体に向け
た。

あの時　　俺を出撃させるとカルダに直訴した時、
「で、リセリアに会いに行くって言って、どうするんだ？」

そう挑発気味に言い放ったカルダに、ヒューイは一言で応えた。
その『単語』を聞いた彼がこれまた度肝を抜かされて口をパクパク
させて、それから呆れかえっていたのを、よく覚えている。

「確かにその手はあるが、危険すぎる。あの気流に乗れるのはお前
か俺を含めたヴェルナー西の連中か　　あとはナディアのアルクス
ぐらいだ。しかも初見で風を掴むなんて真似、そうそうできるか。
お前と違って、俺らみたいな一般人には無謀だ」

「初見、ならな」

うんざりした顔で却下の意を示すカルダに、ヒューイはにやりと
口の端を吊り上げた。目を細め、好奇心に満ちた悪戯な顔をするヒ
ューイが何を言おうとしているのか察したらしいカルダが、頭を抱
える。追い討ちをかけるように、ビシッと人差し指を突きつけて言
ってやる。

「俺が先頭を飛ぶ。一度俺が飛ぶのを見れば、隊の連中だって飛べ
る」

たった一度の飛行を真似る。それも、過去数えるほどしか成功例
のない飛行を。それがどれだけ操縦技術を問われるか、ヒューイ

はよく分かっている。

けれど、それでもその案を口にした。共に翼を並べ続けた仲間が、そしてそれと同じだけの實力を持つメテオール各地のエースパイロットたちが出来ないわけがないから。

カルダは髪をぐしゃぐしゃにかき、考えること数秒。苦笑して、ヒューイの瞳を見た。困惑も迷いも、怒りもない。空を目指す飛行機乗りの光が奥深くで光っていた。

「馬鹿が。お前が失敗したら終わりだろうが」

「……ばーか。俺が風を読めなかったことがあるかつての！」
軍学校時代と同じように笑いあつて、拳を軽くぶつけ合い

その作戦は、今まさに実行されようとしていた。

山間に入った瞬間、背を押していた風がそれまでとは比較にならないほどに強さを増した。メテオール側から吹き込んだ風が、山肌に沿つてこの谷間に収束されていた。

ヒューイは操縦桿をしっかりと握り、谷間を進んでいく。数機並んで飛べるほどの余裕はあつたが、少しの油断も許されなかつた。ここは既に、ルベリエを落とした空域なのだから。少しでも操縦を誤れば茶褐色の山肌にあつという間に激突する可能性が高い。

距離を置いて飛ぶ後続の各機からは、まだ一台も落ちたという報告はない。さすがはメテオールの精鋭というべきか。全機この気流に付いて行けているようだった。

だが、乗るべき気流はこの先。

「これより作戦行動に入る」

『了解した。検討を祈る』

応えたのは、ルベリエだった。この先、一度ナディア軍との戦闘に入ってしまうば、悠長に本部とやりとりしてる間すらなくなるだろう。それを見越して、ルベリエがヒューイ、と呼んだ。

『……落ちるんじゃないわよ』

「縁起でもない事いうんじゃないよー!」

己の体験を思い出してか沈んだ声で、しかし彼女らしい声援を送るルベリエに思わずヒューイは声を荒げた。カルダといいルベリエといい、こいつらは一体人を何だと思ってるのか、と思わず苦笑しそうになる。もっと違った言い回しって言うものがあるだろうに。

「行くぞ」

同乗する後部座席の操縦士に告げて、ヒューイはエンジンスロットルの出力を上げた。

茶褐色の山の景色が、速度を増して後ろに流れていく。代わりに眼前には一段と高い、聳え立つような山が急速に迫ってきた。

ツスタン山脈の中において、最標高三千メートル以上の標高を誇る山が、目の前にあった。反り立つ山の斜面、ほぼ垂直とも差し支えないほど急勾配の山肌に向けて、風が収束する。機体の受ける風が、近づくにつれて角度を変える。追い風から、翼を上へと持ち上げる上昇急流へ転じようとしていた。

このまま直進し続ければ、残り十数秒と立たずに機体は山肌と激突し木っ端微塵になるだろう。しかし、迫る無骨な山肌を前にしてもヒューイは操縦桿を引く事すらおろか、速度を緩めることさえしなかった。それどころか、機体の速度は増す一方だ。追い風の力を得て、速度は既に機体性能を超えた域に達している。

『少尉！ もう 』

「まだだ。黙っておけ」

激突を目前にした後部座席からの焦りの声を切り捨て、ヒューイは感覚を研ぎ澄ました。ゴウツと唸る風の音を聞き、翔ける風。刻一刻と変動する、機体を押す力、持ち上げるその力を肌で感じる。まるで、機体が身体の延長にあるような感覚だった。否、今ヒューイはこの機体であり、この機体はヒューイそのものだ。鉄の翼が風に攫われぬように、腕に力を込める。神経を研ぎ澄ます。

そして、一点。風が束になって上へ流れるその一点を前方に感じ、ヒューイは操縦桿を力の限り引いた。機首がグンツと斜め上を向く。一歩間違えば急激に揚力を失ってしまう体勢だった。

機体を取り巻く対流の向きの急激な変化に、空気が翼から剥離しそうになり　吹き上げる風が、機首を一気に上に向けた。

機体がほぼ垂直状態になるその瞬間。ヒューイは上げたときと同じ一気に操縦桿を戻した。間髪おかず、右にロール。不安定な上昇気流に合わせて、エルロンロールしていく。

機体が垂直に近い状態では、発生する揚力は水平飛行の時よりも圧倒的に少ない。けれど、機体が地に向かって落ちていくことはなかった。

メテオールから集められた風、それが束になった上昇気流が追い風となって機体を上空へと押していた。

天空へ続く道。

ツスタン山脈の山肌に沿って吹き上げる風の中に、時折、そう呼ばれるものが生まれることがあった。乱立する山や谷のために、山脈周辺の風向きは変化しやすく、その中を飛ぶことは難しい。だがその風がある一箇所に集中したとき、通常では発生するはずもない強烈な上昇気流が発生するのだ。

山肌に沿うように天へ吹き上がり、山を越えてなお力強さを失わない風。雲を貫き真っ直ぐに天空へと誘うその風を、いつの頃からか大陸の飛行機乗り達は畏怖と好奇を込めて天空へ続く道と呼んでいた。

「全員、俺の後に続け。　空に、上がって来い！」

天空へ続く道を駆け抜けながらヒューイは叫んだ。

『調子に乗るな！　各員、トライ4に続け！』

山脈の入口よりも前で待機しているのであるうカルダから罵声が飛ぶ。時々ヒューイは思うが、カルダのこの怒りっぱさは上官に向いてない気がする。

頭の片隅でそんな事を考えながらも、ヒューイの乗った機体は上昇を続ける。既に、上昇気流を生み出していた反り立つ山脈はない。しかし、天空へ続く道は途切れることなく天へ伸びていた。この先に、空の城がある。

勢いが一向に衰えない上昇気流と共に、機体は高層雲の中へと突入する。一瞬にして視界が深い霧に飲まれたかのように真っ白に染まる。

数えること、約六秒。

突然霧が晴れたその先にある、天上の世界。

ヒューイの目の前には、沁み一つ無い青空が現れた。

「つたく、あの空馬鹿は……」

雲の中へ突入していくヒューイ機を目に収め、カルダは小さくぼやいた。

どうやったらあんなギリギリで操縦桿を引けるのか不思議で仕方なかった。読み間違えれば、今頃死んでいる。同乗していた操縦士は自分で操縦しているわけではない分余計に、それこそ生きている心地がしなかっただろう。

ヒューイに付き合わされることになった不運な操縦士に哀れみの念を送り、カルダは山脈の手前で旋回行動を取り続ける。と、

「……本当にやるの？」

耳につけたヘッドセットから、いつのもルベリエらしくもないしおれた声が聞こえた。心配してくれているのだ、とこんな状況下でありながらも、カルダは嬉しさに思わず微笑を浮かべてしまった。本作戦の重要任務役として与えられた秘匿回線を介して、「大丈夫だよ」と柔らかな声を返す。ただ待つしかない彼女の心が、この言葉一つで少しでも穏やかになればいいと願って。

「あいつの無茶に付き合ってやれるのは、俺ぐらいだろ？」

命の無い青い鳥を後ろに引き連れて、カルダは空へ上がっていく鋼鉄の鳥達を見守り続けた。

* * *

雲を抜けた瞬間、ヒューイの眼前は一面の深い深い青色が広がっ

ていた。

高度二万フィート。ヒューイでさえも滅多に到達することの出来ない高さ。この高さで見る空はこんなにも綺麗な色をしているのか、と思わず見惚れそうになるが、残念ながらそんな暇はどこになかった。

視界の右端を血に似た赤色が掠める。

（ナディア空軍機……！）

それを認識した瞬間、ヒューイは機体を大きく左に滑らせていた。その後を、ナディア軍機が追隨する。

二機の高度は、天空へ続く道で上空へ抜けたヒューイがやや上、それより少し低いところにナディア軍機を飛んでいる。しかし、現在の高度でヒューイが勝つていようと、この利はあつという間に消えうせるだろう。地上よりも酸素濃度が低いこの高さでは、エアコンプレッサーの性能が高いナディア機の方が優位に立つ。現在の高度差など、あつという間にうめられてしまう。

（その前に……！）

四方に霧散していく天空へ続く道の残り香を翼に纏い、ヒューイは速度を上げる。瞬く間に二機、三機と数を増やしていくナディア軍機が定める照準の嵐をかくぐり、ヒューイは徐々に鮮明さを増すそこへ近づいていった。この空へ上がった瞬間から目に映っていた、その場所　リセリアがいる空の城へ。

（あれが、空の城）

天空へ続く道から、ほんの少し飛んだところ。まるで地上で作られた城が地面ごと抉り取られ、巨大な一つの塊として空に浮上したような　初めて目にするそれはまさしく空に浮かぶ城だった。

切り取った半球状の地面を土台に、その半分に石造りの荘厳な城が聳え立っていた。規模はメテオール帝都ハイメスにある帝城に比べれば随分小さいが、見るものに積み重ねた歴史を感じさせる黒味を帯びた古い概観、天に向かってそびえるいくつもの尖塔。それらは、空の化身を守るに相応しいといえる城だった。

城の佇んでいる浮かぶ地面。その半分、城の反対側はこれまた城の庭園と思われる広大な庭が広がっていた。ここに四季折々の草木が芽を出したら美しく城を飾るのだろう、とそう思うような。しかし、そこは今やナディア軍の戦闘機で埋め尽くされていた。

一機、また一機と空の城から飛び立つ赤い機体がヒューイを撃ち落とそうとする。だが、ヒューイには当たらない。

肉薄するナディア機を後ろに、宙返り。ナディア機が後を追う。

予測済みの典型的な追撃行動。敵機の行動を見透かして、機体が円の頂上に辿り着くその直前、ヒューイは機体を失速させた。進む力を失って、機体が円頂上で横滑りを起こす。ナディア機はその横を、ヒューイを追おうとしていた宙返りの機動で通り抜けて行った。

捻り込み。

円頂上で横滑りを起こしたことで、ヒューイ機はそこから左斜め下へ急旋回する。ピタリとくっついて後を追っていた敵機はもうない。

ちらり、と宙返り中に確認した後方を、操縦席に取り付けられたバックミラーで再度確認する。鏡越しの世界には、ナディア軍機に混じって空に溶けるようなメテオールの青色が見えた。

みんな無事、天空へ続く道を上がって来れた。思わず口元に浮かんだ笑みをそのままに、ヒューイは機体を城の裏側へ回らせた。

分かるから　そこに彼女がいると。

空の城の外観に忙しなく目を走らせる。どこかにいると、ヒューイの中の何か　空の化身と呼び合うその部分が告げる。

城の裏側に、庭と呼べるようなスペースはない。むしろ、城が土台からややみ出して建てられているような作りになっていた。

その城の一角に、いた。

城の部屋の一角、そこに城の外壁からはみ出すように作られたバルコニーに。その手摺りから身体が落ちそうなほどに身を乗り出し、一心に空を、飛ぶメテオールの青い翼を　ヒューイを見つめるそ

の姿は、別れる前と変わらない。

「リセリア」

透き通るように白い肌に、触れれば手折ってしまいそうな華奢な四肢。纏うのは、初めて出会ったときと同じ、純白のワンピースだった。その裾と星の髪を風に靡かせて、リセリアは空の瞳でヒューイを見ていた。一度だけ青空の下と一緒に飛んだ時の、澄んだ瞳で離れていたのはほんの二週間だというのに、もう随分と長く会っていないような。そんな哀愁に駆られた。

その横に、数度しか会っていないのに脳内にくつきりと焼きついた顔が現れる。

ナディアの《暴風》　アルクス。

リセリアと同じようにヒューイを見る。リセリアとは違った挑戦的な目。

『ようやく来たか』

と。その黒い双眸に、まるで再会を待ちわびていたかの言葉を、ヒューイは感じ取った。

リセリアとアルクスの姿が見えたのは、ほんの二、三秒。しかし、それだけ見られれば十分だった。

操縦桿を引いて、機体を空の城の真上へ上げる。追従する敵機が、あちらこちらから集まり、ヒューイ機を取り囲もうとする。包囲への動きが見られた瞬間、

「全機、全力で援護！！」

ヒューイは無線機に向かって、力任せに叫んだ。

たちまち天空へ上がって編成を組んでいたメテオール機の編隊の一つが、飛んできて散開。空中格闘戦にもつれこむ。

彼らは分かっている。ここでヒューイを落とさせるわけには行かないと。だから、

「……感謝する」

応える暇もない彼らに向かって一言を投げかけて　自身を固定していた操縦席のベルトを外した。

「無謀な真似させて悪かったな」

有線で繋がれた機内の通信を使って、後部座席の操縦士に呼びかける。途端、ヒューイのその言葉がよほど意外だったのか、僅かの間だけの相棒から素っ頓狂な声上がる。

『い、いえ！……改めて《空帝》と呼ばれる由縁を実感いたしましたので……こちらこそ感謝いたします。御武運を』

真摯な声で言われてるこっちが恥ずかしくなるような事を言っただけのけた操縦士をちらりと振り返り、敬礼。年若い彼もまた、右手の敬礼で返した。

背中に背負ったものの重みを感じながら、ヒューイは操縦席から立ち上がって、枠に足をかける。

そして、眼下の空の城目指して、空の中へ身を躍らせた。

「なっ……戦闘機から飛び降りただと!?」

先刻空の城の周囲を旋回していたヒューイ・ノルグス。彼が敵味方入り乱れた空の中、城に向かって飛び降りたという報告は、アルクスに驚愕させるに十分な情報だった。

怒鳴り返すように確認を求めるアルクスに、報告してきた部下がハッと切れのよい敬礼を返す。そんなものどうでもいいから早く状況を報告しろ、と言いたいところだったが、今はそれを言う時間すらも惜しい。ぐっと言葉を飲み込む。

「ヒューイ・ノルグスと思われる人物は落下傘を展開し、城の上層へ着地。内部へ侵入されました。現在は、下層に向かって進行中の事で、警備兵が全力で対応に当たっていますが……」

「思われるじゃない。あいつ以外に誰がいるっていうんだ！ とつとと捕まえろ！」

正しい語意で報告してくる部下に、アルクスは感情を叩きつける。張り上げられた《暴風》の声に、部下の肩が跳ね上がった。慌てて了解の意を示し、部下は慌しく去っていく。

ヒューイからリセリアを取り戻した時から、まだ終わらないと。

もう一度空で相間見えることになるかもしれない、心のどこかに根拠のない予想はあった。だが、この敵味方入り乱れる空戦の真っ只中、戦闘機から降りて単身空の城へ乗り込んでくる馬鹿がどこにいるのだろう。実際に、ヒューイ・ノルグスという奴がいるのだが。

ここへ来る。

直感的にアルクスはそう確信した。

ナディア王都よりも重要な拠点となったこの空の城には、現在ナディア皇国女王イスカもいる。そのことはすでにメテオール側にも情報が漏れているだろう。

だがそれを差し置いてなお、アルクスはここに リセリアの元にヒューイがやってくると確信していた。

分かる。アルクスとヒューイは似ているから。

「アルクス、どうしたの……？ さっきの……ヒューイだね」

ただ事ならぬアルクスの様子に、つい先程までバルコニーに出ていたリセリアが不安な面持ちで室内に戻ってきた。

空の化身。それほど重い役目を担って生まれたようには見えないその姿に、アルクスはごくりと唾を飲み込んだ。

アルクスがりセリアと呼び合うように、ヒューイもリセリアの居場所を漠然とだが感じ取ることができる。なにより、先程バルコニーに出ている姿が見られているため、部屋の大まかな位置取りもばれているといっつい。このままここにいたら、あっという間にリセリアはヒューイに見つかってしまう。

アルクスがヒューイと対峙するのはいい。だが、リセリアが奪われるのは許せない。

ごくりと唾を飲み込んで、できる限りの満面の笑顔を作ってリセリアに手を差し伸べる。

「ごめんな、リセリア。ここは危ないから、別な部屋に移動しよう」と、アルクスが一步踏み出した。その瞬間。

ダンッ！と地に響くような着地音が、部屋に響いた。発生源は、開きっぱなしになっているバルコニー。

思わずリセリアの背後に視線を向け、両足のホルスターに手を掛ける。だが、引き抜く隙はなかった。

「よう、《暴風》。また会えて光栄だ」

どこかで聞いたことのある台詞を携えて。

ヒューイ・ノルグス。空の帝王 《空帝》と呼ばれた飛行機乗りが、リセリアの向こう側からアルクスに拳銃を向けていた。

* * *

小さな背が、目の前にあった。

流れる金髪と、細い肩。汚れない純白のワンピース。室内だからだろうか、惜しげもなくさらされた滑らかな足先を覆うものはない。

たった数歩。駆け出せば手の届く距離に、リセリアがいた。

その向こう側に立ち今にも拳銃を引き抜こうとするナディアの《暴風》 アルクスに向かって、ヒューイは右腕を真っ直ぐ伸ばして銃口を向ける。

リセリアを中間に挟んで、ヒューイとアルクスは対峙していた。

「ヒュー、イ……？」

呆然とした鈴の音でリセリアが名を呼んで、振り返る。動作一つ一つ、別れる前と変わらない可憐な仕草に、思わずヒューイの口元が綻びそうになる。

だが、それとは対照的に、ヒューイの右手に握られた黒光りするものに、リセリアの目が見開かれた。銃口から遠ざかるように半歩脇へ逸れ、ヒューイとアルクスを交互に何度も見る。

明らかな不安を見せるリセリアの瞳に、ヒューイはアルクスを視界の端に収めたまま、一瞬だけリセリアを見る。

「大丈夫だから……動かないでくれ、リセリア」

な？と子供に言い聞かせるように微笑みかけ、ヒューイはリセリアの肩越しに見えるアルクスへ視線を移した。

銃口の線は、リセリアの真横を丁度すり抜ける位置にある。リセリアがアルクスのどちらかが下手に動いてしまえば、リセリアに弾丸が当たってしまう。アルクスがリセリアを盾にすることはまずないだろう。あとは、リセリアが動かなければ安全だった。

バルコニーからの出現が予想外だったのか、アルクスは右手を太ももにつけたホルスターに触れる寸前で手を止めていた。

「賢明だな。二度目は通じない」

いくらアルクスが早抜き打ちに長けていても、一度その速さを見せている分相手へのその効力は半減する。銃口を突きつけられたこの状態では、アルクスが抜き打ちするよりもヒューイが自動拳銃のトリガーを引くほうが早い。

苦虫を噛み潰したような顔で、アルクスが口を開く。追い詰められた状況。だが、その顔に諦めはない。

「まさか単身乗り込んでくるとはな。しかもバルコニーからとは、随分と派手な登場だな」

「堂々と中を通してもらえるなんて思ってたないし、突破するだけの力も俺にはないからな。どうやったらリセリアの元まで辿り着けるか、事前に色々と策は巡らせといたんだよ」

おおよそのリセリアの位置は感じ取ることが出来る。ならばあとはそれを頼りにどうやって彼女の元まで行くかだけが問題だった。その点でいえば、城の外観を回った際にリセリアの位置がはっきりと確認できたのは僥倖だった。そのおかげで上の階から用意しておいたロープでバルコニーに降りてくるという手を使うことが出来たのだから。

ハッとアルクス嘲笑を浮かべる。

「撃つなら撃てよ。リセリアを取り返しに来たんだったら、オレを殺して奪ってみるよ！」

オレがそうしたように、力ずくでも取り返してみろ。そう激昂するアルクスに、ヒューイは思わず嘆息しそふになり、しかし表情筋一つ動かすことなく淡々と言いつつ放った。

「俺は別に、リセリアを取り戻しに来たわけじゃない」

その一言にアルクスと、そしてリセリアの見開かれた目がヒューイに突き刺さった。

ちらり、とアルクスを見据えたまま一瞬だけリセリアを見る。空の化身である少女は、言葉の意味が飲み込めない様子でヒューイを見つめていた。どこまでも無垢な、空色の表情で。

アルクスもリセリアと同じようで、訝しげな顔をしている。

ヒューイはスツと息を吸い、意を決して口を開いた。ずっと言いかけた事を、伝えるために。そのためにヒューイは、単身危険を冒してまでここへ乗り込んできたのだから。

「俺は、リセリアに言いたいことがあるんだ」

そう切り出すと、不思議と続く言葉はすんなりと出てきた。

「確かに、この大陸でリセリアの呼び声を聞いたのは、俺とお前。そして俺らは敵対する国同士に分かれてるし、その両国は空の化身を欲してる」

だが、とヒューイは続ける。

「どの選択肢を、この先どの道を選ぶのかは、リセリアの自由だ」
「じ、ゆう……」

初めて聞いた。そんな風に、呆然とヒューイの言葉を繰り返すリセリアに、アルクスが反射的に声を荒げた。

「勝手なこと言うな！ リセリアはオレの」

バンツと。その先は部屋中に響いた重い銃声に掻き消された。だが、血は一滴も流れていない。アルクスの髪を数本散らして飛んでいった銃弾は、部屋の入口にあるドアを貫通していた。

「勝手を言ってるのはどっちだ。ガキは黙ってる。次は、撃つ」
アイスブルーの視線に射抜かれて、アルクスの身体が強張る。

撃ってしまった以上、今の銃声に気付いたナディアの兵がこの部屋に殺到するのも時間の問題だ。硬直したアルクスから、すっと視線を移す。

「リセリア」

「私、は……」

どうする？と。柔らかな声を掛けるヒューイに、リセリアは口籠った。胸に手を当て、俯き臉を伏せる。自分の中で、答えを出そうともがいているかのように。鳥が、閉じられた籠から飛び出そうと足掻いているように。

「選べないよ……私は、この空を、世界を守らなくちゃいけないから。たとえ訪れるべき対話が遙か先の未来だとしても。ここでヒューイとアルクス　どちらの国に付くかを選ぶかなんて、空の意志じゃない。それは、果たすべき責務じゃないもの」

泣き出しそうな、声だった。アルクスに向けるヒューイの銃口の先端が、ほんの一瞬だけ揺れる。

だって、と。顔を上げて、リセリアが告げた。

「私は、空の化身だから。空を体現する、空っぽな、空色の心のリセリアだから」

それはまるで、だだをこねる子供を説き伏せるように、無理にでも納得させるように、搾り出したような声で　その瞬間、ヒューイの中で何かが弾け飛ぶ。気が付いたときには、声を張り上げていた。張り上げずにはいらなかった。

「　っ、俺は今リセリアと話してるんだ！」

ヒューイ自身驚くほどの大きさの声は、部屋を抜け、空まで響いていった。あまりの音量に、怒鳴り声を浴びたリセリアだけではなく、アルクスの身体も大きく跳ね上がる。

もう、耐え切れなかった。

リセリアの自由だと、どの道を選ぶ権利だってあるのだと言ったのに、どうしてリセリアはこうも《空の化身》という言葉に捕らわれ続けるのだろう。

「だったらなんであの時、アルクスを呼んだんだ。飛んでいるあいつの機体から飛び降りたんだ。どうして俺を呼んだんだ！」

空の化身として、対話を行うべき者と出会うことが責務ならば、アルクスと出会った時点で奴に付いていればよかった。ヒューイは、

空の化身にとって不要な存在のはずだった。出会うことなどなかったのだ。

感情が言葉となって、口から迸る。熱に浮かされたかのように、音となって空間に燃えていく。

「空の意志を核に生まれたから？　だからなんなんだ！　俺が今話しているのは、空の化身じゃない！　俺は、俺が　！」

リセリアの瞳に雫が溜まっていくのが見える。けれど、一度吐き出した想いは止まらなかった。

「俺が今話してるのは、目の前にいるのは　！　俺が惚れた、リセリアっていう一人の女だ！！」

その瞬間　リセリアの頬を、一筋の透明な雫が伝った。

ずっと、言いたかった。

ずっとずっと、心のどこかに引っかかっていた。

嵐の中どうして、「助けて」とヒューイを求めた。

ヒューイに「リセリア」の名を名乗ったとき、なんであんなにも嬉しそうに喜んでヒューイに抱きついた。

一緒に空を飛んだとき、空色が好きだと告げたヒューイをどうして抱き締めてくれた。

アルクスに追い詰められた山中で、どうして、空色と呼ばれてどうして涙を流したんだ。

どうして。なんで。そればかりが頭の中を巡る。数え上げたらキリがない。

「なあリセリア」

こんなところで呼吸を乱してはいけないのに。目の前にはアルクスも、城の中には沢山のナディア兵もいるというのに、留まらない想いの奔流に同調するかのように、呼吸は収まってくれない。

それでも、肩を大きく上下させながら、ヒューイは静かに涙を流して佇むリセリアを見つめた。

今まで見せてくれた、空みたいにくろくろ変わるリセリアの表情、仕草。それら全てを思い浮かべて。

「リセリアはどうしたい？」

ヒューイの中に刻まれた、リセリアの記憶。それら全てが、リセリアの証だった。

リセリアの唇が、小刻みに震える。瞬きの度に、また一つ頬を流れ落ちる水の糸が増えてゆく。

けれど、空は澄み渡った青空のままだった。

「大尉！ アルクス殿！ 如何いたしました！？」

銃声を聞きつけたらしいナディア兵がドアを乱暴に叩く。硬直したままわななと身体を震わせていたアルクスがその音に我に返ると、ドアの外の兵二人が室内に侵入してくるのはほぼ同時だった。アルクスが二丁拳銃を引き抜き構え、その後ろのナディア兵も青いメテオールの軍服を見るや否や手に持っていた拳銃をヒューイに向ける。

その様子を脳が認識するよりも早く、脊髓反射のような速さで、ヒューイは身を翻した。

残された逃げ道はたった一つ。

先程上から降りてきたバルコニーの手摺りに、脚を掛ける。何をしようとしているのか気付いたアルクスから、驚愕の聲が上がる。だが、それに反応を返すこともなく、リセリアを振り返ることもなく ヒューイはバルコニーから身を躍らせた。

飛び出したその下に、空の城の大地はない。あるのは風に身を任せ漂い続ける真っ白い雲だけ。

高度約二万フィートの中空。

背にはもう落下傘もなければ、ヒューイは鳥のように飛べる翼も持っていないけれど ヒューイの翼は、別のところにあるから。

左耳につけたヘッドセットに向かって、力いっぱい叫ぶ。ヒューイが命を吹き込むべき、命の無い青い翼を引き連れる彼を。

「カルダー つ！」

応答は僅か二秒後。

『……そんなに叫ばなくなつて、聞こえてるつての。耳が痛い』

いつもどおりの悪態をついた返事。それと共に、落下するヒューイの遙か下に、メテオール軍機ホークが姿を現した。搭乗者はもちろん カルダ。

その後ろを連結用のワイヤーで結ばれている真つ青な鋼鉄の鳥が、カルダ機に引かれてゆらゆらと空を飛んでいた。

カルダが旋回をし、後ろに引き連れた機体がヒューイの真下に来るように飛ぶ位置を調整する。撃ち落とされぬよう、メテオールの各機が周囲のナディア機を相手して援護を測る。

ブルーバード。

フォーゲルに代わって、そう名づけた機体。メテオール軍機の青色よりも遙かに鮮やかな光を放つ、至高の空色の機体が命を吹き込まれるその瞬間を待っていた。

リセリアに会いに空の城に行く。ヒューイが先陣で空へ上がり、単身空の城へ乗り込むその作戦案は、カルダから軍上層部に進言され、厳格な審議がなされた後採用された。

上手くいけば空の化身がメテオールに戻ってくることに、軍上層部も納得したのだろう。リセリアに会いに行かせてもらえる理由が、彼女を空の化身として利用するという事が目的であることに苛立ちを感じずにはいられなかったが、我俣が通っただけでもよかったと思うべきだった。

だが具体的な作戦考案段階で、ヴェルナー西基地で失った機体数のこともあり、ヒューイが城へ乗り込んだ後の機体を空で破棄するという無駄な選択を軍は選ぶことは出来なかった。

故に軍はまず、あまり実践では使われない二人が操縦できる戦闘機でヒューイが空へ上がる事を命じた。ヒューイが機体から降りた後は、後部座席に乗っていたもう一人の操縦士が機体を回収しているはずだった。通常の単独で搭乗する機体に比べて重量の増すあの機体では空中格闘戦を生き延びるのは不利ゆえだ。

そして、もう一つ。《空帝》に渡されたのが、空色の試作機。そ

れも、メテオール軍の設計士と技術者たちがメテオールの特性を最大限に伸ばした機体だった。

より風を受け掴み易くするために、安定性を殺した大きな翼。長い水平尾翼。エンジンと燃料タンク、ラジエータとエアコンプレッサー、その他飛行のための機器をぎゅうぎゅうに詰め込んだ細いボディ。二つの機銃はあとから取って付けたように、機体の頭に埋め込まれていた。

明らかに戦闘機として開発されたものではなさそうな機体だった。長らく試験飛行されることもなく倉庫で埃を被っていたその機体と対面した時、

『……ブルーバード』

埃を被ってなお失われない、その機体の空に溶けるような蒼さと滑空する鳥を思わせるフォルムに、ヒューイの口からするりとその名が零れた。《鳥籠の地》の外、遙か遠い異国では幸せを運ぶ逸話を持つ、青い鳥の名を。

『ヒューイなら、この子を飛ばしてあげられるでしょ？』

倉庫でヒューイにその機体を見せたフェリオットは、満面の笑みを浮かべていた。その機体は、一からではないにせよフェリオットも携われた機体だったから。自分の手で生み出すことの出来た翼を、誰よりも空を知り愛する友へ手渡せることを、携わった誰よりも喜びと感じていた。

フェリオットはこの機体を作る時から、きっと分かっていた。この機体が、ヒューイにしか飛ばせないことを。

そして、ヒューイも分かっていた。ブルーバードと名付けたこの機体が、自分を待っていたことを

カルダがブルーバードをワイヤーで連結した機体に乗る、空へ上がる。そして、空の城から脱出したヒューイ　あるいはヒューイとリセリア　が、中空でそれに乗る込む。

それが、軍がヒューイに与えた最大限の譲歩だった。

カルダが何度か旋回を繰り返し、落下を続けるヒューイとの距離を縮める。しかしまだヒューイの手はブルーバードに届かない。なおかつ、届いただけでは不十分だ。ヒューイとブルーバードの落下速度が合わずずれ違ってしまえば、この空中、ヒューイは翼を得る最初で最後の機会を失い、地面に叩きつけられて死ぬだろう。

地上から、風が吹き上げる。機体よりも遥かに軽いヒューイの身体は落下速度が著しく減少した。

それを見て、再度カルダが旋回行動を取る。縮まる、ヒューイとブルーバードの高度差。

「まだだ……」

熱に浮かされたように、ヒューイが呟く。

旋回を終えたカルダが、ヒューイの真下を通過する。そして、その軌道を辿るように、ブルーバードがもう一度ヒューイの真下に来る、その直前。

「エンジン停止！ 回転にブレーキ！」

カルダが指示通りに機体を操作するのと、風がブルーバードの翼を持ち上げたのは、同時だった。

手を伸ばせば届く距離。ヒューイの落下速度と、ブルーバードのそれが一致する。

手が、機体の操縦席、その淵を掴む。

そこからは、一瞬だった。

力任せに手繰り寄せた身体を、ヒューイはブルーバードの操縦席へ滑り込ませた。

別の機体が引つ張ってきた機体に、ヒューイが空中で乗り込む。落下傘も何も使わず、ただ味方の機体の操縦と風を利用しただけでこなして見せたその芸当に、アルクスが言葉を失う。

「……嘘、だろ」

ヒューイが飛び降りた瞬間、落下傘も身につけずに空中へ身を投げたその姿を見て「馬鹿が！」と嘲笑っていたアルクスはどこにも

いない。リセリアと同じく手摺りから眼下を眺め、優美に空を飛んでいく空色の鳥を見て言葉を失っている。

「大尉、一体何が……」

背後からおずおずと掛けられた部下の声に、アルクスがギリツと奥歯を鳴らした。

「出る……」

悔しさの滲み出たアルクスの呟きが聞き取れなかったのか、部下が「え……」と戸惑いの声を漏らす。それが感に障ったらしく、アルクスは振り返るや否や声を荒げて部下に詰め寄った。

「出撃すると言ったんだ！ 今すぐだ！ 機体の準備はできているな。今すぐ出撃するとイスカに伝える！」

ベッドの上に放り投げてあった厚手のフライトジャケットと手袋、ゴーグルを乱暴に掴み、手早く装着して、ヒューイの弾丸で穴の空いたドアへと向かう。

「ねえ、アルクス」

その背を、リセリアは呼び止めた。

アルクスが、ピタリと足を止めて振り向く。こんな時に何を、と彼は訝しげに眉を顰める。

目の端に浮かんだままだった涙の雫を指で振り払い、リセリアはアルクスの瞳を見つめた。立った一言、彼に伝えなければいけないことがあったから。

大きく息を吸い込み、

「空を愛してくれて、ありがとう。アルクス」

そう微笑んだリセリアに、アルクスがこれ以上ないほど大きく目を見開く。リセリアに向かって手を伸ばし、駆け出す。

けれどアルクスがりセリアの腕を掴むよりも早く。

リセリアは自分を閉じ込めていた手摺りを乗り越え、何もない空っぽの空へ身を投げた。

悲鳴のようなアルクスの呼び声が聞こえる。それは、あつという間に遠ざかり風の音に溶けて消えていく。

目を見開いて、リセリアは真っ直ぐ眼下に目を向ける。

そこに彼が待っていてくれていると、分かっていたから。

「ヒューイ！」

「リセリア！」

落下するリセリアのその真下。青い鳥に乗ったヒューイが、張り上げたリセリアの呼び声に全力で応えた。

自身が機体に取り込んだときのように、リセリアと機体の高度差を縮め、ヒューイは機体のエンジンを切る。懸命に手を伸ばすリセリアに、ヒューイも操縦席の淵線機体に腰をかけて身を乗り出し、上空に手を伸ばす。

もう少し。もう少しで手と手が触れる。しかし、その距離が中々埋まらない。遠くなったり近くなったり繰り返すが、互いの手を掴めない。

ヒューイがリセリアの手を掴もうと、一層手を伸ばす。だが、これ以上身を乗り出せば、ヒューイが操縦席から落ちてしまう。それだけは、駄目だ。彼だけは、絶対に死なせてはいけない！

きゅつと唇を引き絞り、心から叫ぶ。空に命じる。空は私、私は空。だから、私自身がヒューイの翼を空へ持ち上げるのだと、そのイメージを抱いて。

（お願い……っ！）

リセリアとヒューイの間、また離れていた距離が縮まる。手と手が近づいた、その瞬間。

地上から天に吹き上がった突風が、ヒューイの乗る青い翼をほんの少しだけ上に上げた。

その一瞬を見逃さず、ヒューイがリセリアの手を掴んで引き寄せたまま、振り落とされないように可能な限り身体を密着させ、鳶色の髪がかかる首元に顔を埋める。

何故だか、涙が零れた。

「リセリア……」

声も上げずに涙を流すリセリアを片手で力強く抱き締め、ヒューイは再びエンジンを始動させる。静かにプロペラが回りだし、機体が飛行を始める。

「ヒューイ……」

彼の名を呼ぶと、わけも分からず流れ落ちる涙が増えた。

ギョツと。回した腕に一層の力を込めて、一つずつ言葉を紡ぐ。

「ようやく…… やつと分かったの。何で、私が化身として未熟なままヒューイとアルクスを呼んだのか。どうして、アルクスの機体から飛び降りたのか」

化身として未熟ということは、ヒューイは知らない。それでも、ヒューイは黙ってリセリアの語る事を受け止めてくれていた。

「私は、私として生きたかった。空の化身じゃない、リセリアとして」

化身として生まれた自分が人としての意志で空を操れなかったのは、定められた時よりも早いこの時代に、未熟な状態で生まれたせいだとずっと思っていた。

でも、違った。

操ることが出来なかったのは、己の心が見つかっていなかったから。否、既に存在していたリセリアという一人の人間としての心に気付けなかったから。未熟だと、空の化身だと、与えられたその使命に捕らわれるばかりに。

だから今この瞬間、リセリアは自分の意志で空を操ることが出来た。

「私は空っぽなんかじゃない。私は、やつと私に気付けた」

アルクスに空っぽだと言われたとき、わけも分からず涙が頬を伝った。その気持ちの名前を、リセリアは知らなかった。それが悲しいのだと言う事を、今ならはつきりと理解することが出来る。

周囲の空戦の激しさから隔絶されたように、ヒューイの機体はゆっくりと飛行を続ける。冷たい風が、耳元で澄んだ音を奏でる。

「空の城の外で 《鳥籠の地》の外で、生きたかった。どこまで

も行きたかった」

城でその時を待ち続ける間から、ずっとずっとリセリアは願っていた。人としての自由、閉ざされた籠からの開放を求めて、悲鳴を上げていた。

その悲鳴が、ヒューイとアルクスを呼んだ。

けれど、最初に空の城を訪れたアルクスが欲していたのはリセリアでなく、空だった。だから ナディアに向かう途中、それを知ったりリセリアはいつの間にか飛行機から空に身を躍らせていた。明確な嫌悪も恐怖も、理解していたわけではない。ただ、心がアルクスと共に行く事を拒絶していたのだ。

溢れ出る涙が風に攫われ天に消えていく。

ヒューイはそっと、リセリアに頬を寄せて囁いた。

「大丈夫」

耳元で聞こえた優しい声に、顔を上げる。自分と同じ空色の瞳に、情けない泣き顔が移りこんでいた。

コッソリと額と額をくっつけて、

「俺達は飛べる。どこまでだって、自由に 鳥籠の外にだって行けるさ」

優しいけれど力強い言葉でそう誓うヒューイに、リセリアは晴天の笑顔で頷いた、

第七章 空色の空

頭が、割れるように痛かった。

体調も悪くないし、怪我をしたわけでもない。なのに、思考を阻害するかのよう痛みが脳に響く。

頭痛のせいなのか、それとも何か別の原因があるのか、思考が纏まってくれない。するべき事、成すべき事は分かっている。だからこうして愛機の元に向かっている。

苛立ちをぶつけるように、ガツガツとブーツから大きな足音を立てて発着場へ早足で急いだ。道々のナディア兵が、アルクスを避けるかのように左右に分かれていく。その様子が、またアルクスの癪に障った。

なんで、どうして。その二言が脳内を駆け巡る。

（どうしてオレじゃないんだ）

なんでリセリアはオレを捨てて、あいつの元へ行ってしまったんだ。納得できなかった。リセリアを見ていたのは、アルクスもヒューイも同じだというのに、何が違うんだ。

黒いフライトグローブを嵌めた手が、ジャケットの胸を掴む。

問いかけても問いかけても、答えは出ない。

だったら、やることは唯一つだ。

足を止めて、見上げる。そこに、空を染める茜よりもなお深く暗い、赤血色が鎮座していた。

アルクスが大尉の階級に昇格したとき与えられた機体 最も愛した機体だった。

一般的にナディア軍機として使われているものよりも巨大なエンジン、可能な限りに無駄なスペースを失くした細身の胴体に押し込んだ、真っ赤な機体。ただひたすらに速さと力強さを求めて作られた機体だった。ただひたすらに空を目指し、リセリアを追い求めたアルクスのように。それ以外のすべてを切り捨てた、《暴風》が

生み出す嵐である^{サイクロン}と、アルクスはその名前をこの機体に与えた。

「アルクス！」

操縦帽を被り、顎下のハーネスを留めるアルクスの背にこんなところでそうそう聞けるはずのない声が浴びせられる。

ナディア皇国女王イスカ。ナディア皇国の最高権力者が、礼儀も知らない下士官ばかりがうろつく合間を縫うようにして、アルクスに駆け寄ってきていた。そう体力があるほうでもないのに全力疾走をしたため、肩を大きく上下させている。雪のように白い頬は、ほのかに桜色に色づいている。

その彼女の後ろには、つい昨夜目にした《取り巻き》の嫌な顔。

「危険なんだから、女王様は引っ込んでろよ」

お偉いさんがこんなところまで来ていいのか、とちらりと一瞥して女王から目を逸らす。

垣間見た彼女の顔は、まるで今生の別れを告げる友を見送るような不安に満ちていた。

それは、女王としてのものではない。いつもアルクスと二人だけで会話するときに見せる、素の彼女。たった一人のイスカという女性の顔だった。

決して女王に向けていいとは言えない言葉を放つアルクスに、《取り巻き》があからさまに嫌悪を示す。だが、口は挟まなかった。アルクスとイスカが女王と部下ではなく、それ以外の仲を持っていると知っているから。

突き放すアルクスにイスカは何か言おうとして唇を開き、しかし口を噤んで瞼を伏せた。再び開かれた双眸に、既に『イスカ』としての顔はない。在るのは女王イスカルラータとしての凜々しさだった。

「……あの子を、撃つのか」

もつと言いたいことはあるような気がした。だが、女王として在らなければいけない彼女が、私情を挟むわけにはいかない。ここに来たことについても、軍の者にそんな姿を晒してしまった分、後々

彼女を支える重役が口をすっぱくするだろう。

「悪いな」

ゴーグルを装着し、アルクスは慣れた身のこなしでサイクロンに乗り込む。頭の中に忌々しい《空帝》の顔が浮かぶ。

アルクスの中に最後に残ったリセリアを、奪ったヒューイ。あいっだけは、許しておけない。今度こそ、撃ち落とす。

やっぱり、あの時渦島内海へ落ちていくヒューイ機に、執拗でも何でも追撃をかけるべきだったのだ。ナディアのあの忌々しい寂れた町の近くで会ったとき、確実に殺しておけばよかった。そうすればリセリアの居場所、アルクスの元しかなかったのだから。

空を愛し、空に愛される《空帝》は二人も要らない。

たとえヒューイがリセリアを連れていたとしても、無傷で墜落させるなんて真似してやらない。

リセリアがアルクスの元へ戻ってこないのなら

「オレが、撃つ」

呟いたその瞬間、頭痛が一段と激しさを増したような気がした。無視して、エンジンを入れる。横暴な音を立てて動き出したプロペラが生み出す風に煽られて、イスカは《取り巻き》に言われるがままにアルクスに背を向けて奥へと下がっていった。

名残惜しそうに、アルクスを振り返るイスカ。その姿が視界の端に映る。

けれどそれから飛び立つまでの間。アルクスがイスカと目を合わせることはなかった。

一頻り泣いたりリセリアを、自分の席の直ぐ後ろに設けられた後部座席へ座らせ、ヒューイは機首を上げた。

酸素濃度が低いために大した上昇はできない。だが、上昇行動を取らなければこの高度二万フィートを維持できないのも確かだった。リセリアを乗せ連れて帰るために作られたその席に身を収めた彼女は、席の奥に押し込んであったフライトジャケットに袖を通す。

ベルトでしっかりと身体を席に固定させ、小型のインカムを耳に嵌める。

「……暖かい」

サイズが合わず大きすぎるジャケットの首元を耳まで引き上げたリセリアの嬉しそうな声に、思わず口元が綻ぶ。姿は見えなくても、その声色からどんな表情をしているのか手に取るように分かった。

「また、一緒に飛べて良かった」

瞬く間に風に消えていくヒューイの言葉を聞き漏らさなかったリセリアから、私も、と控えめな声が返ってきた。

一緒に空を翔けられる喜びに、二人は揃って穏やかな笑みを浮かべた。ここが戦場だということも忘れてしまいそうだった。

が、それを邪魔するような無粋な声が無線から入る。

『おかえり、リセリア』

今では口煩い印象しかない悪友の声に、ヒューイの意識は一気に現実を引き戻される。うんざりとするヒューイとは対照的に、リセリアの声は弾んでいた。

「ただいま、カルダ！」

『私もいますよー』

「ルベリエ！」

除け者にされるのが嫌だったのか、慌しい空中戦の通信の合間を縫って、ルベリエから一声がかかる。聞こえたのは一言だが、リセリアにとっては十分な活力になっただろう。

ザザッとノイズを立てて、空中戦の真っ只中にいるのカルダから指示が飛ぶ。

『ヒューイ、このまま基地へ帰還を』

「駄目だ」

どこかで聞いたようなその指示が言い終わるよりも早く、ヒューイは即座に首を横に振った。

ヴェルナー西基地が陥落したときのように、一人だけ安全な道を選ぶのが嫌なわけではない。そこかしこを飛び回る両国の機体から

発せられるエンジン音、翼が空を翔ける音、容赦なく降り注ぐ機銃の音。それら全てを切り裂く傍若無人な音を、ヒューイの耳は捕らえていたから。

『来る』

呟いたヒューイの声に、リセリアのそれが重なる。リセリアもとつくに気付いている。自分自身である空の中を翔けていくその存在を、彼女が見つけれないわけがない。

「ごめんな、リセリア」

こうなってしまうては、撃たなくてはならない。言葉にはせずともそのことを理解したりセリアは眉尻を下げ、哀しげな微笑みを口元に携えて、小さく首肯する。

「来い、アルクス」

荒々しい風を生み出すその赤い機体を視界に捕らえ、ヒューイは操縦桿を倒した。

* * *

天空へ続く道から上空へ上がったメテオール機、そして空の城より飛び立ったナディア機。始めは空の城とほぼ同じ高度二万フィート弱で空中格闘戦を続けていた機体たちは、いまやそれよりも遙か下の約一万五千フィート付近に戦場を移していた。

ナディア軍の機体はメテオールよりより高度の飛行に適しているとはいえ、十分な戦闘機動を取れる高度は一万六千フィートがおよその上限だ。それ以上の高度で戦闘機動を取れば、高度を維持するだけの推進力が得られずに、機体は錘を付けられたようにずると飛行高度を落とさざるを得ない。戦闘中にそこまで落ちてしまえば、空の城の高度に復帰するのはナディア機といえど難しいだろう。そしてその高度であれば、メテオールもナディアに引けを取らない動きを取れる。

今や高度一万五千フィートの上空は泥沼の戦場と化していた。

だがそれよりも二千フィートとも高い空。そこに、ヒューイとアルクスの機体があった。

ヒューイが上を取っては、アルクスが取り返し。現在の二機の位置関係は、ヒューイが下だった。それより少し上の高さから、アルクスのサイクロンが機関銃の照準を合わせようと迫る。

全速力で一直線に逃げる青い鳥に向かって、アルクスが機関銃のトリガーを引く。飛来するいくつもの銃弾を見た瞬間、ヒューイは操縦桿を右に捻っていた。

機体が横にローリング。浮いた左の主翼の下を、銃弾がすり抜けていった。

間髪おかず機体を左に滑らせ、滑空するように下へ飛んでいく。なんとか一度アルクスを振り切らなければ、ヒューイに反撃の機会は回ってこない。

高度を落とした分、速度が増す。機体の進む先、敵味方が泥沼に入り混じるその空域では、両国の機体が蠅のように宙に散っていていた。

後ろにぴったりと張り付き執拗にアルクスが執拗に追ってくる。

前方からは、大量に飛び回るナディア機の一つが迫っていた。

ただ静かに、ヒューイはスコープを覗き込んだ。撃つ、と決めたから。撃たなければならぬその時は、トリガーを押すのだと心に誓ったから。

前方から迫る赤色と交錯する、その一瞬。ヒューイは迷うことなくトリガーを押した。

まばゆいマズルフラッシュが銃口から散り、一直線に飛んでいく弾丸。それは、上空から猛烈な速度で飛来したヒューイ機に対処することが出来なかったナディア機を貫いていった。

エンジンを中心に打ち抜かれ、ナディアの機は螺旋を描いて落下していく。操縦者の安否は、分からない。否　おそらく助かっているまいだろう、とヒューイは感じていた。

ヒューイが狙ったのはエンジンのみだが、機体が正面からすれ違

う際に撃つては、操縦者にも弾が直撃している可能性は高い。
だがヒューイはもう、その事に進む足を止めたりはしない。

敵味方がめぐるしく飛び回る中をヒューイは翔け抜ける。他の機体が生み出す対流に、風の流れに影響されやすいブルーバードの翼がぐらりと傾く。だがそんな流れを掻き消すような大気の本流に乗り、ヒューイは体勢を立て直した。

やはり、ブルーバードで混戦を生き残るのは難しい。ちらりと脇目で伺い、まだ燃料が十分あることを確認する。

ヒューイはそのまま風に乗って、渦島内海上空へと進路を向けた。予想通り混戦の中を突破したアルクスが、メテオール機を二機撃墜させて後に続いた。

両者共に、今の一瞬の混戦での被弾数はゼロ。

（長期戦か……っ！）

不利な長期戦に持ち込まれる事を危惧したヒューイの額から汗が滑り落ちる。その瞬間、

『 なんて 』

喉の奥から搾り出すような声が、無線から発せられた。

『 なんてお前なんだ 』

オープンチャンネルで発せられたそれに 思わずヒューイは背後を振り返りそうになる。だが、無線から聞こえたその声の主が放った銃弾がそれを阻んだ。咄嗟に旋回行動をとる。

無線から流れる声は、断続的に続く。とつとつと、言葉が落ちていく。

『 オレには空しかなかったのに 』

それは誰に向けたものだったのか。

ヒューイは風に乗って空を翔けながら、無言を貫いた。後部座席のリセリアも静かに声を アルクスの悲鳴に似たその言葉を聴いていた。

『 行き詰ったナディアの、その滅びの先駆けだったあの町で 父さんも母さんも失ったオレにとって、蒼い蒼い空を見上げることだ 』

けが、唯一の楽しみだった』

滅びの先駆けだった町。それがアルクスの出身地なのか。

幼い頃の記憶が蘇っているのか、アルクスの声は震えていた。

『あの地獄のような地上から見上げる自由な空だけが、オレの唯一の希望だった』

なのに、と無線越しでも分かるほどに、アルクスは歯を噛み締めた。

『なんで、リセリアはヒューイを選ぶんだ！』

激昂する声は、どこまでも響いた。無線を通じてすべての飛行機乗りへ、メテオールとナディアの軍人へ　風に乗れば、大陸の隅々まで。

オレはっ、と無線の向こうでアルクスが言葉を詰まらせる。

『オレは、リセリアと会うためだったら何もいらなかった！』

その姿を誰にも見せることなく。

愛し、求めた空の中。

共に在り続けた愛機の操縦席の中で。

アルクスは泣いていた。

「……………」

空の中　彼が泣いているのだと感じ取ったりセリアが声を呑む。

彼女の目の端に、アルクスが流すそれと同じ透明なものが浮かん

で。零れ落ちた雫がゴーグルの中で水となって溜まり、視界を邪魔す

る。けれどそんなことを気にかけることすら、アルクスには出来な

かった。

『家族だって、友達だって、恋人だって要らなかった！　軍内で疎

まれ独りになり続けようとも　オレはよかったんだ！』

空が、静まり返る。戦闘は続いて、今もその音は空を騒がせている。

なのに、空は静かだった。

アルクスの声を聞く全ての者が、誰一人、声を発さなかった。

『……飛べるなら。あの大地から離れて、空の中へ、鳥籠の外へ行

けるなら……」

空を見上げる。アルクスが、ヒューイがリセリアが、全ての操縦士が、抜けるように青い空を見えない籠で覆われたその空を見上げた。

「だからだ」

刃のように研ぎ澄ましたヒューイの声が、静寂を打ち破った。

「お前は、リセリアを求めていたんじゃない」

アルクスを否定する言葉に、ヒューイ機を追っていたサイクロンの機銃が火を吹いた。だが、ろくな狙いも定めずに放たれた銃弾は大きく機体から逸れた。

機首を上げ、旋回。遠く広く空を覆う白い雲の中に、ヒューイは突っ込んだ。高さを持たない雲の上に、ヒューイが上がる。その真下から、

「っ！」

雲を貫いて垂直に上昇し来た嵐が、接触してしまいそうなほどの至近距離で青い鳥の横をすり抜けていった。

サイクロンの生み出す強烈な暴風が、ブルーバードをふらつかせる。機体を立て直したそのときにはすでに、サイクロン アルクスは足元の雲の中へと姿をくらましていた。

雲からやや離れた位置で出現を待ち、ヒューイは肺いっぱい吸い込んだ。地上と違う清廉な空気が、ヒューイの中にうずくまっていた靄を消し去る。

いいか、と。見えない誰かに言い聞かせるように、ヒューイは呟いた。それはアルクスであり、軍の人間であり 空の化身という存在をする全てのものに、この言葉が届くように。

「空の意志を核に持っていたとしても、リセリアはリセリアだ。城から出してくれと泣き叫んで、俺達を呼んだのは間違いなくリセリアのものだ」

知って欲しかったから。アルクスだけではなく、この大陸に生きる者達に。

「大気を守る空の意志も、俺達を呼んだ想いも全部含めて、ここにいる、リセリアっていう一人の女の子なんだ！」

ここにいるのは、空の化身であるまえに一人の人間だということを。

「誰よりもリセリアを空の化身として　空としてしか見てないのはお前自身だろ。アルクス！」

無線越しの激昂に、隠れたままのアルクスから息を呑む音が届く。直後、ボンツと爆発音にも似た音がブルーバードの背後で上がった。サイクロンが雲の中から飛び出していった。

上を取られた、とそう思ったときには既にヒューイは右斜め下に機体を走らせていた。雲海すれすれを飛ぶブルーバードの左主翼の先端を弾が数弾打ち抜いていく。

撃ち終わったサイクロンは間髪おかず宙返りして再び雲の中へ身を沈めた。

どうする、とそんな問いがヒューイの脳内を過ぎった。

ヒューイも雲の中に潜むか。だがろくすっぽ視界の効かない雲中のどこをアルクスが飛んでいるか分からない状況で、同じ雲の中に身を隠すのは衝突の危険性がある。かといってこの場所を離れることも難しい。高層雲の薄い雲の中からでは、ヒューイの機体の陰が見えるているだろう。ヒューイの位置を把握し、アルクスはどこから奇襲を仕掛けるべきか選んでいる。ここから逃げたとしても、また終わりのない追いかけっこが始まるだけだ。それは雲の下に下りても変わらない。

状況を見かねてか、それまで一言も発していなかったリセリアがヒューイの耳元で囁く。

「ヒューイ、私が位置を　」
「いい」

空の化身であるリセリアであれば、どこにアルクスがいるか、その位置が手に取るようにわかる。それを使ってアルクスの出現位置を教えるという申し出を、ヒューイは断った。

これは、ヒューイとアルクスの戦いだから。そして何より、リセリアの空の化身としての力に頼りたくなかったから。

耳を澄まし、音を読む。

ブルーバードのエンジン音が、力強く飛ぶ鼓動が聞こえた。翼が風を切る音が聞こえた。何十人もの操縦士が鉄の翼で戦う音が聞こえた。

それら全ての音が、遠ざかっていくような気がした。

世界から音が消える。たった一つを残して。

(……分かる)

荒れ狂う暴風の悲しい声が聞こえる。雲の中で息を潜めて、ひっそり泣いている嵐の音が近づく。

ヒューイは無意識のうちに、ブルーバードを動かしていた。ただひたすらに高度を取る。もう、分かっているから。それだけで十分だった。

十分な高度を取って、機首を真下に向けた。それとほぼ同時に嵐が、ブルーバードの陰を映していた雲を突き破った。

ブルーバードの真正面　ヒューイの視線の先には、小さな嵐があった。

一瞬の、衝突。ヒューイとアルクスの視線が、一直線に交わった。サイクロンの操縦席で、アルクスの双眸が見開かれる。ゴーグル越しにでも分かるほどに、それは涙に濡れていた。

操縦桿に取り付けられている機関銃のトリガーにかける指に、全神経を集中させる。

撃たなければいけないのであれば、この手で撃つと決めていたから。

そしてその、撃たなければならぬときは、今。

「リセリアがお前を選ばなかったんじゃない。—お前がリセリアを選ばなかったんだ《……………》」

ブルーバードとサイクロンが、天空で交錯する。その瞬間。言葉と共に降り注いだ数多の弾丸が、サイクロンの頭部に取り付

けられたエンジンを貰いた。

風が、翼から剥離していく。重い重い金属の鳥が、重力に引かれ始める。

堕ちて行く。

その感覚を、アルクスはもう暴れる力が残っていないサイクロンの操縦席で感じていた。

機体が飛べなくなったときはどう対処すべきか。とつくの昔に頭に叩き込まれたマニュアルに準じて、機体に脱出すればいい。

機体の状態を見る限り、推進力を生み出すエンジンは破損してしまったが、まだ翼と操縦系は生きている。撃たれる前までに得てまだ微かに残る。

身体を固定するベルトを外し、操縦者は搭乗時に装備した落下傘で脱出を図る。

分かっている、のに。どうすればいいかなんて分かっているのに。どこを負傷したわけでもないのに、身体が動かなかった。

（オレが、リセリアを、選ばなかった……手放した）

ヒューイが言い放ったその言葉が、ひたすらに脳内で反芻されていた。

逆さまになった世界の景色が、ゆっくり流れていく。真つ青な空色の大空が遠ざかる。風に流れる雲が、急速に小さくなっていく。

（そっか……）

アルクスは、ヒューイに負けた。

結局、この空で一番なのはヒューイで。彼女が選り愛したのは、そんな彼だったのだ。

怒りも悔しさもなかった。アルクスの中には何もなかった。大地を嫌って離れたいと思いつけた願望も、《空帝》への対抗心も、あれほどに空を求めた衝動も。

空っぽだった。

『空っぽな、空色のリセリア』とそう彼女を呼んだアルクスこそ

が、誰よりも空っぽだったのだ。

速度を増して、高度が下がる。地上が迫る。下は渦島内海だ。このまま何もせず着水すれば衝撃で、もしくは内海の渦に吞まれて命は無い。運良く小島の上に落ちたとしても、この落下速度では行き着く結果は変わらない。

何故だか視界を覆うゴーグルが煩わしくて、アルクスは外した操縦帽ごとそれを空中に放り投げた。瞬きすらすることなく、アルクスは己の両眼で空を見つめ続けた。

こんな空を見たのはいつ振りだろうと思うほどに澄み渡った空。いや、きっと今まで何度も見えていたはずなのだ。ただ、アルクスがそう思う事を捨ててしまっていたのだ。

「……綺麗、だ……」

目に焼きつきそうなほどの青に、そう呟いた瞬間、

「……っアルクスー っ!」

大気を切り裂いて、声が届いた。

その声が 風を生んだ。

大気の大気など無視して四方八方から収束した風が、機体を横殴った。落下地点となる位置がずれていく。

ほぼ同じくして、こんな何もないところで起こるわけがない突風が、地上から天空へと吹き上がった。思わず目を閉じるほど猛烈な上昇気流が、機体を持ち上げようとしていた。

上昇させるには至らない。けれど、機体の落下速度が弱まる。

それはほんの瞬きの間の出来事だった。

「 っ!？」

連続的な衝撃が機体を突き抜けた。

思わず閉ざした瞼をうつすら開けると、うつそうと生い茂った木々がサイクロンの翼をへし折っていた。バキバキと天を貫くような音を立てて、木々も機体に折られながら機体を破壊していく。

だが衝撃も長くは続かなかった。

ドンツと地を震わす音と共に、一際強い衝撃がアルクスを襲った。

体を芯から揺るがすそのエネルギーの塊、に呼吸が詰まる。

地上との衝突。《鳥籠の地》の嵐が、地上に堕ちた瞬間だった。

激しい目眩と、嘔吐感。背筋を走り続ける鈍痛。後頭部から、額から生温い液体が滲み出て目に流れる。あまりにも強い衝撃が身体を打ったせい、赤く染まっているはずの視界は暗闇に覆われている。大渦を巻いているはずの海の音も聞こえない。

けれど、生きていた。

「がはっ、はっ……」

何度かむせ返って、ようやく呼吸を取り戻す。世界から失われていた光と音が、徐々に戻ってくる。

手探りで操縦席のベルトを外し、機体の外に這い出す。まだよく見えていない目で動いたために、地表まであったらしい幾ばくかの高さをアルクスは転げ落ちた。

痛む身体に鞭を打って、機体の直ぐ横に大の字に寝転がる。その頃になってようやく戻ってきた視力でアルクスは隣を見た。

機体は、エンジンを中心に大破していた。

機銃を撃ち込まれたエンジンは弾けるようにその一部を宙に撒き散らし、潰れた状態で半ばが地面にめり込んでいる。プロペラは着地の時に折れ飛んだらしく、元の四枚のうち残っているブレードはひしゃげた一枚だけだった。胴体後部の尾翼も木々に折られて曲がっている。

操縦席に固定されていたアルクスが生きているのが不思議な。機体はそんな状態だった。

「なんで、生きてるんだろ……」

思わず、そんな掠れた言葉が零れた。

その余韻を掻き消すかのように、一機の戦闘機が飛翔する音が荒れ狂う大渦の音に混じって聞こえた。

音が降ってきた空を見上げる。見上げて 目を見開いた。

リセリアが、見ていた。地上の束縛を知らない上空、高度千フィートほどの上空を旋回する青い鳥の後部座席から身を乗り出すよう

にして、リセリアは地に落ちたアルクスを見つめていた。

（なんで……なんでそんな顔するんだ……）

リセリアのその表情を目にしてしまい、アルクスの顔がくしゃりと歪んだ。なんで

「なんでそんな、泣きそうな顔っ、するんだ……」

掠れる声を絞り出しアルクスを、今にも泣き出しそうな不安な面持ちで見下ろすリセリアの真っ直ぐな視線が貫いた。

どうして助けたんだ。どうして見捨ててくれなかったんだ。どうして そんな顔をするんだ。

なんでオレが生きてることを確認して、そんなに嬉しそうな顔をするんだ。

雨を降らす曇り空のような顔は、アルクスの声を聴いた瞬間嵐の後の空のように晴れ渡った笑顔に変わっていた。

何故だかアルクスの両目から雨に似た透明な雫が溢れ出した。

泣いているのだ、と理解したその時 流れ落ちるその涙の意味と共に、やっと分かった気がした。

（馬鹿だ……）

アルクスがリセリアを選ばなかった 捨てた。その言葉の意味にようやく気付く。

アルクスが空ばかりを求めずにリセリアをリセリアとして少しでも接していたのなら、彼女が自分の下を去ることはなかった。ヒューイを選ぶこともなかった。

ザザッと、どうやら生き残っていたらしい無線から声が漏れる。

『全機、即座……闘を中止せよ。繰り返し……女王は戦闘を望まぬと降伏の意を……』

女王イスカの降伏宣言。そのことを、アルクスはどこか遠い世界のことにように感じていた。

リセリアがヒューイを選んだ以上、これ以上の戦闘は無意味だった。

争いを好まず、この大陸の開放を願っていた、ナディア皇国の若

き女王イスカルラータ。いつだって傍にしようとしてくれた彼女の顔が脳裏に浮かぶ。

どこの出身かも分からないというのにアルクスを拾い上げ、軍内で嫌われようとも友であろうとしてくれた。なんでイスカがアルクスだけに特別なものを与えるのかその理由　彼女の気持ちにだって本当は気付いていたのに、見えていない振りをし続けた。

全部全部、アルクスが捨てたのだ。得ようと思えば得られたものも、こんなアルクスに与えてくれたものはいっぱいあったはずなのに。

なんで捨ててしまったんだろう。

空から降り注ぐ少女の笑顔に抱いていた感情が愛しさであったことに、今頃気付くなんて。

（大馬鹿だ……）

さつき流したものは全然違う。過去を憂い、怯えているのではなかった。ひたすらの後悔と悲しみが、アルクスの双眸を濡らし続けた。

リセリアが心から嬉しそうな笑顔でヒューイに何かを伝える。

機体を傾けたヒューイがアルクスを見る。敵愾心はおろか、憤慨も憐憫もない瞳は、まるで十年來の友人に向けるようなそれと、よく似ていた。

視線は、たった一瞬だった。

踵を返すように、ヒューイとリセリアを乗せた機体が旋回行動を止めて高度を上げ　やがて青い鳥は、ブルーバード空色の空へと消えていく。スカイブルー

その姿を見送り、アルクスは絶え間なく大粒の雨を零し続ける両目を、右腕で覆った。誰にも見せたくないというように。

「あ、あああ……ああああああああああつー！」

嗚咽交じりの涙声で、アルクスは喉が切れるほどに絶叫した。手放した小鳥。籠の外へ向けて飛んでいくその鳥が戻ることは、もうない。

「ありがとう、ヒューイ」

アルクスの無事を確認したヒューイが、高度を取って進行方向を定めた後。飛行する機体の席から立ち上がって首に回されたりセリアの細い腕に、ヒューイはそつと触れた。

「……よかつたんだな」

堕ちていくアルクスを目の前にして、リセリアはヒューイに向かってアルクスを助けたいと言った。どうしてもアルクスを助けたい、死なせたくない、と。

その願いを聞き届け、ヒューイは堕ちていくサイクロンの後を追って全速力で空を降下した。風を操るリセリアが、確実にアルクスを掬い上げられるよう、速度を上げて落下する鉄の塊を必死に追い続けた。

アルクスを撃つたのはヒューイだ。けれど、ヒューイだって彼に死んで欲しかったわけではない。リセリアに酷い接し方もしたし、自身も撃たれたというのに、何故だか嫌いになれなかった。

多分それは、ヒューイとアルクスが似ている　もしかしたらヒューイもアルクスと同じ道を辿っていたかもしれないから。

助けた後悔はないか、と確認するかのようなヒューイの言葉にも、リセリアは微笑みを浮かべたままコクリと頷く。

「だって、アルクスが空を好きでいてくれるのは変わらないから。だって、紛れもなく空は私自身でもあるんだから」

「……そっか。そうだな」

空の化身としてではなく、リセリアとして告げられたその優しい思いに、ヒューイは笑みを浮かべずにはいらなかった。

いつだってそうだった。時には牙を剥くことはあっても、それはほんの僅かな一面で、いつもヒューイたちを優しく見守り続けてくれている。それがリセリアであり、空なのだから。

リセリアを席に座らせ、無線に耳を傾ける。

無線からは、絶えることなく戦闘の終わりを知らせる報告が入ってきていた。

ヒューイが無事リセリアを取り戻した後、天空へ続く道からは別ルートで空の城に接近していた、輸送船からメテオール軍の歩兵が空の城に放たれた。空戦部隊に重きを置いていたナディアの空の城における歩兵の戦力はそれほど多くなく、城が占拠されるのはあっという間だった。

メテオールとの戦争ではなく、鳥籠の開放を望んでいたナディア女王イスカは、空の城が敵の手に落ちると分かり、すぐさま降伏の意を示した。あまりにもあっさりとした決断だったが、それは諦めではなかった。

「イスカは、すごいね……」

空の城でイスカと話したらしいリセリアが、眉尻を下げながら敬意を示す。

降伏の条件は、直ぐに戦闘を中止させ、軍人を含めたナディア国民の命を保障すること。その際、自分の扱いの保障などには要らないと、女王は銃口を向けられたまま言い放ったらしい。

立派な王だった。メテオール首都の城から国を統治する帝王とその周辺の奴らに、その姿を見せてやりたいと思った。

メテオールも、侵略が目的だったわけではない。示された戦闘停止を望む意に沿う判断を下した。

これがこの大陸にとって良かったかどうかは分からない。この戦闘で多くの命が失われ、この先ナディア皇国がメテオール帝国からどのような扱いを受けるかも分からない。それでも、より良き終わり方を求めたとはいえるだろう。

戦争に、最良なんて結果はないのだ。

「俺たちも、行こう」

戦闘停止が命じられた今、リセリアを連れたヒューイには帰還命令が出されている。しかしその前に、どうしても行かなければ行けないところがあった。しなければいけないことがあった。

アルクスとイスカが、カルダとルベリエが、リセリアとヒューイが望み、この大陸に生きる全ての人の古くから続くその祈りを叶え

るために。

二人はゆつくりと目の前に聳える山脈を見上げた。
ツスタンド山脈　天空へ上がるための風を生み出すために作られたかのようなその山々に沿って上がる風は、先程よりもずつと強さを増している。

「行こう、ヒューイ」

どこまでも高く、どこまでも遠く。そう望み、願い、祈り、目指して。ヒューイとリセリアは、天空へ続く道を翔け上がった。

リセリアの想いが風となり、風が機体を後押しする。鳥のような機体の主翼が、風を掴む。

蒼い空を目指して、蒼い鳥は真っ直ぐに翔ける。

一緒ならばどこまでも遠くに行ける　そんな確信を、二人は感じた。

空を愛し空に愛されたヒューイが、リセリアの空色の呼び声を聞いた時から、全ては始まった。

空の城にて空の化身と相見えることはなかったヒューイだけれど、
今二人は、天空へと続く道　吹き上げる追風に乗り、空を翔ける青い鳥の強い翼で閉ざされた空を突き抜ける。

高度二万四千七百フィート。

鳥籠の頂上であるその場所に、レーレヘイト大陸を《鳥籠の地》
たらしめていた環気流は、もう存在していなかった。

見渡す景色は見たこともないほどに広く、どこを見ても世界の端は地平線と水平線だった。

二人の目の前には、広い広い世界がどこまでも広がっていた。

終章 巢立ちの雛鳥

夜明け前の薄暗い部屋。部屋の端の鏡台に付けられた小さな灯りが、二人の姿を暗闇に浮かび上がらせていた。

鏡の前に腰を下ろすリセリアの髪を、背後に立つルベリエが丁寧に櫛で梳いていく。その様子は、まるで母が娘の髪を整えているかのように見えた。

「リセリアの髪はやっぱり綺麗ね。私のとは違う」

「そ、そうかなあ？ 私はルベリエの髪も素敵だと思うけど……」

「あら、嬉しいこと言ってくれるわね。ありがとう」

褒め言葉の類を言われ慣れていないリセリアが、沸騰したかのようになり顔を赤らめる。鏡の中のリセリアに微笑み返し、ルベリエはリセリアの髪を整えていった。

ヒューイに連れられてこの少女がやってきて以来、彼女の身の回りの世話を見るのは、ルベリエの役割だった。最初に監視役として接していたとき、浮世離れたこの少女を放っておけず、何故か役割以上の世話を焼いてしまつて始まつた毎朝の髪の手入れ。こうして美しい髪を手にとって弄れるのが、今ではルベリエの楽しみの一つだった。

それが、もうこうしてあげられないのだと思うと寂しくて仕方がなかった。

最後の時間、一秒一秒を大切に消化していくルベリエに、リセリアがおずおずと口を開いた。

「ねえルベリエ」

「ん？ なあに？」

今日は、どんな髪型にしてあげようか。アレンジのしがいがある長い金髪に櫛を滑らせルベリエのその手が、

「ルベリエは、私のこと恨んでる？」

氷のように淡々とした少女の声に、止まつた。だがそれは一瞬で、

ルベリエは直ぐに手を再開する。

「恨んでなんかないわよ」

「　　っ　　嘘……！」

さらりと。まるで問い掛けそのものを水に流すかのような口調に、思わずリセリアが振り返った。

「私がちゃんと大気を制御することが出来ていたなら、ルベリエは墜落したりしなかったかもしれない。今もヒューイとカルダと並んで飛べたかもしれないだよ？」

感情を押し殺して、それでも殺しきれずに少しでも語気を強める。そんなリセリアに柔らかな微笑みを浮かべて、ルベリエは彼女を鏡に向き直させる。その頭上に、恨むわけがないじゃない、と囁きが落とされた。

「確かに空を飛ぶことは私の幸せの一つだったわ」

空を翔けたい。自分の手で翼を動かし、ヒューイやカルダと共に飛んでいたい。空に恋焦がれるその気持ちは今でも消えない。

ルベリエは手から零れ落ちるほど滑らかな金髪を纏め上げ、空色のゴムで束ね始める。

「でもね、それがあつたからこそ、今の私があるの」

今の私が不幸せに見える？と満面の笑みを浮かべるルベリエを鏡越しに真顔で見つめ、やや間を置いてからリセリアは首を小さく横に振った。

フツツと口元を綻ばせ、ルベリエは両脇に余らせておいた髪を手早く細い三つ編みにする。それと束ねた髪を合わせ、器用に纏め上げていく。

それにね、とルベリエは続けた。ずっと抱いていた変わらぬ想いを、言の葉に変えて。

「リセリアが空の化身だって知っても、リセリアがイコール空だなんて思えないんだもの。私にとってリセリア。貴女は最初に会った時から変わらず、可愛い女の子のままよ」

恨めるわけがなかった。

全ての髪を綺麗に纏め上げ、ルベリエは瑞々しいリセリアの頬に軽い口付けを落とした。

鏡の中には、長い髪をしっかりとアップにしたリセリアの姿。ちよつと視線を下ろせば惜しげもなく晒された白いうなじが目に入ってしまうその髪形に、ルベリエは一瞬まずかったかなと思ってしまう。

だが、それを直している時間はもう残されていなかった。

コンコン、と控えめにドアを叩く音が響く。

「ほら、お迎えが来たわよ」

リセリアを連れて、ルベリエがドアを開ける。そこにこの大陸の覇者 《空帝》 ヒューイ・ノルグスの顔があった。

こんなに朝早くからフライトジャケットを着込んだヒューイの右手には、もう一着のフライトジャケットがあった。その横のカルダはいつもどおりの軍服のみの格好だ。

「よっ。おはよう」

いつもと変わらぬ挨拶で軽く片手を上げて見せるヒューイと、おはようと優しい笑顔を投げかけるカルダに挨拶を返し、ルベリエはリセリアを前に出した。

「おはよう、リセリア。よく眠れたか？」

「うんっ」

元気よく返事を返すが、決して大きな声ではなかった。状況をよく理解しているリセリアは、声の響きやすい廊下でそんな真似はしなかった。

そんなリセリアに、ヒューイは手に持っていたフライトジャケットを着させてやった。長袖の軍服に包まれている細身が、暖かな裏地が付いたジャケットで少し着膨れしているように見えてしまった。その様子を見て、声量を落としたままカルダが片眉を上げる。

「寒くないか、それで。随分な距離を飛ぶんだろ？」

「私が見繕ったんだから大丈夫よ」

心配性なその一言をスパッと音がしそうなほど景気よく一蹴す

る。カルダが心配しているのはリセリアの下の格好だ。

リセリアの上は軍服だが、下は操縦しと違って膝上のスカート姿だ。けれど厚手のタイツを履かせているし、特別にあつらえた二ハイクーツで防寒対策は完璧だった。

そんな少女の頭に、ルベリエは纏め上げた髪を崩さぬように軍服とデザインの統一された軍帽をそつと被せてやる。

「よく似合ってるよ」

さらつとそんな事を発言するカルダをギロリと睨みつけて、ルベリエはリセリアの姿を改めて見直す。この日のためのその姿を見ると、やはり色んな思いが込み上げずにはいらなかった。

「……こうするのが一番とはいえ、やっぱりちよつと引き止めたくなるものね」

「ルベ……」

意気消沈するルベリエの肩を、カルダが優しく掴んだ。

メテオールとナディアの大規模戦闘　今では城戦と呼ばれている　が終幕してから、早三ヶ月が過ぎようとしていた。

メテオール帝国に降伏したナディア皇国は現在、ほぼ帝国の支配下に置かれていた。だがその状況は支配といっても、一方的なものではない。

皇国を思い、ひたすらにメテオールとの交渉を続ける、女王イスカ。彼女の皇国における支持率は凄まじく、帝国は彼女に対して下手に強行姿勢を取ることができなかったのだ。一方的な支配に抵抗する彼女を蔑ろにして皇国への支配を進めれば、女王を支持する多くの国民がメテオールへ反旗を翻すだろう。それを治めようと更に手を下せば、女王が示した降伏条件に反してしまう。

一度呑んだ降伏条件を破ることは、メテオール帝国の尊厳にも関わることだ。何より、この大陸にたった二つしかない国と国がぶつかりあうことは、避けたい。それが両国の思いだった。

支配ではなく、手を取り合う形で。二国間の溝やわだかまり、問題は山積みだったが、それでも現在は戦争終結に向けて動き、元々

鳥籠の地》は籠の外に向かって飛び立とうとしていた。

一方、空の化身リセリアというと、彼女は戦闘が終わって直ぐ後に、メテオール軍に保護という名の身柄確保をされた。それはもちろん、空の化身としての力を欲したがためだ。

この大陸を覆っていた環気流はなくなり、帝国は外へと動き始めた。既に大陸の外 岩礁輪よりも外側に見つけた島々に外界への進出の拠点となる基地を幾つか築いている。

その中で、空の化身という存在 その空を操る力は、メテオールの外への進出を後押しする大きな力となる。

もちろんヒューイやカルダ、ルベリエも彼女の扱いに関して反対の意を唱えたが、嘆願が聞き届けられることはなく、その立場上引き下がらざるを得なくなっていた。

だが、リセリアもただメテオールに従ったわけではない。大気を操り、空の化身として許せる限りは、メテオールに協力する代わりに、彼女はヒューイたちと共にいられる環境を望んだ。空の化身としてではなく、リセリアとして扱うことを求めた。

リセリアの意志が沿わなければ、空を支配下に置くことなどできないメテオールは、そのささやかな要望を受け入れた。

そして三ヶ月間、リセリアは帝国に協力し続けた。協力内容によつては嫌なこともあつただろうというのに、決して逃げ出すことはせず。だが、

「でも、このままじゃリセリアはいつまでたっても帝国の道具にされ続ける」

ヒューイは拳を握り締め、静かな言葉の中に怒りを込めてルベリエとカルダを見た。

空の化身とはいえ、リセリア自身に戦う力はない。空を操る力を盾に、自分という存在を守り続けるしかなかった。

その状況は一下士官であるヒューイはもちろん、数多ほどの少佐のカルダでも簡単には打開できなかった。

だから、いつ終わるか分からない、もしかしたら一生そんな生活

が続くかも知れないリセリアの前に、ヒューイは一つの決断を下した。

リセリアを連れて、大陸を出る。

「ルベリエ……」

「分かっている。それがリセリアのしたいことなら、私は反対したりはしないわ」

寂しさの中に申し訳なさを滲ませて、子猫のような顔をするリセリアにルベリエは微笑む。リセリアはその笑顔に少しでも頬を赤らめて笑顔で頷き返した。

「うん……外の世界を見たいの。この大陸の外を知って、私が生まれた理由を見つけない」

今、世界の空はなんらかしら化身が必要とされる状況に陥っている。

リセリアが感じ取る限り、今現在の空が穢れを孕んでいるのは確かだ。けれど、あまりにも世界に多大な影響を及ぼすほどの穢れであるかと問われれば、否。

ならばリセリアが本来目覚めるべきだった、もっと先の未来にて何か起こりうるのか。

大陸を出て、化身として生まれた理由を　世界が化身を求めるに至った原因を探したい。それは空の化身としての役割を果たしたという、リセリア自身の意志だった。

もちろん、メテオールは空の化身を手放すまいとしてくるだろう。だが、それも承知の上だった。

「大丈夫。この俺がいるんだから」

「……あなたの方が心配なのよ」

「……？　何が？」

ちらり、とリセリアとヒューイを見比べるルベリエ。その視線を追って二人が顔を見合わせるが、揃ってルベリエの危惧するところが分からなかったらしく、目を丸くしている。

この空馬鹿に対してそんな心配するだけ無駄だった、と嘆息する

ルベリエの隣で、カルダも同じくため息をついた。

「ったくもう……さつさへ行けよ。皆が起き出して来ると厄介なんだから」

急かすカルダが、虫を追い払うかのように手を振る。時間がないのは一目瞭然だった。

皆揃って窓の外を見ると、先程までは雲影が薄つすらと見える程度だった空は、今では紫色の朝焼けに染まっている。夜明けの時の流れは速い。もう三十分もしないうちに空は完全に明け、再建されたこのヴェルナー西基地内も本格的に動き出すだろう。その前に、動かなければいけない。

「分かってるつての。相変わらず口煩いなー」

「誰のせいでこうなったと思ってるんだ、誰のせいで」

ぐしゃぐしゃとゴーグルを載せた頭を掻きぼやくヒューイに、半眼になったカルダの冷ややかな声が浴びせられる。

だがそれもほんの数秒のやり取り。二人は二ツと口元に深い笑みを刻んで、視線をぶつけ合う。それは紛れもない、飛行機乗りの目だった。

「行つて来い。ヒュー」

「ああ、行つて来る。カルダ」

ガツと、拳と拳を一度だけ軽くぶつけ合う。それ以上の言葉はいらなかった。

背を向けヒューイとトリセリアが走り出す。その瞬間、一步を踏み出したはずのリセリアが突然振り返り、ルベリエの胸に抱きついた。

半ば飛びつかれた勢いに足がふらつくルベリエを見上げ、晴れ渡った笑みを浮かべたりセリアが

「ルベリエ、大好きだよ」

それは一瞬の、それでも永遠にも感じる一瞬だった。驚くルベリエに言葉を返す暇さえ与えず、ヒューイがリセリアの細い手を引いて、今度こそ駆け出す。

廊下の角を曲がって見えなくなるまでその背を見送って　ルベ
リエの頬を、冷たい雫が伝った。

「リセリアが、大好きだって……」

「ああ」

声が、震える。カルダは二人が消えた方向を見据えたまま、ルベ
リエの肩を一層強く抱き締めた。

それはまるで大空のように、あまりにも大きな言葉だった。

今のルベリエだからこそ、分かる。込められたその言葉がどれだ
け深い意味を持っていたか、何でリセリアが今この時にそれを伝え
たのか。

『空の嫌われ者』。その言葉は、空から堕ちた時からずっとルベ
リエの中に突き刺さっていた。カルダもヒューイも、空に嫌われた
わけではないのだと言ってくれた。けれどももう自分の翼では飛べな
いのだと思つたびに、その棘は深く深く心の中に刺さり沈んでいつ
ていた。

その棘が今、まるで風に溶けるかのように消えていく。

リセリアは、分かつていた。ルベリエがずっとその事を気にして
いたことを。それを分かつて、理解して、ルベリエにその言葉を送
ってくれた。リセリアとして、そして空の化身として。

空に嫌われてなんかなかった。

子供のように泣きじゃくるルベリエの涙を、カルダが手袋を外し
た手で拭い取る。

肺一杯に空気を吸い込み、ルベリエはようやく顔を上げた。二人
が走り去っていったほうをカルダと見据え、

「なんかさ……」

ポツリと呟く。気品の欠片もなく鼻をすする様子に嫌悪を示すこ
ともなく、カルダが「ん？」とルベリエを見た。

「巣立つてく娘を見送る母親の気分って、こういう感じなのかしら
ね」

短い間だったけれど、共に過ごし、守り、色んな事を教えた少女。

その子が自分の意志で道を決め、歩き出した瞬間が今だった。

まだ何も知らない無垢な雛鳥が成長し飛び立つのを見送るのは、寂しい気持ちはあるけれども、それ以上に嬉しさがルベリエの心の中で花を咲かせていた。

「あー……うん。うん。そうだな」

まだ溢れ出る涙を拭うルベリエから目を逸らし、何故だか明後日の方向を向いてカルダが頬を掻く。照れ臭そうにする恋人を見上げるルベリエ。直後、その瞳は大きく見開かれることになる。

「……じゃあ、今度はちゃんと、実の母親にでもなってみる？」

少しだけ頬を赤らめながらも、真っ直ぐな瞳で告げるカルダ。

その言葉の意味が、分らないはずがない。

目の端に涙を浮かべるルベリエ。その顔は、まるで雛罌粟のように咲き綻んでいた。

ブルーバードを格納する倉庫に、人影はなかった。それでも周囲に神経を張り巡らせつつ、ヒューイは新たな愛機の元へ向かう。

「行っちゃうんだね」

愛機を前にどこからともなく突然投げかけられた声に、ヒューイとリセリアの肩が揃って跳ね上がった。反射的に、振り向く。

そこには、別の機体の陰から姿を現す見慣れた整備士の姿があった。

フェリオット　カルダとルベリエに続いて、この計画に賛同してくれた三人目の人物だった。この倉庫に人影がないのも、フェリオットが上手く人払いをしてくれていたおかげだ。

なんだフェリオか、とほっと胸を撫で下ろし、ヒューイは搭乗作業を続ける。

「人払い、ありがとうな」

「んーまあ僕に逃亡幫助の疑いがかからなければいいよ」

そう間延びした声で言って、フェリオットは慈しむようにブルーバードに触れた。フェリオットがこの機体に触れるのも、最後だった。

た。

「機体はいつもどおり　いつも以上に万全の状態にしていたよ。
燃料も満タン」

「……悪いな」

「いいんだよ。きつとこの子も、ヒューイたちと一緒にに行けるのを
喜んでるから」

そういつて美しい曲線のボディを撫でる。その手付きは子供を撫
でるかのようだった。いや、この機体の設計に関わっていたらしい
彼にとって、ブルーバードは我が子と呼べるのかもしれない。

その彼からこの機体を奪うことに、どこか後ろめたさを感じてい
た。これがフェリオットとヒューイ　ブルーバードと今生の別れ
ではないにせよ、この先彼がこの機体に触れられる機会は、ほぼゼ
ロなのだ。

いつか、いつかまたフェリオットの元にこの機体を届けられたら。
そんな考えが頭をよぎったヒューイに、フェリオットは思い出した
ようにああそういえば、と言った。

「　旅立つ君に、餞別をあげようかと思ったんだ」

リセリアを後部座席に乗せていたヒューイが何だろうと振り返る。
その瞬間、ジャキツという音と共に、ヒューイの眼前に黒光りする
銃口が突きつけられた。ヒューイが持っているのと同じ、軍に所
属する者へ支給される一般的な自動拳銃を汚れない軍手で握るフ
ェリオットが、ヒューイの目の前にいた。

「ヒューイ！　フェリオット……！」

荒げず、だが切迫した声でリセリアが叫んだ。身を乗り出そうと
する彼女を片手で制し、フェリオットを見据える。

「……何のつもりだ、フェリオ」

「だから、餞別」

今ここに来て、今更行く手を阻むのか、と瞳を細め、低く呻くよ
うに問うヒューイ。その頬を冷や汗が伝った。だが、返ってきたの
は相変わらずのどこか抜けた声だった。

「ヒューイ、僕に申し訳ないなんて思ってるでしょ」

今考えていたことを見事に当てられ、ヒューイは口籠る。

「いい？ 君は帝国に反逆するんだ。国が大事に抱えてるリセリアを攫って、単身大陸の外の世界に行かなきゃならない」

説き伏せるようなフェリオットの声は、淡々としていた。だが、その中に微かな苛立ちを滲ませている。

「僕は、そんな大事が後ろめたさを抱えた生半可な気持ちで達成できるなんて思えないんだよ」

だからね、と引き金に力を込め　フェリオットはヒューイに向けて微笑んだ。

「これは、僕から甘ちゃんな君への饞別」

甲高い破裂音が、倉庫内に反響した。けれどヒューイもリセリアも撃たれるどころか掠り傷一つ負っていない。

何が起こったのか。目を閉じなかったヒューイはその様子をはつきりと目に捉えていた。

撃った。フェリオットが自分で、自分の右足を。ヒューイが止める間すらなかった。

「っ……っ！」

痛みそのままに悲鳴が口から迸ろうとするのを堪えるフェリオットが崩れ落ちる。咄嗟にヒューイは腕を伸ばし、その身体を支えようとする。けれど、フェリオットの腕がその手を振り払った。

すす汚れた床に倒れこむフェリオットの右足太もも。そこから流れ出る出血量を見る限り、太い血管は傷つけていない。正しい治療を施せば、足に後遺症も残らず完治するだろう。

けれど、どうしてこんなことを。

言葉を失くし蒼白になるヒューイを床に転がったまま見上げるフェリオット。傷口を押さえた両手が、瞬く間に鮮血に染まっていく。「《空帝》ことヒューイ・ノルグス中尉は整備士を撃って戦闘機を奪い、空の化身を連れて逃亡した。いやー銃まで取り出すなんて、なんて凶悪なんだろう。捕まったら大変だね。射殺命令が出るかも

ね」

フェリオットは、笑っていた。額に脂汗を滲ませながらも、笑顔を浮かべていた。気力で作ったその笑顔を、ヒューイは見たことがある。

「今の銃声、結構遠くまで響いただろうなー。もうそろそろ起きてる人も増えてきてるだろうし、耳にしてる人も多いんじゃないかなー」

「……馬鹿野郎」

フェリオットが見せてくれた心からの笑みに、彼が何をしたかったのか理解する。思わず張り上げそうになる声、目から零れ落ちそうになるそれをヒューイは必死に堪えた。

「ほらほら、何してんのさ。早く行きなよ。銃声を聞きつけて直ぐ人が来ちゃうよ」

動かない片足を引きずり、フェリオットが機体から距離を取る。

生々しい血の跡が、フェリオットが最も汚したくないであろうこの場所に広がった。

「ありがとう」

背を向けて、伸ばした右腕の親指を立てる。フェリオットが親指を立て返す様子なんて、見なくても分かった。

操縦席に、乗り込む。エンジンを入れると、滑らかにプロペラが回りだす。ゆっくりとゆっくりと機体が倉庫内を滑るように動き出す。フェリオットの手によって開け放たれていたシャッターをくぐり、滑走場へ向かう。

親元を飛び立つブルーバード。その姿が見えなくなっても、フェリオットはいつまでもその翼を見つめ続けていた。

ヴェルナー西基地より遠く離れた地　今はメテオールの手が入り込んでいるナディア皇国のその王城の一室にて。

「よろしかったのですか？」

「何がだ？」

背後からかけられた厳格な声に、窓の外目を向けたままイスカは訊ね返した。ぼうつとしたその眼差しに反して、その声は鋭い。

イスカの側近の一人　父を支え、そして父亡き後は王座を継いだイスカを支え続けてきてくれた男は、娘ほどの年齢であるイスカの切り返しに一瞬ぐつと言葉を呑みこんだ。

「……共に、行きたかったのではないですか？　奴と」

奴、と。礼儀を重んじるこの男が苦々しさを込めて呼ぶ相手を脳裏に思い浮かべ、イスカはそつと瞼を閉じた。もう思い出の一つになりつつある彼を思い出すことに、少しだけ抵抗を感じる。思い出の中のこととして、封じ込めなくてはいけないのだから。

「いいんだ」

瞼を開け、イスカはそつと目を開けた。窓から差し込む眩い太陽の光に思わず目を細め、それでも空を見上げる。もう鳥籠ではなくなったこの空は、たった少ししか話したことのない可憐な少女の笑顔のように澄み渡っていた。

「私は籠の中で構わない。同じ籠の中に、守るべき大切な民がいるのだから」

一緒に行こうと思えば行けたのに、イスカはこの大陸に留まる事を選んだ。

たった数年。忙しい自分と彼とではその中のほんの僅かな時間しか共有できなかったとしても、彼と共に時を過ごせた記憶は、イスカの中に確かに宿っていた。

思い起こしても、幸せな時間だった。彼と共にいる間だけが、女王である自分が、女王でなくただのイスカとして共にいられたのだから。それがたとえ友という、見回せばどこにでもあるような関係で終わってしまったのだとしても。彼はイスカを王族としてではなく、心からイスカとして接してくれた。

それだけで、十分だった。だから、イスカは籠の中の鳥であり続ける。

「さよなら、アルクス」

与えてくれた気持ちの換わりは、空の元へ行く翼　今もどこかの空を目指して飛び続ける彼を心の中で見送り、イスカは踵を返した。

籠の中の小鳥を守るため、やるべきことはいくらでもある。

* * *

穏やかに晴れ渡った空の静けさを、機関銃の爆音が打ち破った。空の化身を連れての逃亡は倉庫での一件と、軍の予定にない離陸を行ったことであつという間に露見した。ヴェルナー西基地を飛び立ったブルーバードを、同じ基地から離陸した手練れの操縦士が追う。

嵐のように降り注ぐ銃弾をすり抜け、ヒューイは北を目指し続けた。

「チツ……！」

あまりにも容赦のない砲撃に思わず舌打ちする。あいつらこつちにリセリアが乗ってるの分かってるのか、と疑いたくなるような撃ち方だった。

絶好の観覧日和だというのに、景色を眺めてる余裕なんかあったものではない。後部座席のリセリアといえば、息をする間もないくらい連続するアクロバット飛行に、酔わないようにするのが精一杯のようだった。

現在の追手は六機だが、おそらくまだ増える。空の化身という稀少な存在へのメテオールの執着心を考えてうんざりしそうになる。

撃ち落とすべきか。そんな選択肢がヒューイの脳裏を掠めた瞬間。『悪戦苦闘、って感じかな』

この無線の周波数を知るはずがない男の声が、耳に届く。視界を上から下に、夕焼けのような深緋色がよぎったのはそれとほぼ同時だった

疑問の声も上げる間もない。

追尾して来ていたメテオール軍のその先頭の機体が暴風雨のような音と共に無数の銃弾に貫かれた。エンジンと主翼をボロ布のように打ち抜かれ、ゼニス・ブルーの機体が地に堕ちて行く。間髪おかず下から突き抜けてく深緋色が、連続して二機の翼を線上に撃ち抜く。まるで切り込みを入れたかのように、二機の片翼は折れ曲がって落下していった。

瞬く間に、飛んでいる機体は半分になっていた。

（　　ったく、馬鹿が増えた……）

こんな馬鹿な真似をするのは自分一人で十分だというのに。呼んでもいないのに翔けつけたその馬鹿の機体を見上げ、ヒューイは思わず苦笑した。

「　　アルクスっ！」

ヒューイの重罪に加担するその馬鹿の名を、リセリアが弾む声で呼んだ。目を細めて、満面の笑顔を浮かべる彼女と共に、太陽の中を飛ぶアルクスの新しい機体　　赤血色ではなく夕陽の赤に染められた機体を見上げる。

「お前も大概、馬鹿だな」

『お前一人にリセリアは任せて置けないからな！』

まるで旧友に言葉をかけるようなヒューイに、アルクスは声を張り上げた。戦場には相応しくない陽気過ぎる声に、今度は苦笑ではなく声を上げて笑った。

この日が来て　　この日が来る前からヒューイは、心のどこかでこうなる事を確信していた気がする。帝国軍全部を敵に回すような無謀とも思える行為をできるのは自分と、そしてアルクスぐらいだと。そしてアルクスが、リセリア放っておくはずがないと、直感で分かっていたから。

危機を救った赤い鳥が青い鳥に翼を並べる。

「馬鹿だよ。ほんとと馬鹿だ」

『馬鹿はどっちだったの』

戦場だというのに声を上げて笑うヒューイに釣られるように、ア

ルクスが声を上げて笑う。リセリアも笑う。

心強かった。かつて敵だった相手だというのに、こうして翼を並べられることがこんなにも嬉しかった。

三人は静かに、遙か遠く　まだ見ぬ外の世界の空を見据える。

その時、三人の誰もが同じ気持ちを感じていた。

行こう、と思った。

「行くぞ！」

アルクスとリセリアと頷き合い、ヒューイはエンジンの出力を上げた。

まず向かうのはフリーエレンの北西島基地。そこを占拠し、燃料を補給する。そしてその先へ、鳥籠の頂上で見た地平線の大地へと向かう。

たった二機で、まだ見ぬ地を目指す。

それがどんなに無謀な挑戦なのだとしても　翼を阻むものなどないこの空を、今ならどこまでだって飛べる気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0272ba/>

空色のリセリア

2011年12月31日20時59分発行